
D.C.・リリカルなのは—神の名を持つ剣士—

こばちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・リリカルなのは―神の名を持つ剣士―

【Nコード】

N0344T

【作者名】

こばちゃん

【あらすじ】

旧タイトル『D・C・R・N』です。なぜかリリカルなのにRと書いた馬鹿作者。だったら、修正するしかないじゃないか！

爆破テロにより、家族と親戚を奪われた二人の男女。二人は剣と針と鋼系を持ち、テロリストを追う。

その道が人の道から外れようとも・・・

少年は闇の中から光りの世界へと帰ってきた。そして導かれるよう

に魔法と関わりあう。なにを成すべきかわからぬまま。

第0話・終焉・（前書き）

初めまして。このサイトで書かせてもらっているアクセルです。
小説を書くのは初めてなのでまだまだヒヨっ子ものですが話を重ねることにレベルアップをしています。

第0話 - 終焉 -

数年前、ある家が爆破テロにあった。

テロにあった日、その家には家族の者だけでなく親戚一同も集まっ
ていてみんなが犠牲になった。

一人の女性が娘を病院に送り、悪い予感がして急遽家に戻って
みたら、家は無残にも破壊されていた。

——なにが、あった・・・

女性は周りを見る。

吹き飛ばされた家、折れた木々、えぐられた地面

他の、人は？

角を曲がった時、信じられないものを目にした。

——っ！ ひどい！

辺りには真っ赤になった地面と千切れた腕や足。他にもあるが正
直目に入れたくない。

——静馬さんは？

女性は自分の夫の事を思い、必死に探す。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

——静馬さん・・・

夫はいた。四肢も繋がっている。しかし、もう目を開けることは無い。

最愛の人を失い、女性の目から生気が消えていく。

「だ、れか・・・」

小さく、消え入りそうな声。しかし女性にははっきり聞こえた。

声のする方向は、子供たちが遊んでいた場所！

大人たちが庭などで話している時、子供たちはいつも広間に集まって遊んでいる。

女性はおぼろげな足で、動き出す。

「だ、れか・・・」

戸に向かつて震える手を伸ばし、少年・・・いや、幼い男の子は助けを呼ぶ。

男の子の体は血まみれだが、これは男の子のものではなく『上に乗っているモノ』のだ。

「死にたく・・・ない」

——ぼくはまだ、あの人をこえてないのに。きょうはしずまさんにぼくの剣を見てもらえるのに・・・

「だれか、いるのか？」

障子越しに聞こえた声と人の影。男の子は必死に言う。

「ここです！　ぼくはここにいます！」

「その声、純一君か！？　待ってる。」

「はやく、はやくきて・・・かあさん！！」

火が付き、ボウボウと燃えていく屋敷と呼ぶに相応しい日本家屋。誰に知られることなく生き残った二人は家を後にする。

女性は少年を病院に連れて行き、娘を兄に預ける。

病院の廊下で医師に宣告されたのは「手の施しようが無い・・・」
と言う絶望的な一言を伝え、医師は去る。この言葉に美沙斗は夫を
失っただけでなく、ただ一人生き残った幼い命を救えない自分に、
神に呪う。

「御神美沙斗さんですね？ あの子供を救えると言ったらどうしま
す？」

黒いスーツを着た悪魔の声に、美沙斗の返事は決まっていた。

第0話・終焉・（後書き）

まずは第0話を執筆終了。

初投稿なので不備がないかドキドキです

指摘により、一部加筆修正しました。

第1話・復讐・（前書き）

今回は残酷描写がありますのでご注意を。

第1話 - 復讐 -

パシャツ・・・パシャツ・・・

――アイツの足音が聞こえる。

バシャツ、バシャツ、バシャツ

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、」

スーツを着たアジア系の男が暗い廊下を必死に走る。

足元にはおびただしい数の死体と流れた血が赤い水溜りとなったり固まったりしている。

パシャツ・・・パシャツ・・・

長い間走ってるのにヤツの足音が離れない。俺は恐怖から後ろを振り向く。

「うわ!」

硬い何かに足をとられて床に倒れこむ。

見つけた・・・

呪詛のように耳・・・いや、頭の中に響く声。反射的に胸元に入れた銃を取り出す。

「あとは、お前だけだ。」

流暢な日本語を使うガキ。その手には剣を持って体は返り血まみれ。

「うわあああ！」

俺は銃をガキに向けて引き金を引く。

……

……

……

あれ？　なんで音がしねえんだ？

「期待していたのはこれ？」

ガキが何か投げてきた。

あれ、なんで腕と俺の銃をガキが投げてきたんだ？　俺の銃は？

あれ、なんで俺の腕と銃が無いんだ？

自分の腕を見た瞬間、男は絶叫する。

「ぎゃああああ！　う、うでが！　うでがあ！」

「うるさいよ、オッサン。」

少年の刃は男の首に向かう。

「終わりました。」

顔や黒いボロボロのジャケットを着た少年は髪の高い女性に話しかける。彼の母親だろうか？

「そうか、ケガは・・・ないね。でも顔をこんなに汚して。」

女性はハンカチを取り出し、少年の顔に付いたモノをふき取る。そこには母親らしい丁寧な印象を受ける。

「はいキレイになった。」

少年は女性に目線を合わせない。しかし女性には解っていた。これが少年の照れ隠しであることを。

——この子はこんなことをする歳じゃない。だが、もうどうしようもないのか……いや、必ず希望はある！

女性は以前、テロによって最愛の夫と家族や親戚を亡くした。その折に女性は少年を保護し、治療から現在に至る。

この家族がテロにあった理由。それは少々複雑な経緯がある。

二人の実家、御神家は暗殺剣術の家だ。

正しい名前を永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術と言い、縮めて御神流とも言う。

二人は御神流の継承者で今のようなことを生業とするもの。

殺し屋

「次はどこ？」

「日本の海鳴だ。」

「・・・おれ、アイツは信用できないよ」

少年は黒いスーツにサングラスを掛けた男をイメージする。

「だが私たちが龍^{ロウ}に近づくにはあの男しかない。」

女性があの方と呼ぶ人物は「情報提供の見返りにこちらの依頼を遂行する事」という取引を持ちかけた者だ。

「日本に行く手筈はすでに整っているそうだ。それに次の依頼が完了すれば龍^{ロウ}のアジトの情報を出すそうだ。」

「・・・わかりました」

女性と少年は建物を後にする。

——日本に、海鳴に行けば希望はある！ 私は無理でも、この子だ

けでも！

この日、地元メディアは地元マフィアが一夜にして壊滅したことを報道。当局では「対立マフィアによるものとみて」と発表した。

第1話・復讐・（後書き）

今回は初めてルビを使って見ました。
またも不安でいっぱいです。

あと息を吐く描写や走る描写。とにかく課題だらけですね。

次回から二人は海鳴へ。大まかな流れはありますが後はどう文章にするか。
うーん難しい。

人物設定（前書き）

今回は設定・紹介のみです。

人物設定

名前：御神 純一 みかみ じゅんいち

性別：男

年齢：9歳

容姿：目よりやや下。少し長い黒髪の日本人。普段の表情はやや気だるさを纏っている。

性格：本来は面倒くさがりながらも心優しい少年なのだが『仕事』時は一変。人を傷つけることに迷いもためらいも持たない冷徹さを見せる。

備考：両親に連れられて御神の家に居た時に爆弾テロに遭い、両親と死別。その際、ショックにより記憶喪失、というより『記憶が書き換わる』という事態が起こり御神美沙斗を実の母親と思い、静馬（故人）を実の父と思い込む。

また、御神流に関しては「静馬に次ぐ天才児」ともいわれており、実力は同年代の中でも抜き出ていた。

命に関わる重症を負うも奇跡的に回復。以後は美沙斗とともに龍^{ロン}を追っている途中に海鳴に着く。

海外生活もあるが日本語しかできない。

名前：御神 美沙斗^{みかみ みさと}

性別：女

年齢：30代前半（一部では32歳とも）

容姿：黒髪を背中まで伸ばし、ポニーテールにした日本人。普段から目つきが鋭いが家族や親戚などには柔らかい表情を見せることもある。

性格：本来の彼女はしとやかな性格なのだが龍^{リウ}により最愛の夫を奪われたためか非道な性格になっている。しかし、純一を闇の世界へ巻き込んだことへの罪悪感からか時に母親の表情を出すこともあり、一概にどちらとは言えない。

備考：現在存在する御神流の使い手では最強と言っても過言は無い人物。特に彼女の放つ奥義は『一撃必殺』を体言するかのような技。龍^{リウ}への復讐と同時に、純一の記憶を戻す方法と光の当たる場所へと戻す方法を模索しているため、純一にはなにかに理由を付けて単独行動することがある。

人物設定（後書き）

「設定作ったかな？」と思って見渡す限り無いので急いで作りました。

再来週まで忙しくなるため、更新できない可能性（確立高い）があるので次話はお待ちください。

第2話・到着・（前書き）

まだ2話目なのにこの更新の遅さ…

第2話・到着・

海鳴市駅前

ここ海鳴市は山と海に面した町で山側には温泉、海側は海水浴を中心に店が並ぶ。

駅前には塾や商店が並び、活気のある町なのが伝わる。

駅を出てすぐにあるバス停。純一と美沙斗は並んで歩いている。

「美沙斗さん、ここでの仕事は？」

「……………」

「かあさん、ここでのおしごとは何？」

「母さんはここでお掃除の仕事をするんだよ。住む所は離れたところにアパートがあるからね」

先ほどの大人の言葉遣いとは真逆な、年相応の子供の言葉遣い。そして母と名乗る女性の言い方からそれが嘘だと解る。

「母さんは手続きがあるから純はどこかで遊んでなさい」

「うん！」

純一は特に行き先も無いまま、無邪気な子供のように走り出す。美沙斗はそれを見届けると、目的地へ向かう。

純一は海鳴臨海公園に来た。

- 駅前を道なりに進んだ時の地図はもう頭の中に入れた

ベンチに腰かけ、辺りを見回す。

- 休日の昼というのもあり、様々な人がいる。ジャージを着て、耳にイヤホンを挿したまま走る若い女性。小型犬と散歩する老人の男性。野球のユニフォームを着て肩から下げたエナメルバッグを揺らしながら「今日どこであそぶー?」「ケンの家にしようぜー!」新しいゲーム買った。って、言ってたぜー!」と言いながら午後の予定を決める同年代の男の子。以前の自分も居た日常という世界。だが今の自分が居るのは平穏とは無縁の血生臭い世界

「ちよつとアンタ」

- -そして自分の周りには誰も近づかない。まあ、当たり前か。俺に関わるやつなんて

「アタシの話を聞きなさい!」

「うわっ!?!」

純一の前には長いブロンドのストレートヘアにエメラルドのよ
うな瞳の色の少女が仁王立ちで立っていた。

「ねえ、アンタこの町初めてでしょ」

――疑問ではなく確証を持つて聞いてくる赤いジャージのブロンド女。なんだこの女？ 町の人間全ての顔を覚えていたならこの質問にも納得がいくが、そんなのはまずありえない

「え……うん………」

弱気な少年を装い、力なく頷く純一。纏うオーラにはいじめられっ子な印象がある。

「今日学校の人々とサッカーするんだけど一人足りなくてね。アンタ暇なら一緒にやらない？」

変に断って変に顔を覚えられるのも面倒だ。純一はそう思い、返事を出す。

「いいの？」

表情は暗い表情から一転、明るい表情へ。

「もちろんよ！ さ、決めたらさっさと行くわよ。今日こそあいつら倒すわよ！」

ブロンドの少女は純一の手を取り、ぐいぐいと引っ張りだす。今知り合った男の子に対して馴染みの深い友達に言つかのように出る言葉。活発な少女であることが伺える。

「アタシはアリサ。アリサ・バニングス！ アンタは？」

「ぼくはみかみ純一」

「じゃあ純一ね」

臨海公園を走る二人の子供。傍から見れば仲のいい友達。しかし純一にブロンドの髪と相まって太陽のような笑顔を向けるアリサは純一が住んでいるのが血生臭い世界であることを知らない。

河川敷公園

臨海公園とは別の駅前の公園に続いて三番目の公園。駅前を歩いている時、最初に見た公園を児童公園とするなら臨海公園は散歩や憩いの場とする公園。最後にこの河川敷公園は野球やサッカーなど、スポーツ公園と捉えるべきだろう。

そして河川敷公園のサッカーグラウンドには純一を含め、20人1チーム10人と考えればチームを「イレブン」と呼ぶサッカーでは一人足りないが子供たちはスポーツ少年団でもジュニア選抜チームでもないので人数が合わないのは仕方ない。

「みんなー、助っ人連れてきたわよー！」

赤のビブスを着たチームにアリサは純一を引っ張ったまま入る。どうやらこちらがアリサの所属するチームのようだ。

「赤…ということはこちらはチャンピオンか？」

格闘技の試合と混合したことを考えながら純一は紹介を始める。

「み、みかみ純一です。よろしく……」

「初対面の相手に緊張している子供」という風を装いながら純一は一礼と自己紹介をする。

「あ、アリサだ。助っ人ってそいつかー」

「友達ー？」

「さっき海沿いの公園で見つけたからスカウトしたのよ。ほら、純一ってなんか強そうじゃない」

「そおかー、なんか弱そうじゃね？」

「なるほど、言動で判断するわけか。なら、その期待を裏切るか

「あの、ボクフオワードやっていい？」

「そうね、元々フオワードが一人欠けてたから純一にやってもらいましょう。連れてきたアタシと純一のツートップね」

不穏な展開になることを想像したのか、アリサは強引にポジションを決める。

…

…

…

結果は4対2で赤チーム。純一とアリサが所属するチームの勝利となった。

「すげえんじゃんジュンイチ！ ハットトリック出すなんて！」

「ジュンイチってプロ！？」

「ううん、運動はちよつととくいだから」

先ほどまでのどこか弱気なオーラは消して、声は小さめだがはっきりと純一は言う。

「ま、アタシのアシストがあつたからよね」

「アリサは1点しか入れてないじゃん！」

「純一のアシストをしてたから仕方ないでしょ！」

「バニングスちゃんの言うとおりだよ。アシストがあつたからとてもやりやすかった」

「お、ジュンイチがアリサのこと好きだったさー！」

「ケツコンしきはいつですかー？」

「ちょ、ちょっと、あんたらなに適当なこと言ってるの!!」

純一とアリサをからかう男の子二人にアリサは拳を握りながら反応する。

・・・悪くない

純一は素直にそう思った。

第2話・到着・（後書き）

今回は「小説の書き方」というのを調べて書いていきました。
元祖3人娘の一人、アリサと接触の回でもあります。

話は変わりますが、小説の書き方を調べていくといろんな事（方法や注意事項）がありますね。

3点リーダーの使い方や人物描写。今回は3点リーダーに目線を置いて書いていきました。

第3話・暗躍・（前書き）

今回は二人の仕事の打ち合わせシーンです。一名ほどオリキャラがいますが『村人A』並みの存在です。

第3話・暗躍・

海鳴市郊外

今は廃墟となった夜の建物の中で親子と二人の男が話す。

「近々この海鳴でチャリティコンサートがあるのは知っているな？
二人にはそのコンサートを開始直前に中止してもらおう」

「ま、お子ちゃまには他にも簡単な仕事をやらせてもらっくんすけどね
」

二人の男は黒スーツをと黒いネクタイ、夜の明かりの無い建物の中でサングラスという格好。最初に話した金髪の男が雰囲気からして先輩。後に喋る軽い口調の髪を染めて茶髪にした男が後輩といったところだろう。そしてこの空間には緊張、というより恐ろしさが混じった空気が流れる。

「なぜ……開始直前まで動くな、とは……なぜ」

「さあね、俺はただの伝令だからな」

「……たかがコンサートに、ここまでする理由がわからないな……」

「このコンサートの収益を知ってるかい？ このチャリティには莫大な金が動く。それが成功すれば損をする人たちがいてね」

「あ、この仕事はアナター人でいいッスから。代わりにボクちゃんには別の仕事があるんで」

「私には、関係の無いことだ……それよりも……」

「龍^{リウ}のこと、だろう。この仕事が達成できれば念願の情報を渡すさ。しかしよくそんな事に……」

「……………」

美沙斗は金髪の男に威圧するかのような視線を向ける。

「……ま、互いの事情はどうでもいいさ。これまでと同じ、ギブアンドテイクだ」

「さてと、コツチの話はまとまっただみたいだし、ボクちゃんと俺は別の部屋でお仕事の話をしようか？」

不快感を煽る口調で茶髪の男は純一と別の部屋に行く。

「さてと、ボクちゃんのお仕事だけど、この子たちのお友達になっ
てほしいんだよね」

茶髪はスーツの内ポケットから二枚の写真を取り出し、純一に渡す。純一は二枚の写真を見る。

「友達になった後は？」

「いつも通り、こっちで指示する場所まで連れてくる。それだけだ

「よ」

「なるほど、友達になって連れて行く。それだけの事なら今までやってきた事と同じだから楽だ」

「こっちのブロンドとはもう接触した」

「マジで！ いやゝさすがあの人の息子さん、お仕事早いねゝ」

「母さんのことを褒めてくれるのはうれしい。でも、コイツはなにか気に入らない」

「おっと、そうだ。実は連れてくる時に条件があつてね。二人一緒にじゃないといけないんだ」

「どうして？」

「なゝんかこの二人い、かなり親しいお友達みたいでさゝ。片方やったらもう片方は警備が厳しくなるんじゃないのかなあゝ？ って上の人が言っただよねゝ」

最初から今まで、間延びした言葉で話す茶髪の男にイライラするが純一はこの男との付き合いは短くないので気にしない。

「ま、こっちのジャパニーズガールは警備無いみたいなものだからラクショーだろうけど、こっちのパッキンはサメジマとかいう執事がついてるから攻略はムズカシイかもねゝ」

茶髪の男はウェーブのかかった紫色の髪の女の子を最初に指し、次にアリサを指した。

「そのサメジマっていうのはどういうやつ？」

「それが情報が余り入ってこなくてねえ。若いころは軍隊に所属していた、とか……他にも要人のボディガードをしていたとか……とにかく確かな情報がないんだよねー」

- 情報化社会と言われる現代で相手の情報が少ないか……サメジマとの接触は避けるべきかな？

だがサメジマとの接触が少ないということはアリサとの接触が少ないという事態もありえる。そうになるとこの仕事の第一段階のクリアが難しい。

「サメジマってやつもパツキンにベツタリってわけじゃないみたいよ。現に今日はパツキンについてなかったみたいだしウミナリの屋敷もほとんど一人で管理してるしさ。ま、方法はボクちゃんに任せよ。オレっちは他の仕事もあるからむ行くね」

終始軽いノリと口調で話していた茶髪の男は去り、純一は暗闇の中で結論を出す。

- まずは紫に接触するか

写真を裏返すとそこには少女達の簡単なプロフィールが載っていた。

第3話・暗躍・（後書き）

この話以降、純一・アリサ・紫の髪の少女との話が続きます。

戦闘シーンに関しては・・・純一の仕事の段取り上少ないかも・・・

第4話・異性・（前書き）

今回はすずかとの接触編。私の向き不向きか、アリサのときより長いです。

第4話・異性・

図書館

どこにでもある公共の建物だがその蔵書量は計り知れない。

一人の人間が一生をかけて図書館の本を全て読もうとしてもそれは難しいだろう。

小学校の指定の白い制服で来てる紫色の髪の少女、月村すずかもこの図書館で本を読むのを日課の一つとしている。

一方でこういう場所に縁が無い少年、御神純一もここにいた。純一の場合、本を読むことが目的ではなく月村すずかとの接触が今回の目的だ。

純一が今読んでいるのはファンタジーの物語。あらすじはお姫様をさらった悪い国の王様に立ち向かう一人の勇者の物語。

・・・この物語と照らし合わせるなら俺は悪い国の兵士か

物語の序盤でお姫様の国を襲った兵士がお姫様を連れ去るシーンで純一はそう思った。悪い国の王様は茶髪の男、お姫様は月村すずか。勇者に関しては……自分の敵。そう想像しながら。

しかし月村すずかと接触するなら一人で来ている図書館が良い。と、判断した純一だが彼は図書館のルールで知らないことがあった。

それは『図書館では静粛に』の注意書き。

静粛とは『ひっそり静まりかえっていること』という意味で純一にもその意味は解る。

だがその結果『月村すずかと接触したくてもできない』と、いうのが現状だ。

なら、図書館から出て話しかければいい。というのは却下だ。いくら同年代とはいえ、知らない子に話しかけられて不審に思わない子はいないだろう。接触するなら意図的に『たまたま会った』という状況が一番だ。

本を読み終わったのか、二つ先の机で本を読んでいたすずかが立ち上がるのを確認すると純一も本を閉じて立ち上がる。行き先はすずかと同じ、本棚。純一が戻す本棚はすずかが戻す本棚の隣だが気持ちはすずかの方に向けている。

本を戻し、次に読む本を選定していると「うん……うん」と、背伸びのときに出るような声が聞こえる。

純一は声のする方を見るとすずかが爪先立ちで本の背表紙に指を伸ばしていた。

- 脚立を借りるか職員に取ってもらえばいいだろう。こっちにとっては好都合だけど

偶然にも、『たまたま会った』チャンスができたのだ。これを利用しない手は無い。

純一はそう思いながらすずかの近くに行き、目当ての本に手を伸

ばす。

「あ」

視界に突如映った自分より少し大きな手にびっくりしながらも、
すずかは隣の人に目を向ける。

「これでいい？」

小さな声で確認する純一にすずかは首を縦に振る。

「あの、ありがとう……」

「気にしないで。困っている人を助けるのは当たり前だから。はい」

優しい声で取った本をすずかに向ける純一。その仕草は好青年
ならぬ好少年といったところか。

「じゃ、ボクはこれで帰るね」

「あ、ちょっと外で待ってもらっていいですか？ この本の貸し出
し手続きが終わったらお外でしっかりお礼を言いたいんです……」

内気なのか人見知りするのか、すずかは消え入りそうな声で言う。

「いいよ、じゃあ入り口で待ってるから」

純一は先に出入り口へ向かう。

- - 計画以上だな。

純一はさすが次に読む本を知っていて意図的にその本を少し高いところに置いた。

……というわけではない。すずかを見たのは今日が初めてで彼女が読んでいた本は続巻があるわけでもない。本当にたまたまなのだ。すずかの行動も全くの予想外。純一としては後日、それをネタに話しかけるつもりだった。

すずかは「相手を待たせたら悪い」と思い、早足でカウンターに向かう。

……

……

……

「あの、お待たせしてごめんなさい！」

ロビーの自動ドアを出てきたすずかが開口一番に謝罪の言葉を純一に向ける。辺りは夕焼けにより、茜色に染まっていた。

「うっん、そんなに待ってないから気にしないで」

優しい少年の仮面を着けた純一はそう言う。

「あと、本を取ってくれてありがとうございました」

すずかは頭が水平になるまでしっかりと下げてお礼を言う。

「わたし、月村すずかって言います。『月』の『村』にひらがなで『すずか』です」

「ボクは御神純一^{ミカミジュンイチ}。イに卸す^{おろす}をくつつけた『御』に神様の『神』純一は純粹の『純』で一は漢数字の『一』。ちよつと長いね……」

後頭部をポリポリと掻きながら純一の表情には「どう言い直したらいいかな？」と考えているのが伝わる。

「御神くんだね。……うん、覚えたよ」

読書をする甲斐あつてか、純一の説明でも漢字をすずかはしっかりとイメージした。

「あの、月村さん。もしよかったらボクと………」

途中でどもる純一にすずかは「え、告白！？ と、思った。夕焼けの町で助けてくれた相手が告白。恋愛物のワンシーンのような状況だからそう思うのだろう。」

「ボクと………友達になつてください！」

「え？」

予想していたのとは違う言葉にすずかは呆けてしまった。

「……あの、やっぱりダメですか？」

すずかの返事の仕方から「ダメ」という意味と受け取ったのか、

純一は気落ちしたかのような表情と動作をする。

「え、あ、いや！　そういうわけじゃなくて……あの、いいよ、御神くん……」

夕暮れの町にモジモジあつた異性の友達ができた。

第4話・異性・（後書き）

アリサより長いだけでなく（自分の中では）恋愛物のプロローグ
みたいになってしまった…Why？

次回は・・・どうしようかな？

第5話・鍛錬・（前書き）

今回は純一の『日課』と『過去』です。

ぶっちゃけ純一の独白のような回なのですが（一応）最強主人公ではない以上、必要な部分と思います。

第5話・鍛錬・

海鳴市郊外

美沙斗と純一が住んでいる廃屋。時間はまだ朝日が昇っていないが、空が白くなっていることから日の出前だろう。純一は体内時計により、いつもどおり目覚める。

硬いコンクリートの上で黒く汚れた毛布をかぶって寝ていたので服も若干黒い。

上着とシャツを脱ぎ、肌着のランニングと半ズボンになるといつものトレーニングのために外に出る。

純一は朝の寒さを肌で感じ、呼吸を整えて走り出す。

- 目標距離は八キロメートル。コースは既に決めている。建物の外周を二周回り、神社までが折り返し地点

彼の毎朝の日課、ランニング。美沙斗に強制されたわけでもない。御神流の教えにあるわけでもない。彼が自分で毎日消化する数字。決まった距離を、決まったルートで、一定のペースで走るだけ。

- 腕につけたアナログ時計の針が十二を指したと同時に走り出す。建物の外周を二周回り、暗い森の中を下り抜け、アスファルトの上を走り続ける。下りも平坦な道もペースは同じ。しばらくすると神社前、石の階段がある。一段たりとも抜かさず、一定のペースで駆け上る。上り終えると折り返し地点の賽銭箱と近くに竹箒で境内を掃除する若い巫女さんが見える。相手もこちらに気づき、会釈

する。こちらでも走りながら会釈を返す。礼儀がなっていないがこれは仕方ない。相手も理解してくれるだろう。境内をグルッと走りぬけたら再び石段。今度は下りだ。ここも一段も抜かず駆け下りる。来た道を戻り、今度は森の中のぬかるんだ地面を走る。最後に建物の周りを二周してスタート地点にゴールして終了。

純一の時計は十二を指していて正確なタイムを出した事を想像できる。

純一は外壁の角にある蛇口をひねって水を出す。廃墟の建物に水が通っていることは驚きだが安全な水かどうかは解らない。蛇口が外にあることから、飲料水とは考えにくい。なら、どこかに雨水の貯水槽があり、そこから通っているのだと思われる。

純一はその水を当たり前のようにガブガブと飲み、更には顔まで洗う。だが彼からすればこんなのはまだ良い方だ。外国に居た時は泥水を当たり前のようにすすっていた時もあれば、ワニが出る河でバケツで水汲みしたこともある。河や水溜りのない場所では僅かな水を得るために刃を振るった事もあった。だがここで純一や美沙斗以外に水を飲むのは足元で「チュンチュン」と鳴く小鳥くらいだが小鳥相手に争う理由も無い。

……腹がへつたら変わるかもしれないが。

美沙斗がいらないか確認に向かうがもう姿が無い。純一が出る前はまだ横になってたはずだが……仕事だろう。

純一は昨日水洗いして干しておいた服に手を伸ばす。

- - 少し汗臭いな

それ以外は特にどうとも思わず袖に手を通して建物を後にする。

――さて、朝の早い平日だがどこに行こうか？

第5話・鍛錬・（後書き）

毎朝8kmの走りこみ。

私には5kmが限界です。ちなみに8kmは現在私が目指している距離です。立ちはだかる壁は『体力』と『出勤時間までのタイムリミット』（泣）

さて、話し変えて純一が次に攻略するヒロインは………たぶんいないですね。平日ですし。二トな純一はどこにいくのだろう？

つまり何も考えてないわけですね。はい。

第6話・光り射す世界への分岐点・（前書き）

今回は純一の知識とサブタイトルからわかるようにターニングポイントです。

え、早すぎ？ いやいや、そんなことはないですよ。

第6話・光り射す世界への分岐点・

海鳴市河川敷

アリサ達とサッカーをしたのとは違う場所で純一は野草を摘んでいた。

「これとこれは茹でれば食べたな。こいつは……毒持ちだったな

純一の手には多年草だが花期を迎えたツワブキをはじめ、クローバーなど、種類豊富な野草がある。

「しまった、カゴを持ってくればよかったな。そうすれば美沙斗さんにもごちそうが作れたのに

「草が食えるのか？」という疑問もあるだろうが草の中には食べられるものが数多く存在する。例えばお餅に練りこむヨモギは河川によく生えているシクローバーはマメ科の植物で分類としては大豆と同じだ。ツワブキは茎を食べるが花は彩りに良い。

余談だが、美沙斗はこういう知識は無い。以前、美沙斗一人で野草を摘み、調理したがその中に毒草があった。

幸い、致死毒ではなく、口がヒリヒリする軽い毒ではあったが食事のたびに毒が混じっていては敵わないと純一は率先して野草を摘むのが習慣になった。

彼が毒草を見分けられるのも、この毒草事件の後、野草のことを書いた本を熟読し、勉強したからだ。

「やあ、珍しいね。きみぐらいの男の子が野草の見分けができるのか」

不意に話しかけられ、純一は後ろを振り向く。

そこには背の高い大きな男がいた。前に向かってツンツンした前髪が特徴的な髪型の大人。

――いつの間に……

純一は美沙斗に叩き込まれていたわけではなく、経験から後ろの気配には敏感になっている。だがこの大人は気配も、足音もたてず、声をかけるまで後ろにいることすら気づかなかった。

「ああ、ゴメンゴメン。驚かしてしまったねえ」

右手で後頭部を掻き「驚かすつもりはなかったんだよ」という風な苦笑を浮かべる大人

――こいつがサメジマか？

情報が入らなかった謎の人物。アリサの執事。格好は白いポロシヤツにGパンと「我が家のお父さん」をイメージした格好だが……

「……はじめまして……」

アリサの時と同じように気弱な少年を装う。

「こらこら、声が小さいぞ。男の子はもっと大きな声で挨拶と自己

紹介だ。よいしょ！」

大人は純一を両脇から抱え、「高いたかーい」をやるように持ち上げる。

「みかみ……純一です」

「うーん？ そんな小さな声じゃあ聞こえないなあ」

大人は目を閉じ、耳を純一の方に向けて言う。

純一は「すうつ」と大きく息を吸い。

「みかみ純一です！」

河川敷中に響きそうな大声で叫んだ。

「よし、みかみじゅんいち君だな。名前は漢字ではなんと書くのかな？」

大人は純一を草の上に下ろす。

「イに卸す神様で御神。下の名前は純粹の純に漢数字の一で御神純一です」

「そうかそうか御神純一くんか。私は高町士郎。高い町に武士の士、野郎の朗で高町士郎だ」

- - 高町士郎？ どこかでそんな名前を聞いたような？

こうして純一は気づかぬうちに、御神の分家である不破の血筋の
士郎と出会う。

士郎の考えも想像しないで。

第6話・光り射す世界への分岐点 - (後書き)

今回は作品内のキャラクターを呼びました。

士郎「いやゝなんだか緊張するねゝ」

さて、今回はあなたが純一さんと出会いましたがこれはあなたと美沙斗さんの意図するところなのでしょうか？

士郎「もちろん。美沙斗とはこっそり連絡取り合っていたからね」

では純一さんの行動パターンは美沙斗さんから？

士郎「ああ。彼が野草集めるタイミングは聞いていたし河川敷にたくさんあるのは地元民として把握してたよ」

なるほど。話は変わりますがそういえば士郎さんは現在3人の子持ちですが長男の恭也くんとは昔どんな遊びをしていたのでしょうか？

士郎「主に御神流のチャンバラだね」

・・・なるほど、恭也くんは痛い思いばかりしてそうですね

士郎「確かに、あのころの恭也はよく泣いていたなゝ。ま、純一くんは剣から離れて普通の男の子として過ごしてもらいたいけどね」

普通、ですか。彼の場合は難しそうですが・・・

士郎「覚悟はしているよ。もういいかな？ 帰って純一君とお風呂

に入ろうと思つてね」

ああ、これは気が利かなくてすみません

士郎「気にしないでくれ。じゃあ、私はこれでおいとまさせていただくよ」

貴重なお時間を割いていただきありがとうございました。

さて、次回は湯煙のぼるお風呂シーンから。純一は明るい世界に帰れるか？

ああ、気がついたけど純一ってギャルゲの主人公らしく女の子に好かれるけど高町家の末っ子は純一と同年代の女の子だったけど、もし二人の間に好意が芽生えたら親馬鹿の士郎さんはどう対応するだろう？

第7話・戸惑いの心・（前書き）

今回は入浴シーンと記憶の回想が入っています。

第7話・戸惑いの心

高町家

庭付き一戸建てが二つほど入りそうなその家は和風建築だ。四方は塀で囲まれ、立派な門。中央に建つ家は二階建て。鯉や金魚は泳いでいないが池があり、角には剣道場もある。

ここまで見ると「古来から続く武士の家」といったのを想像するが高町家は武家でもないし剣道道場でもない。この家の夫婦は駅前の商店街で喫茶店のオーナーとチーフパティシエ。

「湯加減はどうか？ 純一くん」

「ちょうどいいです」

高町家の風呂場では士郎と純一は共に風呂に入っている。理由は……不衛生な言い方だが、純一が汚れているから。更には臭うのだ。

湯船の中で士郎は胡坐をかき、その上に純一を乗せている。

「ところで士郎さん」

「ん、なんだい？」

「庭の角に道場がありましたけどなにか格闘技でもやってるんですか？」

今は士郎自らシャンプーとヘアトニック。石鹸を馴染ませた夕オ

ルで洗ったため、臭わない。

「ああ、あそこは君と同じ流派の道場だからね」

「え？」

士郎は自然に言う。

純一は言葉を失う。

御神の剣の使い手はもう美沙斗さんと自分だけだと思っていた純一にとってこれは不意の一言だ。

「私と家族はあの家が集まって無くてね……」

士郎の声が少し落ちる。それがどんな複雑な思いなのかは士郎とその家族しか知らないだろう。

「あの中で純一くんが奇跡的に助かったのは知っていた。だが君はとても大きな怪我の治療のため、暗い……裏の世界に関わってしまった。だが美沙斗は君だけでも明るい場所に返すため今まで尽力していた。そして海鳴にすることが決まった時、それがチャンスだったんだ。今の海鳴には美沙斗からのリークでインターポールICPOをはじめ、国際活動可能な警察の精鋭が居る。その中には君や美沙斗を守るべく活動する人も少なくない。だから純一君はここで普通の生活を……」

そこで士郎は気づく。鏡越しに見る純一の目から涙が流れるのを。

「美沙斗さんは………そこ、まで………」

「ああ、私も美沙斗に何度も言っただよ『純一君を日の光り当たる場所に返したいならお前が連れて来い！』とね」

その言葉は説教や怒りの言葉より彼の純粋な願い。

美沙斗が純一の手を引いてこちらに来る情景。

それこそが士郎の理想にして現実にするべき姿。

「う、うう……」

まだ達成していないが、半分にも満たないが、大きく、一歩を歩んだ日。太陽が落ちるまで、純一の涙は止まらなかった。

夕方。

風呂から上がって時間がだいぶ経ち、涙によって腫れていた純一の目も元に戻っている。そんな純一は士郎とその妻、桃子とアルバムを見ていた。

「この人が君の本当のお父さんの朝倉宗一さん、こっちが本当のお母さんの朝倉美希さん」

桃子が指すそのアルバムには仲睦ましく一組の夫婦と一人の赤ちゃんと写っている。裏面には「純一と初めての写真」と、角ばった文字で書いてある。

「これは純一君が初めて家に来た時、初めて立ったのを撮った写真だ。我ながら力作だよ」

士郎が鼻高々に差し出す写真には畳の上でおぼつかない足で立とうとしている小さな男の子。裏面には女性が書いたのか、丁寧な字で「純ちゃんが立った!」と、いう字の下に別の筆跡で「がんばれ! 純一君」と、ある。

「どうかな、何か思い出せたかな?」

期待に満ちた顔で士郎が純一に聞く。そして、純一の答えは

「……………すみません、思い出せません……………」

彼の中では目の前にある揺るがない証拠と自分の記憶がまるで繋がらないことに混乱するしかなかった。自分には父、静馬。母、美沙斗とすごした思い出がある。

……………初めて木刀を持った日……………あまりの重さにプルプルと震えながらも自分の細い腕には大きな、太い腕を使って支えてくれた父さん。

木刀の重さに慣れても、ただ振り回すことしかできなかったのに「純一はすごいな、父さん手がしびれてきたよ」と言って楽しさを教えてくれた静馬さん。

台所に立ち、トントンと包丁がまな板を打つ音と、コトコトと音を立てる鍋。それを見ていた自分に「純一も料理してみる?」と笑顔で話しかける母。

父と並んで初めて美沙斗の剣を見た日。大きな丸太があつという間に粉々になった事に興奮し、美沙斗に詰め寄り「お母さん！今のどうやったの！ スゴイスゴイ！！」ピョンピョン飛び跳ねながら聞けば「今のが、お前が学ぶ剣なんだよ」と、優しい笑顔で答えてくれた美沙斗さん。

その中に、この写真の夫婦はいない。いや、いるはずがない。こういう普通の夫婦は。

「そう……で、でもゆっくり思い出していきましょう。宗一さんや美希さんのこと」

美沙斗から「特殊な記憶喪失」と聞いていたがこれほどまでに、と思ったのだろう。桃子はあせりながらも励ましの言葉を言う。

「そうだ明日は休みだから純一君の服を買いに行こう！ 純一君も男の子だカッコイイ服が着たいだろう」

- - 俺は、ここにいていいのだろうか……………

士郎の誘いに純一はただうなずくのみだった。

第7話・戸惑いの心 - (後書き)

次回、服への買い物へ。

純一は護衛がつきます。もちろん、元祖3人娘との交流も。

第8話―買い物と多重人格―（前書き）

服装の描写って難しいですね・・・サラサラと書いている人はすごいわ。

第8話―買い物と多重人格―

ショッピングセンター

複数の小売店がテナントを借り、商品を売買する施設。食料品を始め、衣類、雑貨、本などを売る店舗が多いが最近では家電量販店もショッピングセンターで店舗を開いている。

「さーて、今日は純一君に似合う服を買いまくるわよー！」

「「「おー！」「」」

「「「お、お……」」」

高町家女性陣。桃子、美由紀、なのはに加えアリスとすすか、フエイトまでいる。

士郎も同伴しようとしたのだが、あいにく喫茶店、翠屋の責任者が二人ともいないのは何かと問題なので桃子の^{つる}一声で居残りになった。

ちなみに声が小さかったのはすずかとフェイトだ。

――落ち着かない……

純一がそう思つのも無理は無い。つい先日まで“デート”に誘おうとした相手が二人も居るのに加えて自分以外は全て異性。正直居づらい。

「まずは冬服。各自1時間のコーディネート後このエスカレーター前に集合」

「「はい」「」

「「は、はい」「」

「では、一、二の……散！」

桃子の号令と同時に各自がお店を目指す。しかし例外がいた。

——ま、いいか

自分の服に無頓着な男であった。

——監視は………6人か。2人は囷、残り4人が本命か？

ただボーっとしているのもどうかと思い、純一は今朝のことを振り返る。

毎朝の日課である8kmのランニングをしていた時、隠そうともせずに向けてくる視線、視線、視線、視線。それには焦った「あの男の放った追っ手か！」と思ったがなにか違う。追っ手の視線というより見張っている感じがした。そこで「ああ、そういえば……」と、思い出す。土郎さんが行っていた事を。まあ、視線たちはランニングを終えるまで終始感じていたが。

リビングに入るとソファの上で新聞を広げた土郎さんに「おかえり。汗をかいただろ？ シャワーを浴びてさっぱりしておいで」と言われ桃子さんには「脱衣所に洋服があるからそれを着てね」と言われた。俺はそれに「はい、ありがとうございます」と、返した………今思うと事務的、というか機械じみていたか？ と感じる。俺はこれから“普通”の中で生きていくのだ。お世話になっている以上は笑顔で礼を言うのが筋だろう。

シャワーを浴び、汗でベタついた体をサッパリさせた後は桃子さんの用意してくれた服に袖を通す。白いシャツにメーカーのロゴだらうか？ ワンポイントが施されている。ズボンは生地の高いジーンズ。ジーンズ特有の青色は膝の部分を中心に薄れて白くなっている。年季が入っているのがわかる……まあ、今来ている服がそれなんだがな。

朝食の前に高町家の三人兄妹。長男、恭也。長女、美由紀。次女、なのは、に朝の挨拶をする。

朝から他所の家で「はじめまして」を言うのは不思議な感覚だったが。ああ、そういえばなのはだけ「は、はじめまして、高町にやのはです！」と、緊張したのか、噛んだ時には「にやのはか」と言ったら「なのはです！」と、少々怒られ気味に訂正された。

朝食を食べ終え、身支度を済ませたあと、高町家三人兄妹とたくさん話しをした。俺の今までのこと。美沙斗さんの事。これからの事。

特に美沙斗さんの話しの時は驚いた。美由紀さんは土郎さんと桃子さんの間の子供ではなく静馬さんと美沙斗さんの子供である事にその時は「俺は本当にあの夫婦の子供なのか……」と、呟いたのし

「つかり聞いていたらしく」「うん。私には弟も妹もいなかったから」と言われる。それからだ。俺の気持ちに明確な変化があったのは。

話しを終えてすぐだった。なのはの友人二人が来たのは。そして再び驚く。二重の意味で。一人は金髪ロングの髪にエメラルドの瞳の少女。アリサ・バニングス。今日は白いYシャツに赤いスカートと、一見地味な服装だが俺の中では活発なイメージがあるアリサには動きやすさを第一に考えたその服装は似合っている。

もう一人、図書館で思わぬ会話のきっかけが生まれた紫の髪の少女。長さはアリサ同様ロングだがこちらはウェーブがかかっているし前髪の方には白いヘアバンドがある。服は紫のラインが入った長袖の白いセーラーにロングのプリーツスカートこちらも白だ。セーラーに付いているピンクのリボンがアクセントを出し、清楚な感がある。

この“普通”の世界で生きる二人を暗い世界に連れて行くこうとしていたとも知らず、二人とも俺を見て驚く「え、純一!？」「純一君!？」その後、アリサとすずかはお互いの顔を見て言う「すずか、知ってるの!？」「アリサちゃんも!？」と。

その後、なのはの紹介で挨拶をし合う俺たち。だがこの二人に限らず俺も驚いた。なのは、アリサ、すずかの三人は小学校からの友達である事に。

士郎が純一のことをなのは達に紹介する際「親戚から預かった男の子で、なのはのいとこだ」と、紹介したが純一が暗い世界にいた事は教えてない。その事を知るのは士郎、桃子、恭也、美由紀。アリサの執事、鮫島。すずかの姉で恭也の恋人である忍と専属メイドのノエル。つまり、三人以外の大体の人は純一の事を知っている。

まったく、世の中は広いのかせまいのか……………かつたるい……

「じゅ〜んいちく〜ん」

「ん？」

顔を上げると買い物籠に服を入れたなのはが立っていた。

「服を決めたから試着してみて」

——そう言い、買い物籠をズイツ、と渡してくるなのは。俺はそれを受け取ると「ああ」と答えて試着室に入る。

「あ、みんなに試着室にいること伝えないと」

なのははポケットから携帯電話を取り出し、開く。カチャツ、という携帯電話特有の音の後、なのはは手早くキーを打つ。

「……………」

「な、なに？」

その様子をじつと見る純一の視線になのはは気づいて、メールを打つ手を止める。出会って間もない男の子になのはは少し緊張したような声で返す。

「いや、ケータイ押すの早いな。と思って」

「え、そうかな？ 普通だと思うけど」

「そうなのか？ 俺はケータイ持ったことないからわかんないけど」

そう言っただけなのは横からケータイを打つ手を見る純一

——にやにやにや！ ち、ちかいよ！

自分の横からケータイを見る純一。画面ではなく、キーを打つ手を見ていると思ってもすぐ近くに純一がいると思うとドキドキする。

なのは知らないが、暗い世界で生きてきた純一の目つきは鋭い。見る人によつては「鋭利なナイフのようだ」という見方もあれば「目つきの悪いボウズ」という意見もある。だが、なのはの目には同級生の男の子とは違う目つきに「かつこよさ」を抱いたようだ。

「と、とりあえず試着して！」

「あ、ああ？」

なのはに背中を押されながら強引に試着室に入れられる純一。意外な押しの強さに純一はびっくりしながら試着室に入る。

試着室に新しい服と共に押し込まれた純一はカゴの中から服を取り出してみる。パツと見たところ種類は白い厚手の上着と赤いシャツ。ノータックの体にフィットする黒いパンツ。女の子が選ぶにしても服が少ないのは他にもコーディネートしている人がいるため、

自分の勝手で時間を割くわけにはいかない。と、思ったのだろう。

純一はシャツとズボンを脱ぎ、最初にノータックパンツを穿き、シャツを着る。最後に上着に袖を通し、ファスナーを上げる。

「あ、純一君。今、上着きているのかな？」

試着室のカーテン越しになのはが話しかける。

「ああ」

「上着のファスナーは半分まで上げたらそこで止めてほしいなの」

——なの？　なんだそれは

なのはの語尾に心中ツツコミを入れながら純一はなのはの言われた通りにする。

「着替え終わった」

そう言っただけで純一はカーテンを開ける。するとなのはの他にもアリスとすずかもコーディネートを終え、買い物カゴが置いてある。

「白、赤、黒か……………なのはは手堅い方向で言ってたわね」

「体にピッタリする服が中心だけど純一君のような線の細い男の子にはよく似合うよね」

アリスとすずかの審査結果の良さにホッとするなのは。こういうセンスが試される状況では多くの人が緊張するだろう。

「さ、次はあたしよ。このあたしが直々にコーディネートした服だからね。感謝しながら着なさいよ」

自分に失敗などない。と、言いたげにアリサがカゴを渡してくる。なのはと違い、靴まで入っているようだ。

「ありがとうございました。アリサお嬢様！」

大声と共に突如、試着室で土下座をする純一。

「ちょ、なんで土下座するのよ!? あ、あ、頭上げなさいよ！」

純一の奇行にアタフタとし、叫ぶアリサ。声を聞いた人が「なんだなんだ?」と目を向けるがなのはとすずかは「なんでもないです。すみません、すみません」と謝る。

「あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・し・たー！ー！」

純一はなお、一言ずつ大声で。

「ああ、もうー！ あたしが悪かったから！ だからいいってば！」

「ふむ、そうか」

いきなり態度を変えた純一はさっさと立ち上がる。

「着替えるから覗くなよ」

文句を言われる前に純一はカーテンを閉める。

「誰がアンタの着替えなんて覗くか！ この多重人格者――！！」

サッカーの時とは違う純一にアリサは罵声を浴びせる。

第8話―買い物と多重人格―（後書き）

前半はまだ戻らず、後半は純一の性格が元に戻りつつも、まだ完全じゃない。そうイメージしました。

第9話―魔法と剣士・序―（前書き）

前書き

ついに純一は魔法と関わりあう。原作では出来損ないの魔法使いを自称した純一がこの作品ではどうなるのか？

第9話―魔法と剣士・序―

駅前・ファミリーストラン

ショッピングセンターから近いこのファミリーストラン。縮めてファミレスのメニューは和・洋・中と揃っており、家族連れに人氣が高く、値段も他店より安いのが大きな魅力だ。

反面、味は値段に比例しているが魅力の大きさに比べたら気にするほどの事も無い。

二時間の買い物の後、七人はここでお昼を食べることにした。これだけの人数だ。好みも人それぞれ。金のかかるお店に行こうものなら高町家の財政は火の車だ。しかしワンコイン、五百円で食べれるとして七人。トータル約三千五百円。純一の服の代金より圧倒的に安い。

注文を終えた一行は早速さきほど購入した服の話題に入る。現在服はショッピングセンター内のコインロッカー二つの中に保管されている。

「やつぱ純一君くらいの男の子はヒーロー物のパジャマくらいないとねえ」

「でも母さん、なにも戦隊物まで手を伸ばさなくても……」

「なに言ってるの美由紀。恭也が小さい頃こっぴつを着た写真があると思う!？」

「そういえば……ないような気も、する」

最初に桃子が手を伸ばしたのは昆虫をモチーフにした某ヒーローがプリントされたパジャマ。だが桃子が「戦隊物もいいわね!」と言い出すとサイズの合うものを取り、試着もせずに購入。

美由紀はスポーツウェア一式を選択。他の誰がコーディネートした物よりも安かったが「美由紀、あなたねえ……」「お姉ちゃん、なんでスポーツウェアを……」家族から呆れと抗議の評価を貰う。それに対し美由紀は「え!？」だって純ちゃん毎朝走ってるからこういうのいるでしょ!？」と反論するが「はあっ……」最後はため息まで吐かれるのだった。

「そういえばずずかちゃんがコーディネートしたのは結構大人っぽかったよね」

「あの……変？　でしたか。美由紀さん」

「ううん。純ちゃんはああいうのも似合うから」

何気ない言葉は時に無自覚の悪意となり、相手を傷つける。

「つまり美由紀さんは俺のことをジジクサイ。と言いたいわけですね」

だが純一のような人間相手にはその言葉も時には別の波乱を呼び起こす要因にもなりうる。

「い、いや！　そういう事じゃなくて!」

「お姉ちゃんヒドイ！ 自分より若い子にジジクサイなんて。なのはは大変怒ってます！」

「あゝ、なのはまでえ！ 私が言いたいのはそういう事じゃなくて――」

果たして誰がこの波を打ち消せるのか。元凶である純一にもそれはわからない。

――そういえば何かの本で読んだことがあるな「男は井戸のそばに近づくな」と。

これは昔、井戸のそばで女性が集まり、他愛の無い話。井戸端会議の中に男が近づけばそれに巻き込まれ、長話につき合わされて貴重な時間を失う事から避けるために作られた言葉とも言われている。

――女三人集まれば姦^{かしま}しいと言うが、六人集まればなんと云うんだろうな……

注文したうどんセットをすすりながら、純一は考える。時折話しを振られてくれば適当に返す。女性陣もそれを聞いた後はすぐ井戸端会議を再開する。

女性陣が料理を手につけた時、それらは既に冷めていた。そして純一はうどんセットを完食していた。

夕方

高町家の二階の部屋。以前は客間として使われていた和室は現在は純一の部屋として使うことが決まった。

部屋は木製の天井に若草色の壁と畳。壁一面の襖を開ければそこは押入れになっていて中には布団と衣類の収納ボックスがある。

今日買った服を収納ボックスに納め、今来ている服を脱いで美由紀が見繕ったジャージセットの一部、半そで半ズボンを着る。

脱いだ服をたたんで部屋の脇に置き、引き戸を引いて廊下に出る。

――あゝ、息苦しかったあゝ！

反対側の壁に体を預け、純一はため息を吐く。いったい何が息苦しかったのだろうか？

――なんなんだよあの部屋。部屋中に隠しカメラはあるわ盗聴機はあるわ。刑務所だってこうはいかないだろう！

どうやら今朝の見張り同様、部屋にも監視の目があるらしい。しかし刑務所に監視カメラはあるかもしれないが隠しカメラや盗聴機まであるかどうかはわからない。

純一はもう一度ため息を吐くと重い足取りで階段を降り、リビングへと向かう。

リビング

「きゅ〜?」

ドアを開けて入ると足元から声がし、純一は足元を見る。

——ネズミ? カワウソ? イタチ?

体毛はキツネ色と白のツートン。よく見ると胴の長さから純一はネズミでは無いな。と、判断する。

ちなみにどれも外れだ。正解はフェレットだ。

純一は腰を落とし、フェレットを両脇から抱えて質問する。

「オスカ。お前、どうやってこの超人の巣窟ともいえる家に入った?」

「きゅ〜」

「ふむ『愚問だね、数々の潜入任務を成功し、女風呂にも入り、ネズミの王。ネ・ズーミ様から淫獣の称号を賜った僕からすればこの家の風呂を覗くなど児戯に等しいよ』だど?」

「きゅ、きゅ〜!」

純一のメチャクチャな解釈にフェレットは抗議の声と共に暴れる。

しかし純一、淫獣という言葉を知っているお前は何歳だ？

「なに！？『それだけじゃない、僕はキミと同年の女の子の裸も収めたのさ』だと？ なんていう奴だ。恭也さんへ突き出してやる！」

高町恭也。高町家の長男で現在大学生。月村すずかの姉、月村忍と両親公認の交際中。なのは限定で重度のシスコン。美由紀には厳しい。

もしそんな人物に純一が言った事を一部でも伝えたら恭也はこのフェレットを恐怖の元、捌くのは間違いない。

フェレットは更に暴れるが純一の拘束はビクともしない。

——このネズミ、まるで人間の言葉がわかっていような反応だな……

純一はふと、そう思った。確かにここまで反応されれば誰でもそう思うだろう。

《（ユ……く、ん……）》

——ん？

《（な、の……ど………）》

——なんだ？ 耳鳴り、か？

後頭部のやや右側に響く不思議な声。純一はフェレットを手放し、

眉間に皺を作る。フェレットは駆け足でリビングを出る。

お前を選んでやる

第9話―魔法と剣士・序―（後書き）

後書き

最後の意味ありげな文。これは作品の根幹に触れるものであり、説明は小説内で徐々にやっています。

第9話―魔法と剣士・中―（前書き）

こちらは二人の魔導師を中心においた物語です。

第9話―魔法と剣士・中―

「全く、訳わかんないやつだったわ……」

「でも御神くんっておもしろいよね。わたしが初めて会った時とはまるで違うよ。なのはちゃんはどう？」

「私は今朝初めて会ったばかりだからよくわからないけど……純一君ってクラスの男の子に似てない？」

「あゝ、未だにスカートめくりとかしてる奴？ あんなんよか百倍タチ悪いわよ」

純一の買い物を終え、アリサ、すずか、なのはの三人はケータイショップに向かっていた。目的は純一のケータイを買うことだが当の本人は「電話ができればなんでも同じだろ？ そんなものより恭也さんとの試合のほうが大事だ」と、身も蓋も無いことを言う。せめて色やデザインに興味を持ってほしいものだ。

「ケータイはあんな事言ってたし……あいつ、デザインより機能性重視なのかな……」

アリサはそう言いつつ自分の服装に目をやる。女の子としてカワイイ服を着るのは当たり前だが、ふと思う。

——あいつ、こういうのは嫌いかな？

少し間を置いて気づく。

——な、なに考えてるのよアタシったら！　これじゃまるでアタシがあいつの事を！

好きみたい

そう思いかけるも、アリサはそこで考えを捨てる。

——アタシの好みとは全く違うわよ！　まず弱かったらダメ。見た目も悪かったらダメ。他にも……

そこでアリサは再び考える。

——サッカーの時アタシのアシスト付きとはいえ、一人で三点取るから弱くはないわ。見た目は……悪くないわね。将来性はあるわ。性格も今は子供っぽいけどもしかしたら、ってアタシはなにを！？

頭を抱え、純一になにかを期待するアリサの横ですずかが何気なく口にする。

「御神くんってどんな女の子が好きなのかな？」

……言い直そう。何気なく爆弾を投下した。

「ふえ！？」

「す、すずか！？」

思考のるつぼにはまっていたアリサはともかく、なのはまで激しく反応する。

「髪は長いほうが好きなのかな？ それとも短いほうがかな？」

すずかは自分の髪を触りながら言う。ここまで言うとなすずかは純一に好意を寄せているのが伺える。

「ねえ、すずか……あんたまさか、あいつが好きなの？」

いくら親しい友人とはいえ、これを聞くのはどうかと思うが聞かすにはいられない。アリサはそう思った。

「うん、好きだよ」

《（なのは……なのは！）》

突如、なのはの頭の中に声が響く。これは念話という魔法で相手と秘密の話ができる。現にアリサとなすずかは聞こえておらず、なのはより少し前の方で純一の事で話しが盛り上がっていた。

《（なに、ユーノくん？）》

ユーノ、という人物が誰なのかはわからないが魔導師しか使えることのできない魔法を使える以上、なのはと同じ魔導師だろう。

《（まだ小さいけど、ジュエルシードを感じる。あの子より先に封印を！）》

《（うん！）》

「アリサちゃん、すずかちゃん、私ちょっと急用思い出しちゃった！」

「ちょ、なのは！？」

「なのはちゃん！？」

二人の返事を聞くより早く、なのはは駆け出す。ユーノとの約束『二十一個のジュエルシードの回収』と自分が望むことのために。

臨海公園

夕方、冬の外気と海風の冷たさが肌に刺さる。そんな所に昼間と違って人は少ない。

そんな場所に一人の外国人が居た。金色の髪を黒いリボンでツインテールに縛り、黒いシャツと黒いプリーツスカート、黒いブーツ。それらは少女の整った容姿と金髪と相まって不思議な雰囲気をもし出す。

——反応はこの近くだった。まだ目覚めてないから、見つけないくいな……

少女はゆっくりと林の中に入っていく、逆三角形の金色のペンダ

ントをどこから取り出す。

「いくよ、バルディッシュ」

「Yes sir. Barrier jacket, get set」

ペンダントが金色の点滅と共に電子音声を発し、少女の体が光りに包まれる。

すぐに光りは消えたが、少女の服装は黒いマント。黒いレオタードの腰の部分に大きめなベルトが巻かれており、間には白いミニスカートがある。手袋と靴は同じ黒色で太ももから足先まで濃い茶色のニーソックスが穿かれている。

早着替え。そう呼ぶには説明できない所が多すぎる現象。これは異世界の技術で“魔法”と呼ばれる科学なのだ。

少女の手には、金色の宝石を埋めこんだ戦斧バトルアックス握られているが、それは刃物というより、斧の形をしたメカのような印象がある。

「なのは！」

「ユーノくん！」

人目の付かない路地裏で合流する二人。ユーノと呼ばれているの

は高町家に居たフェレットだった。

「ジュエルシードは？」

「まだ覚醒してないみたい。でも、いつ発動するかわからないしあの子が強制発動するかもしれないから先に広域結界を張るよ！」

結界。それは魔導師が周囲に被害を及ぼさず、人知れず暗躍するのに使われる魔法。

ユーノはフェレットの体で器用に二本足で立つと右の前足を正拳突きの変形でかざす。

「広域結界、展開！」

ユーノの足元に緑色の魔方陣が構成されていく。それは大きな丸の中に正方形と菱形を重ねた内側にまた丸があり、それぞれの図形の間には文字とも記号ともつかない字が浮かぶ。それらが一瞬で完成するとユーノを中心に緑色の膜がドーム状に展開され、公園を覆う。

「なのは、今のうちにレイジングハートを起動して！」

「うん。レイジングハート、セートアープアップ！」

「All light . Barrier jacket , set up」

なのはが首につけていた紐。その先には小さなビー玉ほどの大きさの赤い宝石が付いていた。なのははその赤い宝石を空に掲げると

宝石から電子音声が鳴り、なのはの体はピンク色の光りに包まれる。

光りは一瞬で晴れるが、なのはの服装は変わっていた。アーチを描くようにツースイドアップの髪を束ねていた新緑のようなりボンは大きな白いりボンに。山吹色の長袖のシャツとオレンジ色のプリーツスカートは消え、彼女の全身はなのはの通う学校。聖祥大学付属小学校の白い制服に似たバリアジャケットに包まれる。

聖祥の制服はセーラーや袖先、スカートに黒のラインが入っているが。今、なのはが纏っているバリアジャケットは質感を増し、黒いラインの変わりに青空のような色のラインが入り、制服のりボンより大きな赤いりボンがセーラーにつけられている。

そして利き手の左手には、一本の杖が握られていた。ペンダントのときよりも大きくなった赤い宝石。その周りには三日月型の金色のパーツ。おとぎ話の魔法使いが持つ杖とは違い、こちらもメカニカルな印象がある。

今、二人の魔導師は同じものを求めるも、その思いは重ならず、争いを生む。

一人の剣士は気づかぬ内に運命に導かれ、二人の魔導師とぶつかる。

人は、解り合えないから戦うのだろうか？

第9話―魔法と剣士・中―（後書き）

長かった……

ここに居て、もうどれくらいの時間がすぎたのか

かつての肉体は消え、精神だけの存在になっても我は消滅できない。

人がいる限り……

第9話―魔法と剣士・終―（前書き）

さて、最後に純一が奇抜な事をします。

第9話―魔法と剣士・終―

――なぜか体は臨海公園に向かっていた。そして臨海公園に入るとさつきまで感じていた視線がプツリと消えた。この公園になにがあるっていうんだ？

純一はそう思いつつ、公園を歩く。不思議な事に人の気配はおろか、虫などの小動物の気配も無い。純一にもこれがおかしな事だとは解る。

――ん？　なんだ、あれ？

視界の先にキラリと光るものを見つけ、純一はそれを手に取る。

――菱形の青いもの。触った感じから石と思うが、宝石か？

これこそがジュエルシード。ロストロギアという世界を消滅させることのできる物質。

「うわ!？」

突如飛んできた何か。純一は本能的に近くの茂みの中に隠れる。

「それを、ジュエルシードを渡してください。そうすればあなたに危害は加えません」

純一の隠れた茂みに金色の宝石を埋め込んだバトルアックスを向ける金髪の少女。その子を見た純一は

——こんな寒い時期にレオタードって……痴女か？

えらくのん気なことを考えていた。

「危害を加えないと言っても信用できないな。さっきはいきなり撃ってきたじゃねえか！」

隠れているところがバレているなら声を出さない理由はない。それに相手はメカニカルな斧以外武器をもっていないようだ。どういう方法かは知らないが、さっきの攻撃をどうやっているのか、話をしていれば解るかもしれない。

「ごめんなさい。でもあれは当てる気はなかったんです……」

なんだか泣き出しそうな声に純一はまいってきた。

——ああくそ！ 女の子が泣いているのは嫌なのによお！

「それに、あなたが持っているジュエルシールドは危険なものなんです。早く封印をしないと大変なことになってしまう」

必死に訴えてくる少女に純一は戸惑う。今まさに異常事態なのにそれに加え大変なこと？ 最悪の上に最悪が乗るようなものじゃないか！ と。

——確かにこんなもの、誰かに渡したところで俺に損はない。でも、なんとなく。そうなんとなく……渡しちゃいけない気がする。

理由なんて無い。ただ、なんとなく。

青い宝石、ジュエルシールドを強く握ると純一は走り出す。向かうのは入って来た場所。

「バルディッシュ」

少女の呼びかけに斧の宝石部分がポウツと光る。

すると純一の四肢を金色の光りの輪が拘束し、純一は動けなくなる。

「なんじゃこりゃあゝゝ!?!」

「バインドです。あなたは一般人だから出力は抑えてありますがあまり暴れると手足がちぎれてしまうので、あまり暴れないで下さい」

少女は純一の前に立つと純一のバインドを操作し、ジュエルシールドを握っている右手を自分の方に向けると同時に、バルディッシュの先を純一の右手に向ける。

「手を、開いてください」

「つう!」

右手のバインドが強くなり、純一は顔をしかめる。

「お願い、早く。ジュエルシールドが覚醒したらあなたが——」「二つ質問していいか?」——「……どうぞ」

「一つ、何故これを手に入れたい?」

「……私が、ほしいからです」

「二つ目、何故俺を殺さない？」

「……………」

この質問に少女は答えない。代わりに、バルディッシュを握る手が震え、視線が俯き、金色の前髪に表情は隠れる。

——ヤバイところに触れたか？ でも今なら！

純一は二つ目の質問の後、バインドが緩くなっているのを感じていた。

なぜ緩くなったのかは知らないが今なら、なんとなく拘束を破れる気がする。

「おつりやああー！！」

「な！？」

純一は力を振り絞って拘束を壊す。砕けたバインドはガラスの割れるような音をたてた後、消滅する。

——よっしゃ！ うまくいった。後はこいつを押し倒して。

逃げるのみ。そう考えていた純一だが世の中、そうは甘くなかった。

ズルッ

「うおっ!？」

「キャアッ!？」

地面を蹴ろうとしていた足は滑り、純一はバルディッシュが反応する前に少女を押し倒すだけに終わってしまった。

「なのは、こっちからジュエルシードの反応が……」

「ユーノくん、急いで封印を……」

悪い事とは重なるものである。単なる事故とはいえ、男が女を押し倒している光景は男がどう言っても不利なものだ。

そして純一と面識のある一人と一匹は男が誰かをすぐにわかった。

「純一君……なにをしているの、かな？」

左腕に持った魔導の杖。レイジングハートから『ミシリ』と、ヒビが入るような音が聞こえる。同時に周りの気温が下がり、純一は冷や汗をかく。

「あ、あの、痛いからやめてください……」

なのはの存在に気が付いていないのか、少女が言った事はなのはの頭の中では『純一君は女の子が痛がることをした』と、認識する。

ユーノは「ぼくを淫獣呼ばわりしたキミは変態じゃないか」と、心の中で罵る。

「ああの、なのはさん？ こ、こ、これはですね。えゝとななんなんといいましょうか。とりあえずなのはさんが思ってるようなことはなかったりするのをごさいますですうお！」

純一の呼んだ名前に少女は反応し、純一を魔法で吹き飛ばしたあと、少女はバルディッシュを敵であるのはに向ける。

「また邪魔を——」「フェイトちゃん、大丈夫！」——え？」

心も姿勢も戦闘状態に切り替えた少女、フェイトの肩をなのはは掴み、真剣な表情と涙目で話しかける。

「純一君にひどいことされちゃったの？ ごめんね、純一君よくわからないところあるし変な人だけどけっして悪い人じゃないの！」

文句を言いたいのかフォローしたいのがあるいは両方なのか。早とちりしたなのははフェイトが振り解こうとしてもビクともしない腕力だ。

「なのは！ ジュエルシードの封印を！」

ユーノの一言で二人は本来の目的を思い出し、周りを探す。だが人の気配はなく、ジュエルシードの魔力も感じない。

——ジュエルシードはどこに？

「あれ、純一君は？」

「ここだあ！ そして人の話を聞けええー！！！」

岸に打ち付けられた柵。その下から右手に「俺の話を聞け」と書かれたハリセンを持ったずぶ濡れの純一が高飛び選手も真っ青のジャンプ力で跳んできた。

「ハ、ハリセン!？」

「くっ!」

「Protection」

「Defensor」

レイジングハート、バルディッシュがそれぞれの防御魔法を展開する。

スパパン

「いったゝい!」

「なんで、防御が……」

ところがハリセンが防御魔法に触れたとたん、魔法が消えて二人の頭は叩かれる。

——引くしかないか。でもジュエルシードは!

あまりにも理解不能な事態に防御できない攻撃を仕掛けてくる相手。だが目的のジュエルシードだけでも。と、フェイトは着地の衝撃を殺すため、無防備になった純一の左手にあったジュエルシード

をバルディッシュで奪い、高速で逃げていく。

第9話―魔法と剣士・終―（後書き）

疲れた・・・

視点変更が主な理由とはいえこれは疲れた。

さあ、この話では純一がハリセンをどこから入手したのか触れて
ませんがそれも後の話で出します。

・
しかし剣士がハリセン持っている光景ってかなりシュールな気が・・・

第10話―夜天に剣士が望むモノ―（前書き）

- ・ 10話というよりこっちが9話の終わりみたいになってしまった・

第10話―夜天に剣士が望むモノ―

フェイトが去ったあと、ジュエルシールドを封印できなかった事を悔やんでいたのはだか気持ちの矛先は突然変わった。

「そついえば純一くん。フェイトちゃんを押し倒してたけど、なにがあつたのかな？」

質問というより、問い詰める口調で純一を攻めるなのは。

「あの宝石を拾ったあと、唐突に現れて縛られた。それだけだ」

答えをはぐらかそうとする純一の意図に気づき、なのははレイジングハートを純一に向ける。

「本当のこと、お話ししたいな……」

「宝石を拾ったあと縛られた。それだけだ」

「……………」

本当のことを言わないと納得しない。瞼がやや下がった目でなのはは無言のプレッシャーを放つ。

「拘束を壊したあと足を滑らせて押し倒してしまいました……」

すぐに土下座をして頭を地面にこすり付ける純一。まだ結果があるため、人目は無いが人前でこんなことをやるものなら純一は二度と臨海公園を歩けないだろう。

「へえ、フェイトちゃんを押し倒したんだ？」

なのははレイジングハートの先端の角を純一の頭にグリグリと押し付ける。

「ユーノくん、非殺傷設定ってどこまでやったら死さないなの？」

「え、え」と、厳密には死なないわけじゃないんだけど相手にダメージが蓄積していけば大怪我にも繋がるし——「ユーノくん？」——
「……気絶するまでなら大丈夫です」

なのははフェイトが持つ魔導の杖、デバイス。相手を殺さないことが出来る非殺傷設定というシステムがあるがそれは絶対ではない。極端に防御の薄い状態で強力な攻撃を受ければ最悪死ぬ事もある。

「ねえ、レイジングハート。イメージトレーニングも大事だと思うけどプラクティスも大事だよな？」

「Yes. You may kill the transformation that attacks the woman.
」

レイジングハートは同意と共に純一を殺す気マンマンのようだ。

説明が遅れたがレイジングハートやバルディッシュには管制人格を搭載したデバイスでレイジングハートは女性型。バルディッシュは男性型だ。

「じゃあイメージで練習したことを実際にやろうかあ」

「All lights」

「ちょ、ちよつとやめてくださいなのはさん。いやなのは様。なんですかその当たったら痛そうな光りの弾？ 運動には自信がありますがそんなの当たったらちよつとアレな状態になりますよ！」

なのはのオーラに本能的に低姿勢になる純一。今までにも理不尽な状況下で仕事をしてきたがこの「Kill you」と宣告されそうな状況はなかなか無かった。

「ふゝん運動に自信があるんだあ？ なのはは運動苦手だから羨ましいなあ。でも魔法ならなのはの方が得意だからどうなるのかなあ？ ちよつと、実験しようか？」

「イヤアアアアアア！！」

誰もいない夜の臨海公園。なのはの実験……もといJ I K K E N Nを手伝った純一は疲労のあまり、なのはにズルズルと引きずられながら高町家へ帰宅した。

海鳴のビル街に立つ一流ホテル。闇が深まる時間にその一室。スイートルームにフェイトは帰ってきた。

「ただいま」

「ああフェイトお帰り！ どうだった？」

「アルフ。一個手に入ったよ」

アルフと呼ばれた若い女性。オレンジ色ストレートヘアを腰まで伸ばし、薄桃色のタンクトップを改造したのか、布地は大きな胸を隠すていどしかなく、紅色のショートパンツは“前”を止めてないために黒い布がチラチラ見えてしまっている。そんな彼女の容姿はフェイトより年上だが姉妹のような雰囲気はなく、もっと別の関係があるように思ってしまう。だが、彼女から生えている動物のような耳や尻尾にどうも興味を向けてしまう。

「ごめんね一緒に行けなくて。でもこっちも収穫あったよ」

アルフはそう言い、封印処理をしたジュエルシードを一個出す。

「ところで、またあのガキンチョが絡んできたのかい？」

アルフのいうガキンチョ。それはなのはの事だ。

「うん。それと男の子が一人いた」

「男？ まさか管理局かい！」

「ううん。ただの一般人。魔力が高いのか結界内にいたんだ」

「管理外世界であのガキンチョ以外に魔力が高いやつがいるなんて

意外だね。この世界に魔法文化は無いはずなのに」

アルフはこの異常事態に深刻に考える。魔力の高い者がこんな辺境の世界に二人もいる。これは一体どういうことなのだろうか？と。

しかしこの考えも次の食事の時にはそのおいしさを前に忘れてしまふ。それがアルフの欠点というべきところでもあった。

海鳴市臨海公園前。純一を追っていた視線たちが無線越しに騒ぐ。

『こちらスピードスリー！ 臨海公園にて護衛対象ロス！』
マルタイ

『こちらハートツウエルブ！ こちらもマルタイロス！』

「ダイヤワン、ロス確認した。スピードスリー並びにハートツウエルブ。詳細を」

『マルタイが臨海公園に足を踏み入れた瞬間、こちらの有視界から消えました』

『こちらもです。まるで神隠しか幽霊でも見た気分です……』

三人の服装を見るとネズミ色の作業着を着て同色の帽子をかぶっ

ており、胸には『（株）日比谷清掃』と刺繍されている。しかし無線の会話から清掃業ではないのが伺える。

「スピードスリー、ハートツウェルブは公園前にて監視を続行。マルタイ確認後連絡をしろ。私は本社に戻り、指示を仰ぐ」

『ラジャー』

『ラジャー』

無線を受信状態に切り替え、ダイヤワンと呼ばれた三十代くらいの男性は刺繍と同じ社名が貼られたバンに乗り、夜の道路を走る。

——あんな段差や隠れる所の無い場所でマルタイが消えるはずがない。しかし実際に起きた……この仕事、思ったより裏がありそうだな。

この男性のカンが正しいか間違っているのか。それは誰にもわからない

第10話―夜天に剣士が望むモノ―（後書き）

別に魔導書が絡むわけではなく、ちょっと洒落た表現を試みたかっただけです。

実験ならぬJ I K K E N Nをした純一。サブタイトルの意味はこの時の純一の心情にあります。

清掃業の人たちの呼び方に深い意味はありません。

第11話―剣士は多重人格?―（前書き）

今回はオリキャラが登場します！

このキャラの介入が純一に更なる波乱を！

第11話―剣士は多重人格?―

海鳴市を見渡せる丘。滑り台やベンチなど、公園を思わせる場所だが駅前や臨海、スポーツ公園に人が行くため早朝のラジオ体操をする団体はならず、ここに居るのはなのはとユーノ、早朝ランニングを終えた純一の二人と一匹だ。

「しかしこの淫獣がなのはに魔法の力を与えた師匠だったとはな」

家に帰ったあと、純一は桃子と美由紀に。なのはは士郎と恭也に説教をされた。さすがに九歳の子供二人が夜の街に出て心配しない大人はいなかった。

「いんじゅう? 純一君それって――」うわわわわ! それよりトレ・ニングを始めよう!」――う、うん」

なのはが純一に質問しようとするも、なのはの師匠であるユーノがそれを防ぐ。

――ユーノくんの言うとおり、今は練習に集中しないと。いんじゅうの意味は後で純一君に聞いておこうと。

「じゃあ始めるよ。結界、展開」

ユーノの足元に丸と四角で構成された魔法陣が組み上げられると公園を包むほどの。前回張った結界と比べると小規模な結界が張られる。

――また視線が消えたな。

どうにも結界が張られるたびに例の視線が消えるのが純一には気がかりだった。昨日、高町家へ戻るとまた視線があったのだがこれが二度もあった日には向こうは自分を確保するのだろうとと思っていた純一には動きのない向こうの考えが読めない。

——いつそユーノにこの結界の張り方教わってあの部屋の監視機材全部壊すか？

そんなことをしても別の監視機材を付けられるか最悪、確保されそうなものだが純一は全く気が付いてない。

「純一、なのはのセットアップは終わったよ。純一も早くデバイスを起動して」

色々考えている間になのはの服装は白のバリアジャケットに変わっていた。純一はなのはのバリアジャケットを改めて見て——まるで天使だな。と、思った。

「デバイスの起動ってどうやるんだ？」

「へ？」

「ふえ？」

「What？」

三者三様の答えが返ってきた。

「いや、このハリセンは相変わらずハリセンのままだし、なのはの

デバイスみたいにビー玉になったり杖になったりするわけでないし……」

純一はそう言いつつ、ボストンバッグから昨日、なのはとフェイトを叩いたハリセンを取り出した。昨日は「俺の話を聞け」と書かれていたが今は何も書かれていない。純一も書いた覚えも、消した覚えもないのでよくわからないのだが。

「ま、なのはの攻撃を全部避ければいいだけだからいいだろ。このままやるやる」

「うーん、純一君がそれでいいならいいけど……」

「May I receive it with provocation? It doesn't know. Then, even if it regrets」.

純一の「お前の攻撃なんて当たるか」と言いたげな言葉にレイジングハートは挑発で返す。

「レ、レイジングハート？」

「Now let's do. I will teach the severity of the reality to this punk kid」

なのはは知らぬことだが、昨日の純一がなのはの頭を叩いたことはレイジングハートには『守れなかった』という事実が彼女のプライドを傷つけ、純一に敵対意識が芽生えたのだ。

「あゝ、なんて言ってるかわからないけどお互いがんばろうな」

この発言はレイジングハートのプライドを逆撫でした。

喫茶店、翠屋。高町家が駅前に構えるお店で一流ホテルでパティシエとして勤めた桃子とおいしいコーヒーを淹れる士郎の評判で若い女性に人気のお店だ。

翠屋のユニフォームは黒いエプロンに明るい緑色で『みどりや』のワンポイントがあしらっている。その下には白いカッターシャツを着て、下の服は自由になっている。

「お待たせしました。ご注文いただいた生ハーブティーと当店自慢のシュークリームです」

おぼんに乗せたハーブ入りのガラスポットとお湯の入ったお洒落なデザインの水筒。お皿の上には翠屋自慢のシュークリーム。それらを常連の女性に優雅な口調で説明する店員。

「お客様。よろしければこちらでハーブティーをお作りしますがよろしいでしょうか？」

「は、はい。お願いします」

「かしこまりました」

店員は会釈をするとハーブの入ったポットにお湯を入れ、中のハーブが踊る。店員は全てのハーブが踊り終わるとティーカップに注ぎ、おぼんの上にポットを置き、お客から見てシュークリームを右に、ハーブティーを左に置く。

「では、ごゆっくりとお楽しみください」

最後に水筒を取り、一礼したあと店員はカウンターに戻っていく。

「士郎さん、終わりました」

「うん、お疲れ。お客さん好みのハーブティーは作れたかな？」

士郎はそう言い店員、純一から渡されたポットの中のハーブを見る。

「……うん、完璧だ。あのお客さんは薄めが好みだからね。これなら満足していただけるよ」

翠屋で臨時店員をしている純一。理由は簡単だ、今日出るはずのバイトが病欠のために急遽代理が必要になった。しかし恭也は大学で外せない講義があり、美由紀は模試。なのはは学校。そこで暇人な純一に白羽の矢が刺さった。しかし当然ながら九歳の純一に接客経験は無く、士郎から付け焼刃の教育をされたが更に高町家のボス、桃子がこんなことを言い出した。

「純一君、お客様のリクエストした性格でやってみて」

先ほどの女性のリクエストは「執事風の接客でお願いします。あ、でもお嬢様と呼ばないで」というものだったが中には「やんちゃな弟で私のことはお姉ちゃんと呼んで!」と、マニアックなものが多い。しかし純一はそれらのリクエストに全て応え、高評価を頂いている。

しかし悪い点もある。作業時間だ。ただ単純に商品を持っていき、説明するだけではないために純一の仕事の内容の大半は『注文された商品を持っていく』になっている。しかし今のところクレームは無い。これがお客の気遣いなのかそれとも別の理由なのかはわからないが。

「よかった。こういうの初めてだから緊張しちゃって……」

「でもよくできてる。純一君は初めてやることでも出来るタイプのようだね」

士郎は大きな手で純一の頭をクシャクシャといじる。その光景はわが子を褒める父親のようではほえましいものだ。

——純一はやればできる子だな。

ふと何かを思い出す。今より小さい自分。自分の頭を撫でている大きな手。

「純一君、どうしたんだい？」

士郎が顔をジッと見つめてくる。

「いえ、なんでもないです」

そうかい。と、言ったあと士郎は厨房の方へ行く。

それを見届けた純一はもう一度思い出そうと思案する。

カランカランッ

来客を告げるドアベルが鳴り、純一はそっちを向く

「いらっしやいま、せ？」

「なにやってんのよそのウェイター。ちゃんと挨拶しなさい！」

「まあまあアリサちゃん。純一くんも翠屋のエプロン似合ってるよ」

「純一君、なにか手伝うことはない？ 私忙しいときはいつも手伝ってるから」

三人は背負っていたカバンを脇に置き、カウンターテーブルに着く。

「いや、ピークはさっき過ぎたから大丈夫だ」

「あれ、みんな帰ってたの」

話し声が聞こえたのか、厨房から桃子が顔を覗かせる。

「こんにちは桃子さん。ところで表に書いてあった『新人ウェイターがあなたのご注文にお答えします！』って一体なんですか？」

「ああ、あれ。実は純一君に手伝ってもらうついでに新しいサービスを、って思ってたね。純一君にお客様の要望された態度で接してもらってるの」

桃子の説明を聞いた三人の心に悪魔が微笑む。

「へえ、純一がアタシたちの要望をね」

「そういえば純一くんにはよくからかわれていたよね」

「そうだね。たまには逆なのもいいよね」

日ごろの、というほど時間が経っているわけではないが、純一には恨みが溜まっているのその憂さ晴らしをしたいのだろう。

「じゃあアタシたちは『本日のティーセット』を。アタシにはお嬢様に仕える執事風で」

「わたしは……恋人に接する男で」

「私のことはなのはお姉ちゃんと呼んでね」

純一にとって難題が二つもあった。アリサの注文は幾度もあったので可能だ。しかしすずかの言う恋人は純一も本の中でしか知らないしなのはお姉ちゃんというのは予備知識が無い。彼の周りには姉はいなかった。

ん？ 姉は、いなかったよな……

なにかひっかかる奇妙な感覚を引きずりながら純一は本日のティ

ーセットの紅茶とシュークリームを運ぶ。

「お待たせしました。アリサお嬢様。本日のティーセットでございます」

「ふ、ふん。まあまあね」

ほんのり湯気の立つアッサムティーとシュークリームの乗った皿とティーカップを音を立てずに置く。

さて、難題だな。

「すずか、待たせてわりい。翠屋名物のシュークリームと紅茶だ」

“デート”経験はあっても男女の関係の経験が無い純一にはこれが精一杯だった。

「うーん、まあまあかな」

及第点、といったところか。だが次は最大の難関だ。気を引き締めないとな。

「お待たせ、なのはお姉ちゃん。土郎さんの淹れた紅茶と桃子さんが作ったシュークリームだよ」

クサイな……

「……………」

無言のなのは。これには純一も「失敗したか」としか思えない。

「ぷ、くくく……あはははは！　へ、変な純一くん、おもしろい！」

無言が一転、突如腹を抱えて大爆笑するのは。これには純一も驚きを隠せない。

「どういことですか？　桃子さん」

このサービスを考えた桃子にサービス以外の別の意図があると考え、純一はボスの桃子に聞く。

「まあ失礼ね。私は何もしてないわ。証拠に三人にはさっき説明するまで教えていなかったのよ」

「はっはっは。なのはにしてやられたな純一君」

士郎までいい笑顔と胸を張り、笑う。この光景に純一はハリセンで叩いてやりたくなった。

「たくつ、かつたりい……」

悪態をつきながらも、純一は心の底から笑顔だった。

——這裡。ここね 那個？？アイツがいる町は 在的城市

海鳴の駅前。艶やかな黒髪を後ろに纏めた小さな少女が悠然と歩きたびに長い髪は左右に揺れる。服は長袖のカッターシャツに空色のプリーツスカート فقط、寒そうだが……

——那個地痞流氓，也？あのチンピラも 快告訴向就行了的言えはいいのに

東南アジア系特有の切れ長な目。地顔なのか、睨みつけるような眼光に道を譲る人は少くない。

「おうおう嬢ちゃん。この辺りでそんな歩き方してるとこわいおニイさんに目をつけられちゃうぞー！」

着崩したブレザーの制服。シャツに巻かれたネクタイはだらしくゆるみ、髪を染め、ピアスを付けた人物は「不良」のイメージをそのままにしたような男を見て少女はふう、とため息を漏らし、言う。

「這樣的？？この国に 也在？個國家？」

「ああん？ 今なんつつたんだ？ 日本語でしゃべれねーのか！？」

膝を曲げて腰を地面スレスレまで下ろし、眉間に皺を寄せながら少女を睨む。二人の周りの人たちは我関せずの態度でトラブルに巻き込まれるのを避ける。

「おら、日本語であやまれよ！ ごめんなさいだ。ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ！」

少女の頭を掴もうと大きな手を伸ばす不良。

「言っとくけど因為是去除言不過、正当防衛だから正當防衛所以。やっ?!」

少女は腰を落とし、不良の顔の下まで一步で近づくと力強く地面を蹴り、両手による掌底で不良の体を押す。すると不良の体は軽く飛ぶ。

「があ!？」

予想だにしない事態の結果は不良が飛んだ先、ブロック後頭部を打って気絶。という結末で終わった。

不良の方ばかりに目の行った人たちが少女の方に視線を戻すがいつの間にやら少女は去っていた。

第11話―剣士は多重人格?―（後書き）

へい、謎のチャイニーズ少女いっちょお待ちい！

エキサイト翻訳、ありがとうございます！このサイトのおかげで英語、中国語がぶち楽です！

さて、今回少女が放った掌底。これは中国拳法を参考にしたのですがこの少女の武器は他にありません。しかしそれらは次回以降、ということ。

ちなみにこの少女にハッピーエンドはありません。

ルビの制限関係により、ケータイでご覧の方は見づらい文章と思います。申し訳ありません！

第12話―復讐の刃VS憎しみの凶弾―（前書き）

注意：今回の話の中では読者様の精神衛生面によりしくない表現（流血や登場人物の精神異常など）があります。
それらを嫌う方はここで引き返してください。

なお、次回13話で今回の結果だけを書きます。

第12話―復讐の刃VS憎しみの凶弾―

タッタッタッタッタッタ

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

「も、もう、だ、め……」

「おい、寝てる場合か？ 『一緒にトレーニングしよう』と言い出したのはなのはだろ？」

「じゅ、じゅんい、ち、くんは、ま、毎日、走ってるの？」

「当たり前だ。しかもこんなのはスタート地点みたいなものだ」

朝。純一の日課であるランニングになのはも付き合う事になり、最初に高町家の周りを三週走り、次に臨海公園まで行き、往復するルートだったのだがなのはは一週目で限界が来てしまったのだ。

地面に突っ伏し、ゴロンと転がり仰向けになったなのはの息は弾んでおり、顔には大量の汗が浮かんでいる。

「ま、いきなり八キロに挑戦しなくてもいいさ。じゃあ、俺は先に行くから」

純一は三週目を終えたので臨海公園を目指す。

臨海公園には純一と同じジャージ姿の老若男女が走っていた。だ
がみんなが走る理由はそれぞれなので知らない。中には陸上選手の
ユニフォームのようなタンクトップに短パンの人もいたのでそちら
の目的は大体想像がつく。

純一はそれらに興味を示すことなく、刺すように冷たい潮風が横
から来るのを感じながら走り続ける。

「そこのおとこ」

横から声をかけられ、目を向ける。その先には純一と同年くら
いの少女がいた。

——外国人？

見た目は東南アジア系だが声をかけられた時のイントネーション
が日本人の使う日本語ではなく、日本語を習った外国人の印象だっ
た。

「おまえ、ジュンイチか？」

「そうだが。お前は誰だ？」

白いカッターシャツに黒いプリーツスカート。十二月の臨海公園
でするには寒すぎる格好に純一は違和感を感じる。

「だれ、でもいい……おまえと、おなじ」

——俺と同じ……つまり!?

「大体わかった。場所を移すぞ、お互いのためにも、な」

純一はあの廃屋へと向かう。

「さて、ここなら人も近づかないからやりあっても大丈夫だろ。で、お前の用はなんだ?」

純一の言葉を理解するのに時間がかかるのか、少女は長く間を置いてから答えた。

「おまえ、ワタシの、パーパとマーマをコロシタ!」

この言葉で純一はわかった。今まで奪った多くの命。その中にこの少女の親がいたことを。

「ワタシ、おまえ、コロス!」

少女の目の色が変わり、黒いプリーツスカートの中に隠していた拳銃一丁を右手で取り出し、トリガーを引く。

バンッ！

チュンッ！

火薬の爆発音とコンクリートを鉛の弾が穿った音。純一は頭を低くして柱の影に身を隠し、武器を隠していたボロ布の中から一振りの小太刀と投擲用の短刀が入った縦長のポーチを回収し、ポーチに付いたベルトを腰に巻き、ベルトに小太刀の鞘を挿し、純一の装備が整う。

「かくれてじかんかせぐ、むだ。ここ、だれもこない」

——チッ“視線”はアテにならないか

純一は小太刀を構えながらポーチの中にある十本の短刀から一本を取り出し、攻撃手段を決める。

柱の影から飛び出すと同時に音も無く短刀を少女の胴体に向けて投げる。少女はそれを右方向に走って避ける。

予想通りの動きに純一は小太刀を右上、相手の左肩から右腹まで斬る袈裟斬りを振るうが少女はそれを右手に持っていた拳銃で受け止める。

「あまじい
甜」

少女は左手に袖に隠していた手の平サイズの小型拳銃。ダブルデリンジャーを人差し指で支え、クセのあるトリガーを中指で引く。

ババン

奇襲に純一も驚いたがこれを鞘で受けたので無傷。しかし鞘にヒビが入り、次に同じことをしても結果は変わるだろう。

純一は離れることなく少女の左肘を極めてから間に刀を挟み、引ききりながら投げる。御神流の組技の一つ、枝葉落とした。

「痛、ついでに做な」

刃により左肘が斬られ、血が流れる。少女は刀の意外な使い方に驚きつつも、間合いに入られないよう更に気を引き締める。

「お前は戦い慣れしてないな」

小太刀の刃先から床に落ちる血を見るまでもなく、純一は確信する。

「動きが素人すぎる。さっきのデリンジャーは必殺の武器なのに防ぐ術のある相手に撃つても意味はなかった。しかもそのために剣を持った相手に接近を許した」

少女は相手に恐怖する。純一が今言ったのは間違いなく少女が組み立てた作戦そのものだ。しかもそれだけでなく、この男は一度交えただけでこれだけたくさんの情報を盗んだ。これ以上交えたらどこまで知れるか解ったものじゃない。

「だが、素人だろうが関係ない。相手に武器を向けるということは殺されても仕方ないからな」

恐怖のあまり足が震えそうな気配、殺気。この少女はそれを感じていた。

—— 這個東西、什麼？

目の前にいるのは本当に自分と同じ人間か？ 実は鬼じゃないのか？ 少女が気づかぬ内に鼓動は早まり、呼吸は多くなり、冷や汗が垂れる。右手に握ったオートマチックの拳銃はカタカタと震えて照準が定まらない。

「今回はオイタが過ぎただけと思って見逃してやる。だが次同じことをしたら、殺すぞ」

—— 殺？ 那個死事？ 死……………

それをイメージした瞬間、少女の記憶がフラッシュバックする。どこにそんなにあるのか、床一面を染める真っ赤な血を流す両親。

血血血

血血血血血血

血血血血血血血血血血血

「嫌那樣？ 呀那樣那樣那！！」

突如銃を投げ捨て、頭を抱えて前のめりになる少女。ナニかを振り払うように頭を左右に振り、それにつられてポニテールが動く。

純一は拳銃を拾い、その場を離れる。

第12話―復讐の刃VS憎しみの凶弾―（後書き）

ダークな印象を描いた今回の話し。この時、純一が何を思ったのか？今回はそれにあえて触れませんでした。

第13話―ハリセン剣士と金の閃光―（前書き）

タイトルの通り、純一とフェイトのバトル話です。

第13話―ハリセン剣士と金の閃光―

戦意を失った相手から奪った拳銃を道端に落ちてたレジ袋で包み、交番の落し物ポストに入れた純一は短刀を入れたポーチはそのままで小太刀はジャージの中に隠して高町家に帰っている。

――どうしたものか

思っているのはあの少女への対応。まだ生きているので再び狙ってくるのは解っている。しかし彼女は不意打ちなどせず、間違はなく正面から来る。

その根拠はさっきの襲撃にある。もし純一を殺すのが目的なら狙撃でも設置型の爆弾でも、極端な言い方だが他の人間を巻き込んで殺せばいい。だが彼女はそれらをせず、真正面から来て「お前を殺す」と言った。そんな考えを持った人物が今更狙撃や爆弾で仕掛けてくる可能性はまだ薄い。もちろん、追い詰められた場合はそれらに転ずる可能性もゼロでは無いので気をつけねばならない。

――あいつ、どうやって俺のことを知ったんだろう？ やっぱあの
………チャラ男か？

名前が出てこず、外見上の特徴で呼ぶ純一。だがその考えが正解ならあのチンピラはまだ生きている可能性が高い。

あーでもない、こーでもないと考えながら純一はいつもより遅い朝の時間に帰宅し、士郎に小太刀と短刀を預かってもらうことにした。

士郎は純一の帰りが遅いのを心配していたが、純一から渡されたものを見て「なんだ、そういうことだったのか」と納得したそうだ。その後、二人から「春から聖祥に通ってもらうよ」という話を持ちかけられた。

お昼前。士郎と桃子は翠屋に行き、恭也は大学。美由紀は図書館で勉強。なのはは学校。純一は自室で聖祥大付属小学校の学校案内のパンフレットを見ていた。

私立の学校なので設備は整っているし勉強もハイレベル。しかも小・中・高・大のエスカレーター式で中学校から男子校と女子校に別れるという独特のシステムを持つ学校だ。純一は知らないが、学費も高いらしい。

男子の制服は指定の黒いハイネックのシャツの上に襟が大きく、丈がやや短めなセーラーと赤いネクタイ。ズボンの長さは膝上までで清潔感のある白い制服だ。

——うわぁ、これを着るのか。俺には似合いそうにないな

パンフレットを閉じ、美由紀から借りた本に手をかけたその時。

《（純一、聞こえる？ ジュエルシードを発見したんだ。封印する

からこっちに来て！」》

純一からしたら空気を読まないフェレットが念話で話しかけてきた。

《（お前がやれ。というかデバイス無いのにできるか）》

《（あの武器。ハリセン、だっけ？ 多分あれもデバイスだと思うからダメ元でやってみよう！）》

かなり希望的観測ではあるが他に手はない。なのははまだ学校で抜け出すのは無理だろう。レイジングハートがあれば純一でも起動パスワードの詠唱から始めて、封印もできるがレイジングハートは彼女に着きつきりなので離れられない。

——行き当たりばったりだ

純一は心の中で文句を言いつつ、ボストンバッグに手をかけて家を飛び出した。

「純一、こっちだ！」

海鳴市の山の一合目。ユーノがジュエルシードを見つけたのが偶然にも廃屋の近くだった。

「まさかこんな近くにあるなんてな。ところで封印はどつすればいいんだ？」

「デバイスをジュエルシードに向けて『ジュエルシード。シリアルナンバー、封印』って言うんだ。シリアルナンバーは？だよ」

「あいよ、ちゃっちゃと済ませるか」

ボストンバッグからハリセンを取り出し、ジュエルシードに向ける。

「ジュエルシード、シリアルナンバー？。封印」

……………何も起きない。

「おい、どうなってんだよ！」

予想していたとはいえ、期待が裏切られたのも事実なので純一は当然怒る。

「ぼ、ぼくに言われても」

ドンッ！

突然純一の足元の地面が爆発し、純一は背中側の上空を見る。

「ジュエルシードは、渡しません……」

「ボクちゃんがもう一人のお邪魔虫かい？」

襲撃者は二人。一人は黒いバリアジャケットを纏った金髪の少女、フェイト。もう一人はタンクトップにショートパンツと、ラフな格好をしたオレンジの髪の女性。後者は純一は初めて見る人だ。

「やれやれ、あっちでも狙われこっちでも狙われ。人気者は辛い」

左手で後頭部をかきながらため息を吐く純一。

「へー、ずいぶん余裕だね。白いおチビちゃんとは違っってことかい」

「ああ。なのはは女の子だが俺は男だからな」

挑発にもジョークを交えて返す純一。一触即発と言っのが正しい睨み合いはフェイトによって止められる。

「アルフ、あの子は私が相手をするよ」

黒い戦斧型のインテリジェントデバイス。バルディッシュを構えてフェイトはゆっくりと前へ出る。

「じゃあアタシはあの小さいのを——」「ちょっと待った」——ん？」

獲物を定めたアルフを止めるように純一が言う。

「互いに目的はこのジュエルシードだ。わざわざ二人出てこなくても、タイマンで勝った方が得る。っていうのはどうだ？」

「あいにくアンタの意見に乗る理由は——「いいよ」——フェイト！？」

主であるフェイトの賛成にアルフは驚く。

《（ここで二人で戦っている間にあの白い子が封印する計画なのかもしれない。だからアルフは）》

《（……りょくかい。アタシのご主人様はフェイトだ。主人が決めたことには逆らわないよ）》

《（わがまま言っただけ、アルフ……）》

そこは「ありがとう」と、言っただけだったアルフだった。

場所を変えて神社の境内。ユーノが結界を張ったため二人は心置きなく戦える。純一は右手に字の書かれていないハリセンを握り、フェイトは斧状態のバルディッシュを両手で正面に構える。

ジュエルシードは両者の間、石畳の上。勝った者のみが得られる証。二人は合図もなく戦いを始める。

純一は魔力をハリセンに流し込み、ハリセンとしては規格外の硬度と威力を与えて地面を走り、フェイトは飛行魔法で地面スレスレを滑るように飛び、互いに武器を一合。

バンッ！

爆発したかのような音を出した後、互いに魔力のぶつかり合いによる衝撃波で吹き飛ばされる。しかし両者は再び近づき、二合、三合と武器を交えていく。その中で純一はハリセンの特徴を思い出し、
ていく。

「魔力を流し込むことでの威力強化？」

「うん。なのはとの練習で今解った事は二つ。そのデバイスの能力は“魔力による強化”と“バリア無効化”だ。“魔力による強化”はデバイス内に魔力を溜めて叩いた瞬間に相手に魔力攻撃。“バリア無効化”はフィールド系以外の防御魔法。バリアやシールドを無効化して攻撃できるんだ」

これらは解析結果ではなく、観察結果であるためこれが全てとは言いきれないらしい。設備があればもっと解ったかもしれないがこの世界にそんな設備は無いためあきらめるしかない。

——— だけど、威力が低い低い

そう、このハリセンは能力に反比例して威力が低い。いや、魔法戦においては無いと言っても過言ではない。叩いても相手には痛みはあれど、ダメージとは呼べない。

——— ならよお！

八合目に入ろうとした瞬間、純一はハリセンを捨ててフェイトの

右腕を掴み。一本背負いで石畳に叩きつける。

「キャアッ！」

「フェイト！？」

バリアジャケットでは防ぎきれない衝撃が背中から襲い掛かり、悲鳴をあげるフェイト。飛び出したい気持ちを『主人が勝つ』と信じて抑えるアルフ。

フェイトは上空に飛び、得意ではない射撃魔法の術式を練る。

——彼は一般人で飛べない。これなら……え？

数日前なら有効な戦術。しかしそれはもう通用しない。純一は足に魔力を集中させ、以前岸から飛び上がった時以上のジャンプで上空にいるフェイトのところまで跳躍し、魔力を籠めた拳で殴りかかる。

「くっ……」

無詠唱のシールド魔法でそれを受け止めながら衝撃を活かし、後ろへ飛んでいくフェイト。純一の方に視線を向けるとあのハリセンを拾ってこちらに来ていた。

「Thunder smasher」

左手に練っていた魔力。足元に構成した丸と四角の魔法陣。照準を純一に定めてフェイトは唱える。

「サンダー、スマツシャアー!!」

左手から放たれる砲撃魔法の奔流。それは上昇してくる純一を飲み込もうと真っ直ぐ向かってくるが純一はそれを右に移動して避ける。

「まだまだああ!」

手を左に動かし、下界の木々を薙ぎ払いながら奔流が純一に迫る。純一はバリアジャケットを纏わぬその身に、非殺傷設定の砲撃に死を感じた。

「死んで、たまるかあー!」

叫んだその瞬間、純一の見る景色がモノクロになり、残像が見えるほどの超スピードで砲撃から逃れ、敵であるフェイトを指す。フェイトは砲撃を止め、バルディッシュに無言で指示を出す。

「Scythe form」

バルディッシュのヘッド、斧の部分が九十度傾き、金色の魔力による鎌が形成される。黒き衣にその鎌はまるで命を刈り取る死神のような姿だが、どこか気高く、どこか美しいものがあつた。

——スピードは速いけど、タイミングを合わせれば!

迫る純一に対して横薙ぎに振るわれる魔力鎌。なぜか純一は防御も回避もせず、愚直なまでにその一撃を受け、地面に叩きつけられる。

「やった！ フェイトの勝ちだよ！」

誰もが見ても勝負が決したと感ずる一撃。ユーノはジュエルシールドが一個盗られるという事実言葉も出なかった。

「……………」

勝者のフェイトはジュエルシールドをバルディッシュの中に封印した後、敗者である純一に近づく。

「純一！」

「おっと、動くんじゃないよ。動けばその瞬間ガブリといくからねえ」

トドメを刺そうとするフェイトを止めようと動き出そうとするユーノだがそれはアルフから放たれる恐怖というプレッシャーに阻まれる。

フェイトの斬撃で腹に大きな傷を受けた純一は呻き声もあげられず、「ゴホッ、ゴホッ」と咳き込むだけだった。

「一つ、聞きたいことがあります。あなたと初めて会ったときにあったこのジュエルシールド」

「Put out」

バルディッシュから出される一個のジュエルシールド。しかし幾分か小さくなっている

「魔力が少なくなっていました。これはあなたの仕業ですね？」

《（知、るか）》

口を動かすのも億劫になるダメージのため、念話で答える純一。

「でも、これにはあなたしか触れていない。私の憶測ですがあなたがジュエルシードにあの武器を作るように願ったと考えたなら、納得できます」

フェイトの憶測にユーノは驚く。確かにジュエルシードには願いを叶える特性があるがそれは願った者を巨大化・凶暴化したりするという悪影響を生んでいたがよもや武器になるとは思いもしなかった。だがフェイトの憶測も可能性としては高い。確かにあの時純一はジュエルシード以外、何も持たずに海に落ちて上がってきた時にはあのハリセンを持っていた。あのハリセンがジュエルシードによってもたらされたものなら確かに納得がいく。

《（なら、それで、いいんじゃないの、か）》

疲労がたたり、考えるのも億劫になってきた純一。フェイトもこれ以上何も聞けないと思ったのか、ジュエルシードをバルディッシュの中に封印し、アルフと共に飛び去っていく。

「純一！」

ユーノが駆け寄る。純一の意識は、瞼と共に閉じていった。

第13話―ハリセン剣士と金の閃光―（後書き）

はい、純一くん負けました。

「あのチートハリセンなら勝てるに決まっただろゴルア！」
と言いたい方もいると思いますがあえて言います。無理です！

本文で書いたとおり、ハリセンの悲しいまでの威力の無さ+バリアジャケット無しの無謀戦闘。ぶっちゃけ今の純一は誰に魔法戦挑んでも負けるのが決まっています。

ハリセンに規格外の硬度と威力を与えると書いてありますがこれは現実で言えばラミネート貼ったくらいのもので本当に大した威力ではないのですが紙にしては規格外。というものです。

ただし、魔法を使わない戦いになると変わります。強いです。リリなの組みと戦うと下手すりや最強です。でも魔法戦では最弱です。

最強にして最弱。こんな主人公アリですかね？

一万アクセス記念小説・・・もどき（前書き）

この話は本編に一切関係なく、脈絡も無くライダー、Sが登場します。

というかグダグダです・・・

一万アクセス記念小説・・・もどき

アクセル「えー皆さんはじめまして。旧タイトル『D・C・R・N・
』現タイトル『D・C・リリカルなのは―神の名を持つ剣士―』
の作者アクセルです」

純一「あーダ・カーポから出演の朝倉純一だよろしくー」

なのは「魔法少女リリカルなのはから出演の高町なのはです」

フェイト「同じくフェイト・テストロッサ・ハラオウンです。あの
アクセルさん、いきなりですけど聞いていいですか？」

アクセル「俺に質問するな」

フェイト「え？」

アクセル「冗談です。さあ、なんでも聞いていいですよ。なんなら
過去の犯罪経歴でも」

フェイト「それはこのコーナーの後で。今回私たち中学生でなんで
こんな文法になってるのか気になって」

アクセル「一つ目の答えはただなんとなく。二つ目は地の文使って
までやりたくないからです」

純一「ずいぶん適当だなあ」

アクセル「黙れかつたるい星人」

アクセル「あー果てしなく関係ない方向に流れそうなのでとりあえず今回の趣旨から入るか」

純一「えーとタイトル長いから『しんめいけんし神名剣士』って略すぞ」

アクセル「ヴェー!？」

純一「えー今更こんな時代遅れなコラボをした理由は『書きたかったから』。目標は『読者さんに「面白かった」と言われる作品を書きたい』か」

兄貴塩「おい、今だれか俺を笑ったかあ？」

フェイト「い、いえいえ、誰も笑ってないです!」

弟味噌「逝こうよ、アニキ。俺たちだけの真っ暗な無間地獄へ」

兄貴塩「ああ、相棒」

なのは「この収録スタジオってなんで個性的な人が多いの？」

アクセル「ここのスタジオの持ち主が『すばらしきAGITOの会』だからじゃない？」

純一「というか書いているやつ——」

中年男性「おのれええディケイドオ! この世界もお前のせいで破壊されてしまったあ!」

純一「・・・場所変えない？」

アクセル「断固拒否する」

純一「なんで!？」

アクセル「ここ無料で収録できるから」

フェイト「で、でもさっきから全然進んでないよ？」

www「これも乾巧ってやつの仕業なんだ」

純一「・・・この人たち本編に出てこないよな？ 出てこないよな!」

富豪貧乏坊ちやま「俺は乱入においても頂点に立つ男だ!」

なのは「・・・頭痛くなってきた・・・」

パンツマン「マイペンライ。大丈夫、なんとかなる。それにやっぱライダーは共闘でしょ!」

フェイト「私たち、なにしてんだろ・・・」

アクセル「お前たち、情けないぞあそこを見る」

純一「あそこ？」

753「イクササイズ! 腕ふりなさい ふりなさい イクササイズ!」

鉄仮面「5103さんが強いのはやっぱりライドベンドー隊の訓練のおかげですか？」

5103「それだけじゃない『このイクササイズを続ければ誰でも最強になれる』というふれこみに嘘が無く、俺も頭突きでヤミーを倒せるようになったし俺と同時に始めた不幸体質の気弱な少年は『俺の強さに、お前が泣いた！』と、言いながらガメルを張り手で倒した。このようにイクササイズはとても素晴らしいものだ」

三人「……………」

アクセル「俺が言いたいのは『この程度で浮き足立つな』だ」

純一「とりあえず外野は無視するか……」

なのは「うん……」

フェイト「そうしよう……」

純一「とりあず質問。俺はこういうコラボ小説の場合なぜか恋人がたくさんいるがこの作品内ではどうなんだ？」

なのは・フェイト「ジーーーー」

アクセル「二人とも攻めない攻めない。純一も思春期なんだからそういう願望の10や100はあるって」

純一「俺はそんなこと言っていない！」

アクセル「この作品では恋人は一人だ。三角関係くらいは生じるかもしれないがそういうのは恋愛では王道だから仕方ないだろ」

なのは「はい。じゃあ現在最弱の純一君の強化プランはありますか？」

純一「（俺はロボットか！）」

アクセル「“無印編”では無い。“A’s編”ではあるが“初音島編”でも“ストライカーズ編”でもある」

フェイト「じゃあ、純一の魔導師のランクはどれくらい？」

アクセル「現在はDとCの間。ただ飛行魔法が使えるので飛躍的に伸びる可能性もゼロじゃない」

純一「ハリセンはいつまで使うんだ？」

アクセル「“初音島編”序盤まで。そこから新デバイスを使うから」

なのは「第9話で『お前を選んでやる』ってなに？ 誤植？」

アクセル「ノーコメント」

なのは「誤植？」

アクセル「ノーコメント」

フェイト「無限書庫に『“ストライカーズ編”の後に“オリジナル編（仮称）”がある』ってデータがあったんだけど」

アクセル「Σ（・ω・ノ）ノ！どこから漏れたんだ！」

フェイト「あるんだね。それってどんな話なの？（ニジリ）」

なのは「気になるねえ（ニジリニジリ）」

純「四期には入らないのか？（ニジリニジリニジリ）」

アクセル「うゝうゝゝ強制終了!!！」

ブッン！

一万アクセス記念小説・・・もどき（後書き）

アンコ「ネタバレは気にするな！」

第14話―料理は一日にして成らず―（前書き）

純一といえば！ という鉄板ネタです。

第14話―料理は一日にして成らず―

夕方の神社。フェイトとの戦いでケガを負った純一をユーノが治癒魔法で治すも、まだ目が覚めない。

「ユーノくん、純一くんがフェイトちゃんと戦ってケガをしたって本当!？」

境内を走り、二人に声をかけるなのは。運動が得意ではない彼女が額から汗を流す姿からここまで一度も足を止めることなく来たのが伺える。

「う、うん。治癒魔法はかけたんだけど意識が戻らなくて……」

非殺傷設定の魔法とはいえ、バリアジャケット無しで大きな一撃を受けたのだ。目に見える傷は治せても目に見えない傷――内臓器官のダメージ――があるかもしれない。

「純一くん! 純一くん!!」

「ダメだよなのは! 頭を打ってるかもしれないから動かすのは危険だ!」

横たわる純一を揺さぶるのは大声で静止するユーノ。揺さぶるのを止めたのはだが薄い紫の瞳から涙がこぼれてくる。

「イヤ、だよ……まだ、純一く、んと出会ったばかりなのに……」

「おい」

「ふえ？」

「え？」

「人を勝手に死んだ扱いしようとしてんじゃないやねえアイアンクロー両手バージョン！！」

「イタタタタタ！！」

「純一！ 頭がつぶれる！ 純一！」

無駄に長すぎる技名を叫び、なのはとユーノにアイアンクローをする純一。なのはの頭から「ミシミシ」と聞こえるのは気のせいだろうか？

「全く、人がちょっと気絶してる間に……あ、ユーノ。治療ありがとう」

「どういたしまして。でもお腹の傷は一番ひどかったから痕が残っちゃったけど……」

「男に傷の一つや二つは勲章みたいなもんだ」

腹の左から右にかけて入った傷跡。大きさから考えて一生ものだが純一は手をヒラヒラとし「気にするな」とジェスチャーする。その気遣いに落ち込んでいたユーノの声は上向きになる。

「で、でも本当に大丈夫なの！？ 純一くん弱いし——って、なんで落ち込むの？」

『弱い』それは男が言われたなら深く傷つく魔法の言葉。しかも事実だけに純一の九歳のハートには深深と刺さる。

「くっ、気にするな。ちょっとあそこがあれなだけだ……」

純一の気持ちが痛いほど解るユーノは何も言わない。

夜の高町家、純一はカメラと盗聴機の保管庫のような部屋で横になっていた……桃子の買ったヒーロー物のパジャマをボスに着せられたまま……

だが彼の心の中、純一となのははレイジングハートが作った仮想空間の中で訓練を重ねていた。

仮想フィールドは海上。レイジングハートが作り出す的を撃墜する。というシンプルなルールだが二人はルールに関係の無い競争をしていた。

《（二十機目撃墜！ 俺の逆転だ）》

《（私は二機撃墜して二十一機目。まだ逆転されてないよ！）》

そう』どちらが多く撃墜するか』というシンプルながら対抗心の

燃える競争だ。しかし負けたほうには恐ろしい未来が待っている。

《（このまま私が勝てば明日お姉ちゃんが作るお料理のなのは分は純一くんが食べてよね！）》

《（絶対いやだ！ 美由希さんのメシは食べたことは無いが俺のシックスセンスが『食うな！』と告げている！）》

純一にシックスセンスがあるかどうかはともかく高町家の長女、美由希が作る料理は「食べられるものじゃない」というのが高町家の共通認識だ。父、士郎は以前、美由希が作った甘味を食べて「甘いものが甘く感じられなくなった」という事件が起きた。士郎はお酒と甘いものをこよなく愛する人で桃子と交際を始めるきっかけになったのも桃子の作る甘いお菓子の存在が大きかった。味覚に関しては通院して治したそうだが。

閑話休題

とにかく、そんな訳で士郎と桃子は明日は商工会の集まりで不在。恭也は恋人の忍しのの家に避難……もといお泊り。ユーノはフェレットの餌を食べるので被害に会う心配は無い。つまり、生け贄はなのとは純一。だが美由希一人でたくさん料理を作るのは困難のため、作るのはメインのおかず一品のみ。他は桃子が作り置きしてくれるので安全。だがそれを差し引いても美由希の作る料理は危険なのだ！

ここまで言えば解るだろう。今夜、純一となのはが何を競っているか。それは『負けたら美由希の料理を食べる』という恐ろしい未来。しかもこの未来、作る本人の思いつきでやってきた自然災害。回避不可能。

《（そんなことないよ！ 純一くんならお姉ちゃんの料理をおいしく食べれるよ！）》

《（嘘だポンポポン！）》

……幼いがゆえに短い舌では叫びながらの発音は難しいらしく、なぜか童話のタヌキの腹太鼓の音を口走ってしまう純一。ユーノとレイジングハートは人知れず失笑する。

ブウー！

勝者と敗者を決めるブザーが仮想空間に響く。

「嘘だポンポポン……嘘だポンポポン……嘘だポンポポン……
…嘘だポンポポン……」

夜の食卓、六十対四十のスコアで負けた敗者はイスに座ったまま、自分で叫んだ謎の言葉を呪詛のように呟く。対するなのははご機嫌のあまり、肌がツヤツヤしている。

「はい、できたよー」

純一にとって死刑執行道具とも言えるものを作り終えた女子高生は白い陶器の皿に盛った料理を持ってくる。中身は……具だくさん

のホワイトシチューだ。別に鍋の底のコゲが浮かんでいるでもない。寒い冬に食べたい一品でもある………作った人物を除けば。

「あつれー？ 純くんテンション低いよー。美由希お姉ちゃんが作った料理、今までは不評だったけどこれで汚名返上だよ！」

今までの罪を^{クロ}シロにする。という意味でホワイトシチューを選択したのだろうか？

——とりあえず見た目も匂いも普通のシチューだ。作り方を見たわけじゃないが変なものが入っている印象は無い。でもなんでだ？ シチューの匂いになんで心の底から恐怖が湧き上がってくるんだ？ よく考えてみれば美由希さんはあの『毒草事件』を起こした美沙斗さんの娘だ。料理の下手さは遺伝してるかもしれないが実の父の静馬さんの影響で良くなっている可能性もある。いや、良くなっているはずだ！

目の前に置かれたシチュー。女性陣は“それぞれ”味の感想を求めているのは目を見れば解るしフェレットは……離れたところでフェレットの市販の餌を食っていた。

「では、いただきます」

純一はスプーンで一掬い、口に入れる。

「どう、純ちゃん？ おいしい？」

「トツテモ オイシイ ^{デス} DEATH」

「良かったあ！ ね、なのは。聞いたでしょ？ お姉ちゃん汚名返

「上したよ」

「ちょっと待ってお姉ちゃん！ 今純一くんおかしくなかった！？
声が人間の声じゃなくて機械音声みたいだったよ！！」

「アマリ ノ オイシサ ニ コエ ガ ウラガエッタ ダケDE
ATH^{デス}」

「ほうらおいしいって」

「ニヤノハ ショウブ ニ カッタ ホウ ガ オカズ ヲ モラ
エルンダッタ ヨナ？」

そう言ってなのはのシチュー皿を取り、残さず食べていく純一。

「二人とも育ち盛りだからたくさん食べないとね。あ、なのはは
女の子だし食べ過ぎたら太っちゃうからほどほどにね」

「オカワリ アリマスカ？」

「たっくさんあるよ。大盛りで良い？」

「ゼヒ」

「純一くん！ それ以上はダメー！！！！！！」

教訓。遺伝子は偉大である。

第14話―料理は一日にして成らず―（後書き）

書いてから読んでいる時に「カタカナを繋げたままだと読みにくいな」と思って間を空けました。

「間違ってる」とう指摘があればぜひください！

第15話―世界を壊すモノの産声―（前書き）

活動報告でも書いたように今回は（作者の中では）長文です。一万字あります。

それと今回、二人ほど死にます。

第15話―世界を壊すモノの産声―

――あー、ひどい目にあつた……

高町美由希作“白い悪魔という名のシチュー”を完食した純一は二時間をかけて元に戻り、美由希から借りた本を自室で読んでいた。レンズ越しの視線の元で。

――しかし、この魔法剣士の主人公はいい参考になるな。魔力で構成した剣なんて今の俺に必要な一手なんだろうけど、いかんせん制御が……

今読んでいる本。内容は放浪癖のある魔法剣士が行く先々で器物破損をしていくだけ。という滅茶苦茶ではた迷惑なストーリーなのだが魔法剣士が使う魔法の中に“魔力で作った剣”があり、純一はそれに注視していた。というのも今日のフェイトとの戦いで改めて認識したこと“攻撃力不足”。飛行魔法にも実は課題が残っている。純一はなのはと違い、曲がれないのだ。空を飛ぶ上で『曲がる』というのは高等技術でその動作には多くのG、重力・加重がかかる。バリアジャケットのおかげで本人に関わるGはゼロに等しいが純一はバリアジャケットは無いのでGが直にかかる。しかし、曲がれないのは魔法戦、特に空中戦において致命的だ。

閑話休題

とにかく今は攻撃手段の確保。特に剣――むしろ刀――は純一の戦術を飛躍的に広げてくれる。使い方次第では御神の技も使える。

――明日あたりユーノに相談してみるか……ねむいし寝るか……

明かりを消して布団に入る純一。不思議と熟睡できる気がした。

.....

.....

.....

セピア色の光景、壁一面のモニターに向かう白衣を着た二人は研究員だろうか？

「“D”の起動成功。魔力、基底状態を維持。やりました！成功です！」

「はしゃぐんじゃないよ。まだ計画のファーストステップをクリアしただけじゃないか」

——ディー？　なんだそりゃ？

「次はD粒子注入による励起状態への移行と高リンク率確保。“D”に耐えうるデバイスの作成。やることはたくさんあるんだ。デバイスの方は？」

「トウゴウ先生の話ですと七割がた完成したそうです。あとはエラーとバグのチェック。励起状態の“D”とのリンクの安定性がよければいいそうです」

「ハン、行き遅れのくせに仕事は早いときてるねえ」

「それを本人の前で言わないでくださいよ……以前そのこと言って大喧嘩したじゃないですか。それとトウゴウ先生から『どうせ暇だし“セイヴアー”も作っておいてやる』というメールが来てます」

「前言撤回、仕事と“嫌味”が早いときてるねえ……ちよつど節目だ。プレシアのやつでストレス解消してやろうかい」

「ミッドの中央技術開発局の第三局長、大魔導師のプレシア・テスタロッサ氏にですか？」

「そうさ“自称大魔導師”のプレシアさ」

「ほどほどにしてくださいよ。確かあの人、次元航行エネルギーで追い詰められてるって聞いてますよ。失敗した原因がこっちにあるなんて言われたら」

「そんな時は『お前さんの摂った栄養はそのデカパイに行っても頭には行かないのかえ？』って返してやるさ」

「ホント！ 勘弁してくださいよ……」

「カッカッカッカッ！」

……

……

……

——朝か……なんか、不思議な夢を見た気もするような……

寝癖のひどい頭と寝ぼけまなこで見た夢を思い出そうとする純一。
しかし途中でかったるくなっただのでやめる。

——さて、寝ぼすけ姫を起こして日課といくか

今日のなのはの記録は一週と四分の一だった。

高町家のリビング。純一からの相談をユーノだけでなく、レイジングハートも交えて聞くことになった。

「魔力で作った剣？」

「ああ。防護服……バリアジャケットだっけか？ あれはどうにも
ならなくても魔力で作った剣ならどうかと思っただけだ」

「うーん、確かに魔力で刃を作るのは可能だけどそれもデバイスの
制御があつてこそだからねえ……純一は単独で飛行魔法ができるけ
ど………あ！ そうそう。飛行魔法で思い出したけど純一に伝え
たい魔法があるんだ」

「今欲しいのは剣なんだけど」

「まあ聞いてよ。結界魔法の一つでフロッターフィールド。足場を

作る魔法なんだ」

「足場？ ……………なるほど、そういうことか」

「うん。昨日純一のやった接近戦。純一はしっかりした足場がある状況で戦うのが良いみたいだからこの魔法を伝えようと思ったんだ」

純一の戦い方。御神流の攻撃手段は当然だが足場がある状況で発揮される剣術だ。確かにレイジングハートのトレーニングで飛行魔法と剣での斬っていったが足腰のふんばりが効かない状況なのでイマイチ慣れない。純一はユーノが彼なりに純一のサポートをしようとする心を感じた。

「剣に関しては……デバイスがもう一機あればなんとかなるけど僕が持ってたのはレイジングハートだけだったから」

「まあそれは気にするな。なんだったらあの黒いデバイス奪って使うさ」

「デバイスに認められてないからできないよ！」

同じ男だからふざけあえる不思議な感覚。友情。この二人にはそれが芽生えていった。レイジングハートはそれを見てどう思ったのだろうか？

「さて、そろそろなのはを迎えに行かないとな」

「あ、本当だ」

外を見るともう夕方。今日は塾は無いのははもうそろそろ帰っ

てくる頃だ。

「さあ、いくぞ」

そう言つてレイジングハートを掴もうとする純一だが……

コロコロ

「……………」

「……………」

再び掴もうとするも……

コロコロコロコロ

「おい……………」

「I do not want you to touch」

レイジングハートと友情が芽生えてない純一には掴めなかった……

ボストンバッグを持った純一はユーノを肩に乗せて聖祥の通学バスが停まる路地で待っていた。

「お、来たか」

ディーゼルエンジン特有の排気音のする方を見ると聖祥の通学バスが来た。バスが停まってプシュー、という気圧が抜ける独特の音のあと、なのはが降りてくる。

「純一くん、ユーノくん。お迎えありがとう」

「おかえり、なのは」

「迎えに来てやったんだ。よきにはからえ」

「Why it seem to be great?」

レイジングハートが純一にツッコミをいれつつも、なのははレイジングハートを見て笑顔になる。

「レイジングハート！ 私と一緒にがんばってくれる?」

「All light・My master」

「ありがとう」

——戦うじゃなくて、がんばる?

なのはの言葉は純一にどう影響するのだろうか?

海鳴臨海公園。純一が初めて魔法と出会った場所。まだ見つかってなかったもう一つのジュエルシードが覚醒した。

「封時結界、展開！」

公園に結界を展開したユーノ。既にバリアジャケットを纏い、レイジングハートを暴走したジュエルシードに向けるのは。

——木のバケモノとは、RPGかよ！

公園に生えた一本の木。このジュエルシードは幹のところに目と口がつき、太い枝を腕のように構え、根を足のようにしたジュエルシードの姿はたしかに木のバケモノだった。純一は離れたところからその光景を見る。

——デバイスが、武器があれば！

純一のハリセンは対魔導師用の武器にはなりえるがジュエルシードに通じる保障は無い。しかも、フェイトの仮説が事実であれば同じジュエルシード。共鳴し、最悪のことが起こりえるため、純一は離れたところから見ている自分が悔しかった。

「グオオオオ！！」

バケモノの咆哮。その直後に何発かの魔力弾が撃ちこまれるがバケモノのバリアに阻まれる。

「へー、生意気にもバリア持ちなんだ」

「……………」

純一たちの後ろ。そこにはフェイトとアルフがいた。

「なのは、あいつらは俺が相手する。お前はジュエルシードを！」

「え！？ う、うん！」

ハリセンを握り、二人に向かう純一。勝てないのは解っているが何もしないのは勝てない以上に嫌だから。純一はハリセンに込めた魔力で攻撃しようとするが……

「アンタみたいなザコはフェイトが相手するまでもないよ！」

純一のハリセンを攻撃指向の魔力を纏った拳で相殺し、一瞬の足止めをする。その隙にフェイトはジュエルシードの元に向かう。おそらく、始めからそういう魂胆だったのだろう。

「犬女相手に長く戦う気はない。さっさと終わらせてやる！」

「アタシはあの子の使い魔だよ。アンタみたいな戦い慣れたのか、そうでないのか解らない奴に負けないよ！」

純一は気が付いているだろうか。自分が焦っていることに。

「アークセイバー。行くよ、バルディッシュ」

「Arc saber」

「Shooting Mode」

フェイトのバルディッシュのヘッド部分が九十度起き上がり、魔力の鎌を形成する。レイジングハートも本体である赤い宝石の周りにある三日月形の先端を音叉状に組みなおし、射砲撃形態に入る。

「行くよ、レイジングハート！」

「せいっ！」

「オオオオ！」

フェイトの飛ばした斬撃はブーメランのように回転しながら根を斬り、本体のバリアに阻まれるも余裕が無いのか、呻き声をあげる。

一方上空ではなのはがレイジングハートを槍のように構える。

「撃ち抜いて！ デイバイン——」

「Buster」

レイジングハートの先端の環状の魔法陣から桜色の魔力砲撃が放たれ、上側にもバリアを張ったジュエルシードを徐々に地中に押し込んでいく。フェイトは左手で魔法陣を構成し、砲撃魔法を展開する。

「貫け轟雷！」

「Thunder smasher」

フェイトが魔法陣をバルディッシュで貫くと純一の時に使ったのと同じ金色の魔力の奔流がジュエルシードのバリアにぶつかる。

木のバケモノは最後の呻き声をあげて消滅。一個のジュエルシードに戻った。

「……………」

「……………」

封印術式の込められた砲撃によりジュエルシードの封印は完了している。あとはどちらが手にするか。なのは「戦うしかないの？」と、言いたげな瞳と泣きそうな表情で。フェイトは「邪魔をするなら……………」と、どこか悲しげな瞳と無表情で。

「私は………… フェイトちゃんとお話したい。争うだけじゃ解らない。気持ちをデバイスに、魔法で伝えようとしても解り合えないと思うの。だから話してフェイトちゃん！ フェイトちゃんの言いたいこと、伝えたいこと！ それをなのはに話して！」

「言いたいことは、それだけ？」

あなたの言う事に聞く耳は持たない。そう言いたげな声色でフェイトは冷たく返す。

「互いの目的はジュエルシールド。譲れないのなら、取り合うしかない」

フェイトは魔法の術式を構築していく。

「ストップだ!!」

二人の間に割って入ったのは純一ではない黒髪の少年。黒いバリアジャケットを身に纏い、魔導の杖を握る魔導師。

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

見た目はなのはやフェイトと同年に見える少年。しかしその声には年に似合わない威厳や風格を感じる。

「時空管理局……」

「なんだそりゃ？」

純一と対峙するアルフはまるで「厄介者が現れた」と、表情に出している。

「まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら

――」

言葉を中断し、水色の防御魔法を展開するクロノ。その先からはオレンジ色の魔力弾が数発、防御魔法に着弾するも、はじかれていた。

「フェイト、撤退するよ。離れて！」

そばにいる敵——純——など視界に入っていないかのように魔力弾を構成するアルフ。フェイトが飛び上がった瞬間、魔力弾はクロノとなのはの二人に放たれるが二人はアルフやフェイトの位置とは反対側に下がることで避ける。地面に着弾したことで目くらましの煙が巻き上がり、二人の視点からはフェイトとアルフが見えない。フェイトはその隙についてジュエルシールドを確保しようとするが煙の向こう側から明るい水色の魔力弾が高速で飛来し、それを防ぐ。

純一はその光景に戦意が失せていった。

肩から血を流しながら落下するフェイトを狼になったアルフが救う。

「逃げるよフェイト！　しっかり掴まって！」

それはさせない。と、言わんばかりにデバイスの先端に魔力を集中するクロノ。諦めかけたその時。

「だめー！　撃たないで！」

間に入り、両手を広げてクロノの前に立ちふさがるなのは。この意外な行動にクロノは魔力を霧散させてしまう。アルフは自分の、狼の誇るスピードと多重転移で瞬く間にその場を離れていく。

『クロノ、お疲れ様』

突然ライトグリーンの魔法陣が展開したあと、その中央には同色の髪の若い女性が映っている。

「すみません、片方は逃がしてしまいました」

『うっん、まあ大丈夫よ。でね、ちょっと話しを聞きたいからそっちの子達をアースラに案内してくれるかしら?』

若い女性はなのは、ユーノ、純一を指す。

「了解です。すぐに戻ります」

「あ……」

——じくっ、かんりきよく? あーすら?

あまりの急展開に二人は開いた口が塞がらなかった。

次元空間内、濃い青と紫がマールブル模様^{まる}に動く空間に時空管理局の次元航行船・アースラ。隣接する二つの○から二本の爪が伸び、全体はコの字を描いた独特な形状をしている。

アースラの一室。机やイスが無く、集会などに使われるのだろう。ホールに四人は転移した後、クロノが艦長室まで案内する途中なのはは念話をする。

《（ねえ、ユーノくん、ここどこお……）》

薄暗い廊下に不安を煽られるのか、なのはは萎縮したまま歩く。
ユーノと純一はいつも通りだが。

《（時空管理局の次元航行船の中だね。えっと、簡単に言うといくつもある次元世界を自由に渡るための船）》

《（あ、あんま簡単じゃないかも……）》

《（大体わかった）》

《（ふえええ！？ 純一くんわかるの！）》

純一は様々な本を読んできた。中には『異なる世界を自由に渡る方法』を表現した作品もあったため、それらを参考に漠然とイメージしただけだが……

重厚感のある自動扉を抜けたあと、クロノが突然言い出す。

「ああ、二人ともいつまでもその格好というのも窮屈だろう？ バリアジャケットやデバイスは解除して平気だよ」

「あ、そっか。そうですね。それじゃ……」

こういうのを三段活用と言うのだろうか？ なのははそう言いつつレイジングハートを赤い宝石に戻し、バリアジャケットから聖祥指定の白い制服に戻る。ただバリアジャケットがこの制服を元に構築されたため、外見上に大きな変化は無いが……

……そこにツツコムか？

「君たちの間で何か見解の相違でも？」

おそらくこの四人の中で最も状況が見えない人であろうクロノも声がさっきのような威厳のある声ではなく、困ったような声をあげていた。

「え」と、なのは？ 僕たちが初めて会った時って僕はこの姿じゃあ……」

「ちがう！ ちがう！ 最初からフェレットだったよー！」

「純一には……最初に話してなかったっけ？」

「お前が話した事と言えばネズミの王。ネ・ズーミから淫じゅー」
「わー！！！！ そんな事は話してないって！！」——とりあえず俺聞いてない！！」

「うーん………」

目を瞑って人差し指で頭をトントンと叩くユーノ。彼の脳内では記憶という海で地引網をしているのだろう。まちがっても「さあ、検索を始めよう」とは考えてない。

「……………あー！！！！ あ、あははは、そうだそうだ。ゴメン
ゴメン、この姿見せてなかったし話してなかった」

「だよーね！ そうだよーね！ びっくりしたあー」

「お前の勘違いやないかい！」

スパァン！

「イッタアア……」

どうもこのハリセン。ツツコミにしか使い道が無いような………今回は『しばくぞワレエ！』と書かれていた。

「あゝ、ちよつといいか？ 君たちの事情はよく知らないが、艦長を待たせているのでできれば早めに話を聞きたいんだが」

もはやこのコントのような状況に陥った経緯を「知りたい」と言い出すような人はいるのだろうか？ 少なからず彼、クロノは知りたくない側の人間だ。

「あ、は、はい……」

「す、すみません……」

「では、こちらへ」

……

……

……

「艦長。来て貰いました」

「ほお？」

金属製の自動扉が開き、中を見たなのははその光景に驚き、純一は開いた口が塞がらなかった。部屋の中には数多くの盆栽と日本庭園の装飾として用いられる鹿威^{ししおどし}し。この部屋の主の日本好きの度合いが伺える。

「お疲れ様。まあ三人とも、どうぞどうぞ、楽にして」

この部屋の主、リンディ・ハラオウンは新緑の長い髪、青い制服を着て赤い絨毯の上に正座で待っていた。

「どうぞ」

クロノはなのは、ユーノ、純一の分の抹茶と羊羹を出した。

「あ、はい」

「いただきます」

予想だにしない展開に二人は未だに呆けていた。

……

……

……

「なるほど。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「それで、僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある！」

リンディは穏やかな口調で言うが、クロノは厳しく叱咤する。その言葉にユーノは萎縮する。

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

「遺失世界の遺産、って言っても解らないわね。次元空間にはいくつもの世界があるの。それぞれに生まれ、育っていく世界。その中に極稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化したそれらが世界を滅ぼしてしまってその後に取り残された失われた世界の技術や遺産」

「それらを総称してロストロギアと呼ぶんだ。使用法は不明だが使いようによっては世界どころか次元空間すら滅ぼす事もある、危険な技術」

「しかるべき手続きを持ってしかるべき場所に保管されてなければいけない品物。あなたたちが探しているジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

「僕たちはロストロギアを積んだ次元航行艦からの連絡が途絶えたため、第97特別管理世界の調査を中断、その探索に移った」

「第97特別管理世界？ たしか世界は管理世界と管理外世界に分けるはずじゃあ……」

クロノの説明に解らないことがあったのか、ユーノが聞く。

「キミが知らないのも無理はない。第97特別管理世界は二つ以上の世界が融合した世界なんだ」

「……………えーーーーー!!」

クロノの言った事を「信じられない!」と言わんばかりの大絶叫でユーノは返す。

「融合した……世界？」

「なにそれ？」

二人からすればただでさえ訳のわからない話なのにユーノのこの反応が更にややこしくする。

「二人ともいい？ そもそも世界は繋がる事も一つになる事もないんだ。この世界で言う“水と油の関係”だっけ？ とにかくいくつも世界はあっても交わらないし一つにならない。でもこの世界は現に融合してる。これは旧暦・新暦を含めても記憶に残るほどの大事なんだよ!!」

興奮しながら説明するユーノだが二人はミッドチルダの人間ではないため旧暦だの新暦だの言われてもピンとこないしそもそも“水と油の関係”の使いどころが違う。と、言いたかった。

「なにやら話しが外れていきそうだから中断するが、とにかくジュエルシードは次元干渉型のロストログアでこれは民間人が関わっていいレベルの事件ではない。送っていこう。元の場所でもいいね？」

クロノの有無を言わさぬ態度に三人は頷くしかなかった。

……

……

……

「そういえば、ハリセン預けるの忘れてたな」

フェイトの仮説が正しければこのハリセンもジュエルシード。ならばアースラに預けるのがベストだったがジュエルシードの正体と唐突な終わり。自分たちの世界の異状。この二つに三人とも意気消沈していた。

——あいつとも決着つけないとな

脳裏に浮かぶポニーテールの少女。なのははフェイトと話し合いたいと言っていたが自分と彼女は話し合える間柄ではない。自分の相手は敵。自分は相手の仇。どちらかが死ぬまで続く争い。

純一は、一時離れる事を決めた。

なのは桃子の手伝いで皿洗いをしていた。士郎と恭也、美由希が裏山に練習に行ったあと、なのは母、桃子にユーノの正体と魔法を隠したまま、しばらく家を空ける事を告げていた。

ユーノはリンディ、クロノ、エイミィの三人に“自分となのはが”管理局に協力する事を提案する。もちろん反対されたがなのは有する魔導師としての高い資質を材料に交渉成立。純一の事も聞かれたがユーノは「俺にはやることがある。それを片付けたら合流する」という言伝を残してひっそりと離れていったそうだ。

あの廃墟。自分の小太刀と短刀入りのポーチを腰に巻き、純一は待っていた。

――まさか監視が解かれるとはな――

自分の部屋に入ったとき、監視カメラと盗聴機が全て取り除かれ、視線も感じなくなったことには驚いたがそれに拍車をかけたのは机の上に置いてあった自分の武器と書置きだ。

『みんなには内緒にしておく。ケジメをつけてから帰ってきなさい』

誰が書いたのかは解っている。
“ケジメ”が何かも。

コッソリ.....コッソリ

暗闇の向こうから隠す気もない殺気と靴音。捉えようによってはホラーな状況だが純一はホラー物に怖いと思った事はない。

やってきたのはポニーテールの少女。以前は拳銃一丁しか持っていなかったが今回は両手に持っただけでなく、もも両腿にも一丁ずつ装備している。前回は左手だけだったデリンジャーも今回は両手に隠している可能性もある。

——ヤク？

窓から入る月明かりで顔色を見たときそう感じた。青白い顔色。虚ろな目。鼻にできたブツブツ。明らかに普通じゃない。そのことから純一は少女がドーピングをしているのではないかと想像する。

「クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロス……」

——解り合いたいからお話し、か……相手がことういうのでも解り合えるのかね……

純一は腰の小太刀を抜き、少女は両手の拳銃を憎しみの相手に向ける。

バンツ

同時に引き金を引いたため、一発しか撃ってないように思える銃弾。しかし二発の弾は純一に当たることなくコンクリートにめり込む。純一は前回と同じように投擲用の短刀を一本投げるが少女は斜めにバックステップしてかわしつつも今度は四発の銃弾を撃つ。狙いはバラバラだがそれゆえに大きな動きで避けるしかなく、純一の攻撃は後手になり、少女がイニシアチブを取る。

——ヤク中の割りに頭が働くことで！

柱の影に隠れる純一だが「カン、カン」と金属音を鳴らしながら丸いものが転がってきた。

——ここ建物だぞ！ 正気か！？

すぐにその場を離れる純一だが撃ちこまれてくる銃弾に焦りが生じる。その時、月明かりにキラリと反射するものが見えて一瞬足を止める。その一瞬に少女は狙いを定める。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

バンッ

「ウッ！」

足を撃ち抜かれ、バランスを崩してその場に倒れてしまう純一。足から駆け上ってくる激痛に大声を出しそうになるがそこは堪える。撃ち抜かれた所から血が周りに広がっていく。

「ナイスショット！ おじょうちゃんやるねえ。あ、もうい

いよ。ストップね」

いつの間にいたのか、純一に仕事の指示をしていた金髪の男が二人の前に姿を現す。

「お、まえ……」

「二人が裏切ってくれちゃったおかげでさあ、俺こんなミジメな姿だよー」

その姿をよく見ると髪はボサボサ。スーツはあちこちが痛んでおり、どういう状況だったのが推測できる。

「ま、先輩をやってくれたのはウレシイんだけどさ。あの人マジウザかったから」

「コイツに……」

激痛に耐えるあまり言葉がうまく出てこない。だが男は純一が何を言おうとしてるか解っていた。

「何をしたかって？ そりゃー前回負けちゃったからさあー。オクスリと頭の中をチヨイチヨイツとね」

男は頭に指を当てグルグルと指を回す。純一はそれだけで解った。

——頭の中を、記憶をいじったのか！

「いやー記憶をイジルのは楽しいねーあることないことデッチあげれるからさー。あ、オレがボクちゃんの頭の中イジったの知ってる

？」

男の言葉に純一は驚く。自分が特殊な記憶喪失なのは士郎と桃子のおかげで解ったがその原因は……

「“上”からの指示でさーボクちゃんの頭の中ちよーとイジってあのオバサンをママに思うようにしちゃったわけよ。どう、すごくない？」

軽薄そうなの男にあった。

「頭の中いろいろイジるのも大変なわけよ。なんたってメチャクチャ“魔力”使うしさー」

——魔力？

最近聞きなれたその言葉との関連情報。男は頼んでもないのにベラベラと喋っていく。

「ボクちゃん“魔法”って言葉知ってる？ 大昔の魔法使いが使ってるアレとは違うよ。信じられないかもしれないけどさ、異世界からそれが伝わってきたのよ。ごく最近。オレが使えるのは記憶操作系っていうらしいけどさー。イヤマジ便利だわ。頭ん中チヨチヨイとイジるだけで思った通りに進むしさー。ボクちゃんは簡単に操作できたけど、この譲ちゃんは馬鹿みたいに憎い憎いって言っちゃって中々うまくいかなかったんだけど錯乱状態になった時にムリやりやったのが悪かったのか頭クルクルパーになったけどねー」

つまりこの男は魔法で純一や少女の記憶を書き換え、自分の欲のままに利用していた。しかも魔法を伝えたのは第97特別管理世界

以外の世界。これが事実ならジュエルシード以上の事態だ。

「向こう側」でイロイロあったみたいけどさあ、ボクちゃんは“こっち側”の人間だからね」

男が右手で純一の頭を掴むと魔法を発動する。

「うわあああああああ！！」

短くても、大切なこちらでの記憶。それらが書き換えられていく。

アリサと出会い、サッカーをした記憶

すずかと出会い、友達になった記憶

なのはと出会い、姉弟きょうだいのようになった記憶

高町家のみんなと出会い、家族として接してもらった記憶

みんなでふざけあい、その日常で笑っていた記憶

それら全てが赤い記憶に書き換わっていく。

お前を選んでやる

「な、なんだこれ……」

男は思わず掴んでいる頭を離し、たじろぐ。突然自分の魔法が効かなくなり、純一は足元から火の粉のようなものを辺りに撒き散らしていく。しかし火の粉のようなものに触れても熱くないことから、温度を持つものではないことが解る。

「ハカイする……」

日本人特有の黒目が徐々に赤く変わり、瞳孔が開き、光りを反射しない虚ろな瞳になる。銃弾によって受けた傷は映像を巻き戻すかのように治っていく。純一は小太刀を握り、ゆっくりと男に向かって歩んでいく。声は感情を感じないほど無機質で……

「ただハカイする……」

「嬢ちゃん！ なにボーっとしてるんだ。殺れ！」

少女は弾を全て撃つがそれらは純一の前に現れた環形の防御魔法で防がれる。

「お、おまえも魔法が使えるのか!？」

男は純一に質問するが純一はそれが聞こえていないのか、ただ叫ぶ。

「ハカイする!」

小太刀を一閃。それだけで男の喉を切り、純一に血しぶきがかかる。少女は男が死んでも魔法の効果は切れてないのか、虚ろな瞳で足の拳銃を抜き、純一に発砲するが……

「アアアアアアアアアア!」

引き金を引いた瞬間、両手首を切断され、痛みあまり、立っていらなくなる。

純一は拳銃を左手で拾ったあと、引き金を引こうとしたが銃を捨てる。

チツチツチツチ……

タイマーの音が聞こえ、そちらに目をやると先ほど少女が投げた丸いもの。爆弾があった。どうやら手榴弾の形をしたタイマー非表示の時限爆弾なのだろう。

「……………」

……いきなり風が吹き抜け、純一の姿が消える。次の瞬間、落ちていたはずの手榴弾も掻き消えた。

建物に溜まっていた埃が凄まじい勢いで舞い上がった時、初めて足音が響く。

そして、一瞬にして音が消え、風が凪いだ時、手榴弾は建物の外に放り投げられていて、純一は柱の陰に身を隠していた。

直後、窓の外から轟音と熱風が殺到し、部屋の大半を蹂躪した……。

外を見ると、爆発と爆風によって周りの木々はなぎ倒され、辺りは火薬の匂いで満たされる。

二人に目を向けると既に死んでいた。大量出血が原因だろう。純一は小太刀についた血と脂を拭うとその場を後にした。

第15話―世界を壊すモノの産声―（後書き）

さて、今回いくつかの付箋を貼りました。

まず「世界の融合」これはせつかくクロスさせる以上「クロスした事も利用する」という考えのため行いました。これらは“オリジナル編”で回収していきます。

2011/9/15

本文終盤を修正しました。

第16話―罪と償い方―（前書き）

人の命を奪ってしまった純一。

無意識に動いていたとはいえ、純一が命を奪ったことに変わりはない。

そして純一は、逃げるようにアースラに向かう。

第16話―罪と償い方―

パトカーと救急車のサイレンが聞こえる道路をうつむき気味でゆつくり歩く少年がいた。

――俺が斬ったんだ……

小太刀は服の中に隠しているため、誰も気づかない。しかし夜中に子供が外を出歩いているのに誰も気に止めないのは山火事のほうに注意がいつているからだろう。

――殺すつもりはなかった……ただ戦う力を奪えばよかったのに

……

ここに来る前はなんとも思わずやっていた事。だが今は、心が“何か”に押しつぶされそうだった。

「血だらけだ、洗わないとな……」

赤いシャツや黒いズボンはそれほどでもないが白い上着は返り血で真っ赤だった。

……

……

……

十二月、夜の川はとても冷たい。刺すような冷たさは手だけでな

く心にも刺さりそうだ。

——大体いいか？

暗く、見えにくいので近くに寄せて上着を見る。

「うわ！」

一瞬自分の手が真っ赤に染まっているように見えて驚き、尻餅をつく。上着は地面の上に落ちたのでドロだらけだが。

——……気のせいか

純一は自分の手に血がついてないことを見てホッとする。今度はついたドロを落とすため、再び冷たい水で洗う。

——しばらくあの家には戻れないな。なのは達についていくか……

純一は、アースラに合流するためユーノに念話を送った。

次元空間内、アースラのミーティングルーム。そこでののは、ユーノ、純一の紹介をするためリンディはアースラメンバーに召集をかけた。

「というわけで本日零時をもって、本艦全クルーの任務は第97特別管理外世界の調査からロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

「はい、ユーノ・スクライアです！」

リンディの紹介に合わせて自己紹介するが、緊張しているのがよく解る。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん達」

「た、高町なのはです」

なのはも緊張しているようだ。

「名乗るほどの者ではない!!」

この言葉を聞いた瞬間、二人を除いてみんながずっとける。

「以上三名が臨時局員として、事態に当たってくれます」

二人、リンディと純一は「ナイスよ」「ありがとうございます」と、アイコンタクトで会話していた。発案者は不明だが共謀したのは間違いないだろう。

みんなが再度着席する時になのはとクロノの目が合い、なのはに笑顔を向けられたクロノは恥ずかしさから顔をそらし、ユーノはクロノをジト目で見ていた。

——クロノ。なのはと付き合っなら人類最強クラスの男とその息子、シスコンに勝てないとダメだ

どちらが思ったのかそれは解らない。

アースラブリッジ。リンディから段取りを告げられたあと、エイミイが暖かい緑茶とミルク、砂糖を持ってきた。

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

——ちよつと待て、お茶はともかくミルクと砂糖はいらないだろ！

内心ツツコミを入れる純一だがこの後さらに驚く。リンディはスプーンで“てんこ盛りの砂糖二杯”を入れたあと、ミルクを多めに入れる。お茶と呼ぶには相応しくないそれをさも、おいしそうに飲んでいく。

リンディの後ろ側にいるため、なのはと純一は飲んでいる人の表情がわからないが当人は「は〜」と、好きなものを飲んだときの感想を出す。二人は「信じられないもの見た」「アンタは味覚がおかしいよ!」と、感想がそれぞれの顔に書いてある。

「そつえばなのはさん、純一くん。学校のほうは大丈夫なの？」

「あ、はい。家族と友達には説明してありますので」

「俺は春から入学するので大丈夫です」

純一の答えに違和感を抱いたリンディだがあまり個人の事情に踏み込むのもどうかと思い「そうなの」と、返事をする。

《（おい、クロノ！）》

《（なんだ？ 任務中だ。私語は慎め）》

《（リンディさんがお茶にたつぷりの砂糖とミルクを入れたがそっちではそれが普通なのか？）》

《（ああ、あれか）》

クロノは少し悩む。いつもなら《（そんなくだらない事を聞くな）》と返すところだが相手は異世界の人。もしそれをミッド全体の文化と誤解されては嫌だしこれが原因でコミュニケーションをとりにくくなつては任務に影響が出るかもしれない。と、思い、返事をする。

《（あれは母さん……艦長だけの好みだ。ぼくはそういうのは全然好きじゃないしミッド全体でもそんな文化は無い）》

《（そうか。悪いな、邪魔して）》

《（気にしないでくれ。最初に言ってなかったぼくにも非はある）》

相手が全て悪い。とは思いつまみないようにクロノからもフォローをいれる。

——一日一杯飲んだとしたら何日目で糖尿になるんだろうか？

純一は恐ろしいことを考えていた。

ジュエルシードはなのは、ユーノの二人一組。純一の単独と二手に分かれて行動することになった。クロノはアースラの切り札のため、基本はアースラで待機。有事の際に現場に向かう事になっている。

純一は山の中で野生の熊を取り込んだジュエルシードを相手にしていたが腕を振り回すか突進してくるしか能の無い相手に苦戦するわけもなく、スマートに封印した。

《（こちら純一。ジュエルシード、シリアル？の封印・確保完了。クマゴローは意識を失ってるが無事だろ）》

クマゴローとは相手にしていた熊に勝手に命名しただけでみんながそう呼んでいるわけでない。

「はいはい。じゃあ転送ゲート開くからそこで待っててね」

通信室にいるエイミィはモニターに映る純一に返事したあと、パネルを操作して転送ゲートの座標を固定していく。

「彼女たちもすごいがこっちは別の意味ですごいな」

「あ、クロノくん。確かにそうだね。いくらデバイス持った魔法戦が初めてとはいえやけに戦い慣れた動きだったし……クロノくんとどっちが強いかな？」

「接近戦なら僕が不利だが、距離をおいて戦えば確実に勝つ」

冷静に言っているが純一への対抗心が見え隠れする言い方にエイミィは「クロノくんカワイイ」と、思う。言っても照れ隠しで拗ねるのは解っているが。

現在純一が持っているデバイスは武装局員が持っているストレージデバイスの予備機で音叉状の先端がレイジングハートのシューティングモードに似ている。柄も杖と呼ぶには短く、本来の長さの四分の一ほどだ。バリアジャケットは濃紺の服に肩当て、胸当てがあるのだが純一の希望で肩当て、胸当ては外している。

戦い方も武装局員とは全く違う。多くの武装局員は射撃魔法を戦い方の中心にし、接近戦は戦いの補助くらいにしか使わないが純一は音叉状の先端から魔力刃を構成。飛行魔法と足場魔法を組み合わせた剣舞とも言える鮮やかな剣捌きで熊を圧倒した。

ちなみに純一は「もう一本あれば二刀流ができるしそれが御神流の本来の戦い方。自分はまだ未完成だけどな」と言っていた。今でも十分な強さを持っているのに二刀持たせて本来の戦い方をされた

ら……

——僕でも勝つのは難しくなってくるな……純一がなのはと組んだら接近戦は純一。近・中距離の射撃戦はなのは。最高の布陣が出来る上がる。

単純な魔力量と魔法資質なら管理局は高町なのはは喉から手が出るほど欲しい人材だ。御神純一は欲しくない。しかしこの二人を一組で行動させた場合、目覚しい結果を出していくだろう。

——なのはは現時点でも高ランクを得られるがその分使い所は厳しくなる。純一は一般ランクだから動かしやすい上に単独でも十分強い。純一がアースラに来れば僕の補佐という事で現場に行ってもらってその間僕はデスクワークに集中できて仕事が楽になる

内心、怪しく笑うクロノ。転送待ちの純一は背筋にゾクリと悪寒が走った。

十日後、なのは達が手に入れたジュエルシードは？・？・？・？の四つ。向こうは？の一つ。

「残り六つか……」

三人は一部屋で待機しており、ユーノが呟いている隣で純一は端

末のキーボードを叩き、第97特別管理世界のニュースを見る。と言っても見たいニュースはただ一つだが。

——『世界の歌姫。ティオレ・クリステラ主催のチャリティコンサートはテロ予告があつたが無事終了。』

ティオレ・クリステラは同日、引退を発表。CSS

クリステラ・ソングスクール

はティオレの娘にして次代の歌姫、フィアッセ・クリステラが校長を務める』か……

彼が気にしていたニュース。それは自分達が中止しようとしていたチャリティコンサートの結果。どこのメディアのニュースを見てもテロは起きておらず、チャリティコンサートが無事終了した事とフィアッセ・クリステラのデビューの記事しかなかった。

純一は端末を閉じ、三人で食堂に向かう。

アースラの食堂。転送ポートで合流し、一緒に食事することになっていた三人は変わった形のテーブルの食堂で話し合う。

「残りのジュエルシード、中々見つからないね」

「うん、結構長かかるかもね。なのは、純一ごめんね、寂しくない？」

「別に、寂しくないよ。ユーノくんや純一くんと一緒だし。一人ぼつちは結構平気。ちっちゃい頃はよく一人だったから」

普通なら話を止めて謝るところだがユーノも純一も“なのはが話しておきたい”事を察して真剣に聞く。

「うちね、お父さんが仕事で大怪我してしばらくベッドから動けなかった事があるの。喫茶店も始めたばかりで、今ほど人気がなかったからお兄ちゃんとお母さんはいつもずっと忙しくて、お姉ちゃんはお父さんの看病で……だから私、割と最近まで家で一人にいること多かったの。だから結構慣れてるの」

昔の事を話すとその時の寂しさが出てきたのか、なのはは悲しげな表情だ。

「そっか」

「そういえば私、ユーノくんの家族の事あまり知らないね」

「ああ。僕は元々一人だったから」

「え、そうなの？」

「両親はいなかったけど部族のみんなに育ててもらったから。だからスクライアの一族みんなが僕の家族。純一は？」

純一はなにか悩んでいる様子が見て取れる。ユーノの言葉に彼は答えてくれた。

「俺さ、小さい頃に両親を爆弾テロで亡くしてさ。おまけに俺は記憶がゴチャゴチャで養親
ようしん

を実の親と思ってたんだ」

なのはよく知っている。純一が特殊な記憶喪失であることも、自分の叔母、美沙斗が彼を海外で治療するために美由希を父に預けたことも。しかし純一が美沙斗さんを実の親と思っていた事を聞いたのは初めてだ。

「奇跡的に後遺症も無かったんだけど、美沙斗さんの仕事が特殊な仕事でさ。世界中を転々としながら生活するしかなかったし、俺の怪我也完治してなかったから中々こっちに戻れなかった。それでも怪我が完治したあとは俺も役に立ちたいと思って美沙斗さんの仕事を手伝っていった。危険な地域に足を踏み入れることもあったから、御神流を学んだ。ようやく帰ったんだけど、記憶は相変わらず。最近は知らない夫婦のことを思い出すんだけどそれが懐かしくてさ。もしかしたらこれが俺の本当の両親なんじゃないか？ そう思うんだ」

どっちの親が本当の親かわからない。二人には想像もできない事だが彼のことを考えると心が痛む。

「さてと、残り六個のジュエルシードだが……」

空気が暗い方向に行こうとした時、純一が別の話題を振る。彼なりの氣遣いなのだろう。

「地上は探しつくしたからね。後は海の中だと思うけど」

「でもでも、海だったら潮の流れとかで大分動くよ」

二手に分かれて回収しているが向こうもジャミングを巧みに使い、こちらの補足から逃れながら回収している。計算では残り六個なの

だがまだ場所が特定できない。エイミィが搜索範囲を海にまで伸ばしているがなのは言った通り、潮の流れに乗ったりしたら搜索は困難だ。

純一はふと、違う事を考える。少女との戦いの中で聞こえた声。

—— お前を選んでやる ——

聞こえた感じは念話のようなものではない。どちらかというと……自分の内側から響くような声だった。

—— だとしたら俺は何に選ばれたんだ？ ——

あの後、圧倒的な力で少女を切り伏せた自分に嫌悪する。

—— なぜ、あんなことをした ——

その言葉は自分に言いつつも、自分以外の何かに言いたかった。

「純一くん、どうしたの？」

なのはに話しかけられ、ハッとしながらも答える。

「いや、なんでもない」

「うそ。何か悩んでいるというか、後悔しているというか……そんな感じだった」

なのはは今より幼い頃、家庭が大変な時期があつて家族に「一緒に遊んで」と言えなかった。その理由も「みんなが大変なのに無理

を言うてはいけない」と、自分に言い聞かせ、周囲に気を配っていた。その時から彼女は他人の気持ちに敏感なところがあった。今回も純一の様子がおかしいことに気がついたのはその点が大きいのだろう。

なのはからすれば純一の印象は“不思議な男の子”だった。今みたいによく目の前にいるのに時々すごく遠くにいる気のする男の子。同じ年なのに過ごしてきた時間が違うような不思議な感じ。でも、アリサやずずかと同じ大切な友達。

——でも……

本当にそれだけだろうか？ たまに思う。彼は周りから一歩引いてるというか、少し距離をおいている。それが気になる。

——ああ、そうか。昔の私と同じなんだ。でも、違うところもある
幼い頃、家族と少し距離をおいてしまった自分。あの家にどこか馴染んでない自分。そこが同じで……

——お父さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんと同じお稽古をしている。そこが私と違うところ

似たところがあつて、共感したけど、違うところに嫉妬もしていた。

なのはは解った。純一の事を友達と違っていても、どこか距離を置いていた自分の理由を。

——それでも、純一くんは友達だよな？

自分に言い聞かせるように言ったあと、アースラに警報が鳴る。

三人は転送ポートのあるブリッジに入る。正面のモニターではフエイトが海上で六つの竜巻と戦っている。それ全てが残り六つのジュエルシードなのだろう。

「フエイトちゃん！」

「状況は？」

「海上にあると思われてた残り六つのジュエルシードをまとめて封印するために魔力流を撃ち込んで強制発動させたんだ。だがいくら彼女でも無理だ」

純一の質問にクロノはただ淡々と告げる。純一は踵を返し、転送ポートに入ろうとするが……

「待つんだ。じきに彼女は自滅する。ジュエルシードの封印と彼女の確保はそれからいい」

「それじゃあ遅い。一個でも次元断層を起こすジュエルシードが六個も発動してるんだ。すぐに現場に行き、封印するのが適切なのはずだ」

純一とクロノ。顔を合わさずに会話をしていた二人だが純一が自分のやりたいことを言ったあと、顔を合わせ、にらみ合いになる。

二人から発せられる重い空気。エイミイを始め、ブリッジスタッフも機器の操作の手が止まり、二人の方に視線を向ける。

「ふう、いいわ。許可します」

「艦長！」

この空気を見かねたリンディはため息を一つこぼした後、転送ポートを開く。クロノは反発するが……

「民間協力者、御神純一の発言に不穏当なところがありましたか？
クロノ・ハラオウン執務官」

艦長としての言葉にクロノは「ありません……」と答えるしかなかった。純一となのははリンディの後ろにある転送ポート内に入る。

「転送先の座標固定。転送ポート起動。がんばってね、二人とも！」

エイミイの声援を聞いたあと、三人は海上の更に上、上空に転送される。

「風は空に、星は天に！」

私と純一くんは一緒に空を落ちていた。耳からは風の音しか入らなくて他の音は聞こえない。純一くんも同じかな？」

「輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に！」

ユーノくんが教えてくれたレイジングハートの起動パスワード。でも私は自分自身に言い聞かせるの……

「レイジングハート、セットアップ！」

だって、まだフェイトちゃんとお話してないから……

現場上空に俺となのはは転送され、重力に従って自由落下している。耳に入る音は大気の音だけで他には何も入らない。なのは同じなんだろう？

「もう誰の命も奪わない」

だから俺は俺への誓いと……

「御神の剣は殺人剣。でも俺は……」

コレが命を奪う以外の何モノでもない事を深く刻み……

「この剣で、守りたいものを守る！それが、俺の剣だ！」

同時に、俺の力の使い方を俺と心に刻んだ

なのはは白いバリアジャケットを纏い、靴に桜色の魔力光を輝かせる小さな羽根を生やし、下に向かっていく。その姿は天上から降りる天使のようだ。

純一は丈の長いバリアジャケットを身に纏い、青い魔力刃を構成する。この空のように澄んだ青のバリアジャケットと刃は彼に赤が似合わないように見える。彼もまた、天上の天使を守る天上の騎士のように降りていく。

なのははその手に不屈の心、レイジングハートを左手に握り……

純一は名も無き音叉のデバイスを右手に握り……

話し合いたい相手が待つ海へと降下していく。

——俺は命を奪った罪人

決意を口にしながらも、純一は自分のやる事を決める。

——例え一生赦されなくても、目の前にある者を、手が届くところにある命を守る！

例えそれがエゴや自己満足と言われようと、今成したいこと『フエイトを守りたい』この気持ちには揺るぎは無い。

——永全不動八門一派 御神真刀流小太刀二刀術

バリアジャケットを展開し、デバイスから魔力刃を展開させる。

——御神純一、救助行動に向かう！

第16話―罪と償い方―（後書き）

命を奪った剣士は命を守る決意をし、敵を助けに行く。

それで彼の罪が赦されるのかは誰もわからない。

今回から前書きに『前話のあらすじ』後書きに『次回のあらすじ』を書いていこうと思います。不評でしたらやめます。

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO　〈前編〉―（前書き）

命を守る決意をした神の剣士

黒衣の少女を守るため天上から天使と共に顕現する

相對するは六つの種

しかし剣は届かない……

「はあっ、はあっ……」

残りのジュエルシードを全て手に入れるために大量の魔力流を撃ち込んで強制発動させたフェイト。しかし魔力を大量に消費したためにアルフのサポートをもつてしても未だに一個の封印もできずにいた。

封印術式を込めた砲撃魔法を発動しようと魔力を練るが動植物などの特定の形を持った生物ではなく、海水という不定の形を取り込んだジュエルシードはフェイトのスピードを持っても紙一重で避けるのしかできない濁流を放ってくる。そのような状況で砲撃を撃つどころか、魔力を練る暇も無い。

――あの子たちも来るのかな？

脳裏に浮かぶのは白いバリアジャケットを着て、自分に何度も呼びかけてきた女の子と不思議な武器を持った不思議な男の子。

そんな事を考えたあと、太陽光を隠す厚い雲を割き、光りのベールが海上を照らす。そこから高い魔力を感じたフェイトはそちらに目を向ける。

雲を割き、天上から降りたのは無縫の白き衣を纏った天使。ではなく自分に何度も呼びかけてきた少女。

「フェイトオ！」

魅せられていた自分に危機を呼びかける大型の山犬になったアルフの声。後ろを振り向くとすぐそこに迫る水弾にフェイトは反射的に目を閉じた。

.....

しかし衝撃はなく、フェイトは目を開けると目の前には紺のバリアジャケットをなびかせながらも水弾を斬ったであろう音叉型のデバイスから魔力刃を右手に構え、背中を向けている男の子。

フェイトはその男の子のことを知っている。最初は地方世界では珍しい魔力の高い一般人と思っていた。しかし次に会った時は戦いになった風がありながら、攻撃も防御もおざなりな男の子。

「フェイトから離れろお！」

いつの間にかアルフが男の子の横からあの鋭い牙を突きたてようとしてた。でもガンツという音がした。硬いものに当たる時の音に似ていた。

アルフの牙を防御魔法で防いでいた男の子。以前は魔法はほとんど使えなかったのに……ああ、デバイスを持ってるんだ——デバイス？

「アルフ危ない！」

彼がカウンターの斬撃を振るう前にアルフに危機を伝えた。しかし彼は首だけをこちらに向けた。

「俺は戦いに来たんじゃない！」

「じゃあ何しに来たんだい!？」

「お前たちを助けに来たんだ!」

彼は、何を言っているんだろう……

予想だにしない彼の言葉にアルフもフェイトも動きが止まる。ジエルシードはなのはとユーノが対処している。

「助けに、来た?」

「ああ。いくらお前でもあれだけの魔力を使ってヘトヘトなのにジエルシードを六個も封印なんてむりだろう?」

「だから! 私とフェイトちゃんと純一くんに分け合っのッ! 二つずつ!」

遠くでなのはが叫んだ後、固まっていた三人にジュエルシードの雷撃が襲う。攻撃ではなく捕縛に使うものだが三人は散り散りになっ
てかわす。

なのははフェイトの隣に止まり、純一はユーノがチェーンバイン
ドで捕縛した三つの竜巻を横薙ぎ、逆袈裟、唐竹でそれぞれを斬る。

なのははレイジングハートから自身の魔力の半分をバルディッシュを介してフェイトに渡す。

「Power charge」

スチームを排出し、再び魔力刃による鎌をバルディッシュは構成した。

「Supply complete」

他者を近づけんと暴風を起こすジュエルシード。バインドで高速していたユーノもマントが千切れそうな暴風により吹き飛ばされることが意地でバインドは解かなかった。

「大丈夫か!？」

吹き飛ばされたユーノの背中を片手で受け止める純一。何度も水弾を斬っては雫を浴びたため、髪はどしゃ降りの雨に濡れたようになり、青いバリアジャケットも濡れて色を濃くしている。

「何やってんだい!　しっかりしな!」

二人に喝を飛ばしながらアルフもユーノと同じバインドで六つの

竜巻を捕縛する。ユーノはアルフの協力に驚くが、すぐに純一から離れて意識をバインドと妨害に集中する。負担が半分になったことにより全ての竜巻にバインドを伸ばしていった。竜巻は身動きは出来ず、二人の妨害によって攻撃もままならない中、純一はなのはとフェイトに合流した。

「ユーノさんとアルフさんが止めてくれてる。だから、今のうち！三人で「せーの」で、一気に封印！」

「Shooting mode」

「ああ！」

この前のなのはと違うなのはにフェイトは考える——この子は本当にこの前の子か？——と。

レイジングハートを三日月状のデバイスモードから音叉状のシューティングモードに変えたなのはにフェイトから離れ、竜巻に向かう。

純一は目つきを鋭くし、魔力刃に更に魔力を込めた。すると刃は輝きを増し、見た目からも分かるほど威力を増した刃を振りぬき、なのはを追いかける。

「Sealing form・Set up」

魔力刃を消し、ヘッドを更に九十度起こすバルディッシュ。その姿はデバイスフォームを“斧”と見るなら、このフォームは“槍”に見える。

「バルディッシュ？」

愛機の指示にない行動にフェイトはうろたえた。なのはと純一を見るとなのはは微笑みながらウィンクをした。純一はこちらに目もくれなかった。

ユーノとアルフの決死の拘束と妨害をもつてしても竜巻の動きを全て止めるのは叶わないのか、なのはと純一に攻撃用の雷撃が襲うがキレが無く、二人は軽やかに避けていく。

それぞれ違う位置に着くと、自分たちが出せる最高の技の準備をする。

「デイベインバスター・フルパワー。行けるね？」

「All light・My master」

レイジングハートは先端の下部に桜色の魔力による大きな翼を広げた。そのすぐ後に彼女一人が立つ桜色の足場、魔法陣を広げていく。最初は半径がなのはの身長ほどだった魔法陣が広ぎきるとそこは足場というより舞台とも言えた。

なのははその舞台の上でレイジングハートの翼の周り、持ち手、最後尾にも環型魔法陣を展開して砲撃の威力を限界まで溜めていく。

フェイトもなのはと同規模の金色の魔法陣を敷き、X
エックス

状の翼を先端のすぐ下から広げる。槍状のバルディッシュを天高く掲げて魔力を集中し、魔法の威力を高めていく。

純一はなのはやフェイトと比べると小さいが、踏みしめるには十分な青い魔力陣。その上で腰を深く落とし、右足をやや引いて左手は体より前に。右腕は体より後ろに下げて肘を“くの字”に曲げる。刺突
しとつ

の体勢。それは御神流の奥義の中で最長の射程で最速の奥義。彼の憧れの女性が最も得意とする、今の純一では使えない技。しかし魔法によるサポートでこの時は使えたのであった。

「セーのっ!!」

「見様見真似……」

「サンダー……!!」

「デイベイーンツ!!」

「射抜^{いぬき}!!」

「レイジッ!!」

「バスターーンツ!!」

青い閃光が一瞬で竜巻の間を翔けたあとに竜巻には大穴が開いて、バルディッシュが魔法陣に突きたてられると穴の開いた竜巻に電撃が降り注ぎ、天空からはメートル半はあろうか、桜色の砲撃が突き進む。

五つの魔力が激突し、大爆発を引き起こし、その余波は大気を激しく乱して辺りの磯を消滅させ、海水は蒸発し、雨を降らした。

― 同時間・次元空間内 ―

「ジュエルシード。六個全ての封印を確認しました！」

「な、なんてデタラメな……」

「あ……でもすごいわ」

アースラのブリッジでエイミィのモニターにはジュエルシードが封印された事を示し、クロノとリンディは別の大型モニターで見えていたがその事実信じられない思いを体験した。

ロストロギア六個の同時発動。それをコンビネーションも合わせた事が無い五人だけで同時封印。ユーノとアルフが拘束。純一が突進して相手を貫き、なのはとフェイトがそこに砲撃と雷撃を叩き込む。

武装局員でもAAランク以上の実力者を揃えなければ出来そうにない事をこの五人は成したのだ。

――海上――

海水の雨が降って、髪にまとわりついてる。フェイトちゃんや純一くんも同じ。そんな私たちの前に六個のジュエルシードは封印状態で海中から上ってきた。封印したのは私たちだったけどなんかまだ実感がわかない、かな……

――同じ気持ちを分け合う事。辛い気持ちも、悲しい気持ちも半分に出来る事……ああ、やっと解った。私、この子と分け合いたいんだ。

ジュエルシードが封印され、雲が晴れて太陽光が差し込んでくる。それは三人の心が晴れた事を祝福する神の贈りものにも見えた。

「友達に、なりたいんだ」

「俺は……お前と解り合いたい」

飾り気の無い純粋な気持ちを込めた言葉。それはフェイトの心に届いただろうか？

突如、大気をつんざく雷鳴。同時に三人のすぐそばに紫の縦稲妻の第一波が落ちる。

「母さん！ あ、アアアアアッ！！」

続いて第二波が落ち、正確にフェイトに当たった。体を駆ける電気にフェイトは悲鳴を上げた。

「フェイトちゃん！ あっ！？」

「フェイトオ！ くそっ！」

二人をフェイトから引き離すように雷は弾いた。純一は体勢を立て直し次に備える。

意識を失い、海に向かって落ちていくフェイト。アルフは姿を人間に変えてフェイトを抱えるとそのままジュエルシードに向かっていくが……

「なっ！？」

間に割り込んだのはストレージデバイス・S2Uを構えるクロノだ。

「邪魔……するなあぁ！！」

しかしアルフは怒りで加減が効かないのか、ゼロ距離からの魔力弾一発でクロノを海面まで吹き飛ばす。それを確認したあと再びジュエルシードに目を向けたが……

——一つも無い！？

クロノ方に視線を戻すと彼は三つのジュエルシードを持っていた。吹き飛ばされたのも、わざとなのかもしれない。

——あと三つは!?

周りを探すと自分の右下側——海面——のすぐ上で純一が残り三つのジュエルシールドを手に使っていた。二人はすかさずジュエルシールドをそれぞれのデバイスに格納する。

「ウウウウ……ウウアアアアアッ!!」

あれだけのジュエルシールドを一つも手に入れられなかった。その事実がアルフを怒らせ、アルフは魔力弾を海面に叩きつけることで水しぶきを上げて視界を奪う。

………

視界が戻り、アルフはフェイトと共に消えていた。

——次元空間内・アースラ・ブリーフィングルーム——

「全く、何を考えているんだ君たちは! 六個のジュエルシールドが確保できたものの、ほとんどギャンブルじゃないか。もし向こうに全部持っていかれたらどうするつもりだったんだ!!」

「はい……」

「ごめんなさい……」

あの後アースラに転送された俺たちを待っていたのはクロノ直々の説教だった……確かに目的の半分——ジュエルシードの回収——は果たしたがクロノが来なければ全て奪われていただけだ。それにフایتたちには逃げられている。つまり俺たちの行動は失敗だったが……

——俺の目標は達成できた

俺にとってはそれだけで十分だ。

「まあまあクロノ。こちらとしては最優先だったジュエルシードが確保できたからいいじゃない」

「まあまあクロノ。こちらとしては最優先だったジュエルシードが確保できたからいいじゃない」

純一たちの向かい。ブリーフィングルームの長机を挟んで反対側のリンディはいつまでも説教をしそうなクロノに割って入った。

「それに、事件の大元が解ったのよね？ そっちの話しから始めましょう」

「……はい。エイミィ、モニターに」

『はいはい』

スピーカーから入るエイミィの声。その後、長机の中央に球形のホログラフィが映しだされ、その中には一人の女性が写っている。

「あら？」

「はい。大魔導師、プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトは恐らく……」

——娘、か……しかしプレシア・テストロッサ。どこかで聞いたよ
うな……

それは二週間ほど前に見た夢の中で出てきた名前。だがそれだけ前に見た夢を覚えているはずもなく、純一には聞き覚えがあるだけだった。

「そういえばフェイトちゃん。あの時「母さん」って」

こちらはつい先ほどのこと。次元跳躍魔法による攻撃の前触れにフェイトは確かにそう言っていた。

「親子、ね……」

「驚いてるって言うより、なんだか……怖がっているみたいでした」

——実の親が怖い？

実の親の事を知っている純一だが、その記憶は一部しか戻ってき

ていない。だが瞼を閉じれば浮かんでくるあの笑顔は親が子に向ける愛情そのもの。

だがなのは言った事はそれらとまるで逆。純一には一つの言葉が浮かんだ。

虐待

——早計か？ 怒った親が怖いのは誰だって同じだ。だけど実の娘にあんな攻撃するか？

少ない情報では憶測の域を超えられなかったが、純一は一つの結論を出す。

——そう、解り合えば……話し合えばいいんだ。アイツの言葉を聞いて、解り合えば……

それがどんなに難しい事かは解ってない純一だが、今の彼はそれに囚われているというか、妄信的にそれを行おうとしていたのだった。

「——プレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した後だすぐには動けないでしょうね」

リンディの声にハツとした純一は思考をブリーフィングに戻す。

「なのはさんと純一君の一時帰宅を許可します。ご家族やお友達にも会いたいでしょ」

——そういえば、ケータイどうなったんだっけ？

アリサとすずかに頼んでいた物の事を思い出した純一だった。

―夕方・高町家―

「と、そんな感じの十日間ほどだったんですよ」

「あら。そうだったんですかあ」

なのは家に事情を説明するため、リンディが挨拶と近況の説明をするために同行したのだがこれまでに話した内容は真実に色を付けた事実だった。

《（リンディさん。見事な誤魔化しというか、真っ赤なウソというか……）》

リンディの隣に座るなのは、純一でさえもリンディの説明には寿命が縮まる思いだったが高町家のボス、桃子は気がついていないのかフリをしてるのか、とにかく全く触れてこなかった。

《（す、すごいね……）》

久々にフェレットになったユーノは美由希の膝の上でトグロを巻いて寝たフリをしている。しかし内心は逆だろう。

《（ご家族にご心配をおかけしない気遣いと言ってください）》

リンディと桃子の会話を見ていた純一は別の方向で驚いていた。

——リンディさん、砂糖てんこ盛りでなくてもお茶飲めるんだ

「でも、なのはさんも純一君も優秀なお子さんですし……もうホントにうちの子にも見習わせたいくらいで」

「あらあらまたまたそんなあ」

「うちのクロノはどうも愛想がありませんで」

父親を置いてきばりにして話しに花を咲かせていく母二人。内容は近況報告から家の話しになっていく。美由希と恭也はなのはと純一に話を振る。

「二人とも今日明日くらいまでは家にいるんだよね？」

「うん」

「はい」

「アリサちゃんもすすかちゃんも会いたがってたぞ。なのはは明日は学校だろ、純一も帰る頃に迎えに行つて会つてきたらどうだ？」

「そうですね……そうします」

彼としてはケータイも気になっているのでその辺りを聞きたいし

久しぶりに話したかった。

――聖祥小学校・放課後――

――これは、中々キツイな……

いくら放課後に三人とケータイを引き取りに行くとはいえ私服姿の子供が校門前には目立つ。下校する生徒がチラチラとこつちを見ている。これが大人だったら不審者扱いは当然なのが今の世の中だ。

「あ、純一くんだ！」

耳に入っただのは聞き慣れた声。その方に目を向けるといつもの三人がいた。

「御神くん、こんにちは」

「ああ、久しぶりだな。すずか」

――かれこれ……二週間か？ 相変わらずだ

「まさかアンタがここで待ってるとは思わなかったわよ」

「どういう事だ？」

「先にショッピングに行ってると思ったのよ。地図はあったでしょ」

「久しぶりに会って話したくてな。かつたりいがここまで来た」

「アンタにしては殊勝な心がけね」

「うっせ」

こいつとのやりとりも随分久しぶりに思えるな。だけどやはり、悪くない。

ショッピングセンターの一ブース。そこには携帯会社の高価ながら最新機種から低価だが古い機種まで様々な機種がある。

「御神純一様のケータイですね。承っております」

店員はそう言ったあと、商品棚に置いてある黒いケータイと四角い袋を渡す。受け取りのサインや代金支払いは桃子が先に行っていたため後はこれを受け取るだけだった。

三人は近くのベンチに座り、それぞれ純一のケータイと説明書を見ていく。

「ちょっと大きめだけど見た目の割りに軽いね」

「最新機種だからね。キーも押しやすいし起動も早いわ。なのは、アタシ達のケータイとどこが違うの？」

「うーん、やっぱりおサイフケータイの所かな？ でもカメラの画素数はあまり変わらないかも」

「でもカメラって中々使わないから大丈夫よ」

三人は純一のケータイであれこれと話していく……持ち主が一度も触れてないケータイ片手に。

「そういえば御神くん、なんか変わったね」

「そうか？」

「うん。前はちょっと怖い感じがあつたけど今は優しく見える」

「さすががそう言うならそうなんだろ」

まだ二、三度しか会っていないのに長い間付き合ってきたかのよう
に言うすずか。何気ない会話なのにアリサの表情からは不機嫌の色
が汲み取れる。

「純一、何ボサツとしてんのよ！ 今日みんなで新作のゲームを
やるんだからさっさと来る！」

純一の腕を掴み、早足で引つ張っていくアリサ。純一も予期せぬ

アリサの行動に目をパチクリさせたが——新作のゲームを楽しみたいなら仕方ない——そう考え、腕を引っ張られたまま歩いていく。

後ろにいる彼は知らないが、アリサの顔は少し赤くなっていた。

鯨島の運転する車内でアリサが「最近大型犬を拾ったの。毛並みがオレンジで額に宝石みたいなのがある珍しい種類なんだけど」と言った時には二人とも驚いた。それはフェイトの使い魔、アルフの見た目そのものだからだろう。

——しかし、この老人がサメジマ……

蝶ネクタイの燕尾服を着ている執事、鯨島。数々の逸話を持っている人物との事だがこうして見てみると迫力のようなものは無く、年齢に見合った落ち着いた上品さをかもし出す老執事だった。

そんな事を考えている内に、車はバニングス邸に着いた。

——なんなんだこの家は——！！

純一が思う事もわかる。金持ちの豪邸ということもあって家、というより屋敷に広い中庭。高い柵。それに見合ったセキュリティも

必要だが中庭の両脇、林の中には監視カメラがあり、いくつかは木々に擬態するように設置してある。おそらく監視カメラだけでなく、隠された仕掛けも同数はあるのだろう。

なのはとずかはそのようなことは気にしてないと言わんばかりに歩いていく。しばらくすると屋敷の脇に大きな箱型のハウスがあり、中には包帯を所々巻かれたオレンジ色の大型犬、やはりアルフがいた。

「これがその大型犬か？」

「うん、昨日たまたま見かけてさ。怪我は大したことないんだけどなーんか元気ないのよね……」

《（アルフさん！）》

《（どうしてここにいる？）》

《（あんた達が……）》

アルフはそっぽを向き、うな垂れてしまう。

「あらら、おーいどうしたー？」

アリサに抱きかかえられていたユーノは飛び降りてハウスの檻の前で止まった。

「ユーノ、危ないわよ」

「ユーノくんなら大丈夫だよ」

《（彼女とは僕が話しをするよ。二人はアリサちゃんたちと……）》

《（うん）》

《（わかった）》

「それじゃお茶にしない？　おいしいお茶菓子があるの」

「うん」

四人はハウスから離れて邸内に入っていく。鮫島は邸内でそのお茶菓子とお茶を準備してるのだろ。四人が十分離れたところでユノは念話を始める。

《（一体どうしたの？　君たちの間で一体なにが？）》

《（あんたがここにいてるって事は管理局の連中も見てるんだろ。うね）》

《（うん）》

《（時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ。正直に話してくれれば悪いようにはしない）》

《（話すよ全部。でも約束して、フェイトを助けるって！　あの子は何も悪くないんだよ）》

《（約束する。エイミィ、記録を）》

《（してるよ）》

《（フェイトの母親、プレシア・テストロッサが全ての始まりなんだ……）》

邸内では四人が新作のホラーアクションアドベンチャーゲームをやっていた。そのストーリーは一人の教授が開発した新種のウィルスが事故により外に漏れ、ウィルスに感染した感染者は未感染者を襲い、キャリアを次々に増やしていき、街はゴーストタウンとなった。

そんな絶望的な状況の中で四人の主人公はそれぞれが街からの脱出を目指し、最初は独自の行動をしていたが危機的状況から絆を深め、仲間として認めあっていく。というストーリーらしい。

余談だがゲーム内の主人公の割合は男一人、女三人なのでプレイヤーの割り当ても決まっていた。

「この扉を開ければなのはと合流できるんだよな。どう開ければいいんだ？」

「え」とさつき小学校で拾ったC4をその扉で爆発させて開けるみたい。でもその向こうにゾンビマスターっていう中ボスがいて倒さないとなのはちゃんと合流できないみたいよ」

純一の質問にソフトに付属していた攻略本を読みながら答えるすずか。しかし小学校に兵器であるC4、プラスチック爆弾があるというのはどうということなのだろう……

《（純一、なのは、聞いたかい？）》

《（ああ）》

《（うん、全部聞いた）》

《（君たちの話しと現場の状況。それに彼女の使い魔、アルフの話
しと現状を見るにこの話しに嘘や矛盾は無いみたいだ）》

《（どうなるのかな？）》

《（プレシア・テストロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実
だけでも逮捕の理由にはお釣りが来るからね。任務をプレシアの逮
捕に変更することになる。君たちはどうする？ 高町なのは、御神
純一）》

《（私は……私は、フェイトちゃんと話したい！ アルフさんの意
思と、私の思い。それに、フェイトちゃんの悲しい顔は私もなんだ
が悲しいの……だから、助けたいの！！ 悲しいことから。それに、
友達になりたいって聞いたその返事をまだ貰ってないしね）》

《（俺は知りたい。なぜ親が子供にそんなひどい事をするのか。そ
の理由を。もし何か溝があるのなら話し合いで解決してほしい）》

《（わかった。こちらとしても君たちの協力は非常に心強い。フェ
イト・テストロッサの事は君たちに任せる。プレシア・テストロッ
サとフェイト・テストロッサの間に何があるか解らないけど両者に
話し合う機会があれば純一、キミにも聞いてもらうよ。それでいい
か？）》

《（うん……なのはと、純一、だったね。頼めた義理じゃないけどお願い、フェイトを助けて。あの子、今本当に一人ぼっちなんだよ）》

《（うん、大丈夫。任せて！）》

―海鳴・臨海公園―

高町家を出てすぐアルフと合流した四人はここに来ていた。そこにフェイトが来る気がしたから。

「ここなら良いよね。出てきて、フェイトちゃん」

「Scythe form」

四人の後ろ、街頭の上にフェイトは転移してきた。彼女の愛機バルディッシュは既に魔力鎌を展開しており戦う準備は整っている。

「フェイト、もう止めよう。あんな女の言う事、もう聞いちゃダメだよ！ フェイト、このままじゃ不幸になるばかりじゃないか。だからフェイト！」

アルフの呼びかけにフェイトは首を横に振る。しかしその表情は

やはり悲しげだ。

「だけど、それでも私は……あの人の娘だから」

フェイトの静かな、悲しげな言葉になのはと純一は静かにデバイスを起動。バリアジャケットを身に纏う。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃもつとない。きっかけは、きつとジュエルシード。だから賭けよう。私達が持つてる、全部のジュエルシードを」

「Put out」

なのはは十二個のジュエルシードを

「Put out」

フェイトは三個のジュエルシードを

「Put out」

純一は六個のジュエルシードを

「それからだよ。全部、それから。私たちの全ては、まだ始まってもない。だから、本当の自分を始めるために……始めよう、最初で最後の本気の勝負！！」

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO　〈前編〉―（後書き）

空に星光と雷光が舞う

それを見届けるは法の番人と地上に降りた天上の剣士

しかし妄信者の言葉に光りを失った雷光

天上の剣士、新たに輝いた雷光と共に庭園を進む

星光の天使、金色の雷光、天上の剣士が妄信者と向き合う

天上の剣士、妄信者の言葉に戸惑う

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO　〈中編〉―（前書き）

桜色の星光と金色の雷光の戦いを見守る地上に降りた天上の剣士

空から星を砕く桜の光りが雷光を飲み込み、天から妄信の紫雷が雷光を撃つ

世界を滅ぼす種が妄信者に渡る

―海鳴・海上―

サイスフォームになったバルディッシュの攻撃をなのははデバイスフォームのレイジングハートで何度も防いでいる。

「くっ！」

初めて出会った時のように接近戦では決められない。そう判断したフェイトはバルディッシュのヘッドを九十度たたみ、デバイスモードにしてフォトンランサーを展開していく。

対するなのも思考を接近戦から射撃戦に切り替えて目を閉じ、レイジングハートを祈るように空に掲げて魔法を展開する。

「Divine Shooter」

「ファイア！」

「シューット！」

四つのフォトンランサーは緩やかにカーブしているが、ほとんど真っ直ぐなのはに。

レイジングハートのコア、赤い宝石から生み出された四つの魔デイヴァインシューターは急激なカーブとそれぞれが不規則な軌道を描きながらフェイトに。

なのはは四つのフォトンランサーを最小限の動きで避けて。

フェイトは避けきれず、環型の防御魔法で四つのディヴァインシューターを無力化するが爆煙によって一瞬視界が奪われる。だが視界が空けたフェイトは驚愕した。

「シューット！」

「Scythe Form」

今度は五つのディヴァインシューターを撃ってきたのは。防御魔法では防ぎきれないと判断したフェイトは再びバルディッシュのヘッドを九十度起こし、斧から鎌に変えて不規則に襲ってくる魔力弾を避けるか一発に一撃で霧散していき、突破したフェイトは刃を振り下ろすが……

「Round Shield」

なのはのもう一つの防御魔法、プロテクションを『弾き飛ばす盾』とするならこちらは『受け止める盾』

『受け止める盾』は鎌と拮抗するがなのはは先ほど斬られなかった一発の魔力弾をフェイトの背後から向かわせる。

その攻撃を予想していたフェイトもラウンドシールドで防いだが攻撃の手を止めて防御を行ったため、なのはの姿を見失ってしまう。

「Flash Move」

「せー！ーえいっ！！」

頭上から聞こえたデバイスの電子音声となのはの声。目を向けた頃には回避はおろか、防御魔法も展開できない距離とスピード。今まで射撃や砲撃しか攻撃のなかったなのはが自ら接近戦を仕掛けてくるとは思わなかったため、フェイトはバルディッシュでその攻撃を受け止めた。

二人の魔力がぶつかり、まばゆい閃光が視界を覆うがバリアジャケットの保護機能で眩しいとは感じなかった。

なのはは其中で純一の言っていた事を思い出していく。

「フェイトちゃんの弱点？」

「ああ。なのはの射砲撃や俺の接近戦にもそれぞれ適した対応をしてオールラウンダーに思えるが攻撃と防御の方法はほとんど一定している」

純一が説明したのはまず攻撃から。射撃魔法のフォトンランサーや接近戦でのサイスフォームから繰り出される斬撃。これらを見ればフェイトの隙が無いのでは？と思うが……

「フェイトにとって射撃や砲撃は『斬撃の補助』か『斬撃が通用しにくい相手への対応法』になってる」

純一と初めて戦った時は最後は斬撃で決めていた。別に無理に付き合わず、常に一定の距離を置いて攻撃すればいいのになぜか？

彼女の得手不得手が傾向か。それは解らないが彼女の決め手は高い確立で接近戦で行っている。

では斬撃が効き難い。あるいは届かない時はどうするか？

その答えも木を取り込んだジュエルシールド戦に出ている。彼女は最初、魔力刃をブーメランのように飛ばしたが相手に届かず、砲撃を行った。

攻撃の基本は接近戦で接近戦が難しければ射撃に切り替える。

純一はそれらの事実から一つの結論を出した。

『フェイトの攻撃は丁寧だが教科書の内容をそのままにやっているだけ。意外性が無い』

次に防御だがフェイトはあまり防御魔法を使っていなかった。単に魔力を節約するためかもしれないが攻撃の主体が接近戦である以上防御力の必要性も熟知しているはずだ。だが彼女は防御よりも回避を念頭に置いている。

『足を止めて防御』よりも『動きながら回避』の方が確かに得意の接近戦に持ち込みやすい。だがこの場合裏づけが予想される。それは『防御よりも回避を優先するため、防御力は低い』ということ。

ではフェイトへの対応策はどうするか？ まず接近戦に持ち込ませないための基本は『相手と距離を空ける』だがこう考えると多くの人は自分から離れていくだろう。しかしフェイトの機動力はなのはより上。つまり自分から離れることは不可能。

この時点で詰んだ。と、決めるのは早計だ。方法はもう一つある。

『フェイト自らが距離を空けていく』ということ。難題だがそれを成せばなのは勝率は跳ね上がる。

そしてその行動をとらせるのに必要なことはフェイトに「接近戦は困難」と、認識させること。なのはの場合でそれをやるには『近接戦闘で弾幕を張ること』

接近ではなく近接。少し離れた距離を保つこと。その状況が続けばいずれフェイトは自分で距離を開けてしまう。距離が開けばなのは得意レンジだ。決め手の砲撃も撃てる。

純一が行った説明会が終了するころにはなのはは目をグルグルと回し「ふにやああ……」と、鳴いていた。

フェイトは視界が閃光に包まれたままでもなのはの位置を把握し、縦一閃に振り下ろすが胸部の赤いリボンを少し斬っただけでダメージにはなってなかった。

後ろを向いて飛んでいたなのははフェイトの攻撃を避けたあと、体の向きを進行方向に戻すがその先にはフェイトの仕掛けたトラップ——四発のフォトンランサー——が待ち構えていた。

「Fire」

次々に襲ってくるフォトンランサー。なのははラウンドシールドを展開するがランサーというより砲弾シエル

に思えるほどの衝撃は弾くのがやっとだった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」「はあ、はあ、はあ、はあ……」

両者、デバイスを基本形態に戻して息を整える。

——最初に会った頃は、魔力が高いただけの素人だったのに今は違う。速くて強い……迷ってたら、やられる！

この戦いに勝てば彼女と彼が持つジュエルシードが得られる。そうすれば全てのジュエルシードを持って母さんのところに帰ってあの優しい頃の母さんに戻ってくれる。

フェイトは足元に巨大な魔法陣を展開し、魔力を練り上げる。それと同時になのはの周りに魔法陣を展開しては消え、展開しては消え……なのははその奇怪な現象に警戒してばかりでフェイトの方に意識を向けてなかった。

「Phalanx Shift」

フェイトの周りにフォトンランサーを発射するためにいくつものフォトンスフィアが形成されていく。なのはは阻止しようとレイジングハートを構えたが――

「あっ!?!」

四肢をライトニングバインドで大の字に拘束されて身動きが取れない。

《（マズイ！ フェイト本気だ！）》

《（なのは、今サポートを！！）》

純一もデバイスを起動しようとする。

「ダメー……！！」

《（アルフさんもユーノくんも、純一くんも手を出さないで。全力全開の一騎打ちだから！ 私とフェイトちゃんの勝負だから！）》

《（でも、フェイトのそれは本当にマズインだよ！）》

「平気！」

純一はデバイスの起動を中断し、再び傍観する。なのはに自分のジューエルシードを預けている以上、彼も加わる権利はあるが踏みとどまっている。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

詠唱が終わると同時に空に雷が響く。その後、フェイトはバルデッシュを持っていない右手を空に掲げて告げる。

「フォトンランサー・フアランクスシフト。撃ち砕け、ファイア！」

右手を標的

なのは

に向かって振り下ろす。全てのフォトンスフィアから雷の弾丸が絶えることなくなのはに撃ちこまれ、爆煙を広げていった。

「ハアッ、ハアッ……」

一度に魔力を使いすぎた所為か、肩で息をしながらもフェイトはいくものフォトンスフィアを一つに収束する。おそらく止めの一撃なのだろう。

煙が晴れ、向こう側が見えてくる。安否が気になっていた三人は驚愕した。

「撃ち終わっちゃうと、バインドってのも解けちゃうんだね」

その白いバリアジャケットは所々が焦げていたり破れていたりしたもの、本人と愛機は全くの無傷で

「今度はこっちの……」

「Divine」

「番だよ！」

「Buster」

音叉状の先端をフェイトに向けるとその先端で桜色のスフィアが構成、魔力の増大・加速を行う環型魔法陣がレイジングハートとスフィアを中心に回り続け、スフィアから直径一メートルはあろう魔力が迫ってくる。フェイトは収束したスフィアをそれに向かって投げがその魔力はスフィアを障害とも思わず、呑み込んでなおフェイトに向かってくる。フェイトはすぐにラウンドシールドを展開し、防御の構えを整える。

ズドンッ！

一人の人間が放ったエネルギーとは思えないほど重量感のある音が響いても魔力は相手も呑み込もうと、勢いが減る事なくラウンドシールドに圧力をかける。

——直撃！ でも耐え切れる。あの子だって、耐えたんだから！

防御の上からでもフェイトの魔力を削るその砲撃はバリアジャケツトの一部を裂き、魔力が少なくなっていたフェイトのスタミナも奪って消えた。

フェイトは天空から降り注ぐ桜色の光りに気づき、見上げる。そこには先ほどの砲撃の反動など微塵も無い。と、言わんばかりに堂々とそびえるのは。愛機、レイジングハートはその先端に太陽と見間違うほど輝いている。

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！」

「Starlight Breaker」

「あ、バインド!?」

なのはのだけでなく、周囲に散っていた魔力すら一点に集めていく。フェイトは動こうとするが何時の間にかかけられていたバインドで身動きが取れない。

「これが私の全力全開！ スターライトブレイカー——!!」

レイジングハートをフェイトに向かって振り下ろすと先ほどのデ
イバインバスターとは比べものにならないほどの規模の光線がフェ
イトを呑み込みながらもその下の海をも水と酸素と塩に分解してい
った。

レイジングハートは機体内に溜まった熱を蒸気として外に排出す
る。なのも続けざまに砲撃を撃ったため、肩で息をしており疲労
は限界まできているようだ。

「あ……フェイトちゃん！」

眼下では意識を失ったフェイトが海に落下していった。それを確
認したなのは海に飛び込もうとするが。

《（フェイトは俺が救助する。お前はユーノたちと合流しろ）》

念話が入り、純一に目をやる。目の前にはバリジャケットを展
開して海に飛び込んでいった純一。なのはそれを見届けた。

——全く、アイツは無茶しようとしやがって。あれだけの魔力を使
ったんだ、少しは休め。さて、フェイトは……

飛行魔法で海の中を『泳ぐ』と言うより『飛んでいる』俺。すると海中でチカチカと光る金色の光りを見つけてそこに向かって飛ぶと……いた！ フェイトとバルディッシュ。俺はフェイトを抱え、バルディッシュを掴むと海面に向かって上昇する。

「Thank you」

「気にするな。俺は自分がやりたい事をやっているだけだ。礼を言われるほど大層なことじゃない」

「Please still say it thank you.
Up to the part of a master and me」

「かったりいやつだな」

——それほど深く潜ってないからこのまま海上に出ても問題ないな。

そして俺たちは太陽の下に出た。

「ん、うつん……」

「お、気がついたか？」

目を覚ました私の目の前にいるのは白い女の子とよく一緒にいる青い男の子。でもどうして？

「あ……」

視線を下げてようやく理解した。私は彼に抱きかかえられていたんだ。バルディッシュと一緒に。

「フェイトちゃん、大丈夫！？」

向かい側から飛んでくる白い女の子。私と同じようにバリアジャケットがボロボロだけどそんなにダメージが無いみたい。悔しいな

……

フェイトはそこで気づく。自分と同じようにボロボロのバリアジャケット。しかしなのはのは厚いジャケットのため切れ目が入っていても肌までは見えていない。しかし自分は……

カアッ！ そんな擬音が似合うほどフェイトの顔は一瞬で真っ赤になり、自分の体をマントで覆う。マントもボロボロだが覆わないよりマシだった。

「飛べるか？」

フェイトの羞恥に気がつく素振りもない純一の質問にフェイトは小さく首を縦に動かすだけだった。

「そっか。離すぞ」

純一から離れ、バルディッシュを受け取るフェイト。バルディッ

シュはすぐにジュエルシードを出す。

「Put Out」

《（よし、二人ともジュエルシードを回収して。それから彼女を――《（いや、来た！）》――なに！？）》

念話で伝えられるクロノからの指示の途中に割り込んできたエイミイの声。主語が無くても純一となのはは解っていた。

その通信の直後、空に雷鳴が響き、紫の雷が現れる。自然現象ではなくプレシア・テストロツサの次元を越えて撃たれた魔法。それはなのはや純一には落ちず、フェイトに直撃した。

「フェイトちゃん!?」

「ん、んんっ!」

なのはとの戦いでダメージが蓄積していたのか、バルディッシュも金色のコア以外が碎けて待機状態になる。

フェイトが持っていた三個のジュエルシードはプレシアに操られて彼女の元に転送される。

――あれが親のすることかよ!

予想だにしない光景を目の当たりにして純一は憤慨していた。『親は子供に優しい』そう思っている彼にとってプレシアの行動は虐

待にしか思えないからだ。

―時の庭園―

広大な次元空間にあるそれは今までアースラの機器をもってしても座標を割り出せなかったがプレシアが先ほど行った物質転送により座標を掴み、次々と武装局員が送り込まれていく。

それをアースラのブリッジにある大型モニターで見ていたスタッフやなのは達。なのはの隣にはバリアジャケットを解除し、検査服を着せられたフェイトがいる。魔力の使用を封印する手錠をかけた手でコアにヒビの入った愛機、バルディッシュを弱々しく握る。

《（母親を逮捕するシーンを見せるのはしのびないわ。なのはさん、純一君、彼女を別室に）》

《（あ、はい）》

「フェイトちゃん、私の部屋に行こー」

なのはの申し出を無言で断るようにフェイトは一步前に出る。モニターには多数の武装局員がプレシアがいる玉座の間に突入していた。玉座というほど煌びやかなわけでもなく、アンティーク骨董があるわけでも無いが座を占めているプレシアは手すりに肩肘をつけ、その手は頬

に添えられており、その表情は不気味なまでの余裕があった。

——こいつが、プレシア・テストロッサ。フェイトの母親……

桃子やリンディと同年代の——一児の母親とは思えないほど若い——女性に純一はモニター越しに睨みつける。

『プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反、並びに管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します』

『武装を解除して、こちらへ』

通告後、何名かの局員はプレシアの後ろ、別室へと通じる路に向かう。

誰も気づかなかったが、プレシアはその局員に向かって殺気と狂気を孕んだ目で見ていた。

『おい、こっちに何かあるぞ！』

『待て、今開ける』

『こ、これはっ！』

自動扉を開けるとそこは変わった通路だった。というのの中は薄暗く、柱や壁には蔦が巻きつき、まるで別の空間に入ったような錯覚に陥る。その薄暗い通路の先、行く手を阻むように置いてある円柱状のカプセル。

「えっ！？」

「どういつことだ……」

青碧に光る培養液。その中には裸身の少女が膝を抱きかかえるように目を瞑っていた。

少女の金色の長い髪は水の中で広がるように浮かんでおり、その少女に三人——なのは、フェイト、純——は目を大きく開き、驚いていた。

「あああ……」

「フェイト……」

その少女は、目を瞑っていてもフェイト・テストロッサに瓜二つだった。

『私のアリシアに、近寄らないで！』

『う、撃てえええー！！』

五人の局員が純一と同じデバイスをプレシアに向けて砲撃、というにはあまりにも細かい射撃魔法を撃ち続けるが不可視の壁のような防御魔法。それを貫くことはできなかった。

『うるさいわ……』

「危ない、防いで！」

プレシアの前に渦巻く紫の魔力。その量から強力な魔法と判断し

たリンディは指示を出すだがそれを行動に移すより早く、局員に襲い掛かった。

『うわああああああ！！』

『ふふふふ、ふふふははハハフフフ……』

『いけない、局員達の送還を！』

『りよ、了解です』

リンディから指示を受けたエイミィは緊急転送を行うため、コンソールを操作する。

「アリ、シア……」

『座標固定0120503』

『固定！ 転送オペレーションスタンバイ！』

転送のためにエイミィをはじめ、ブリッジクルーは目にも止まらない速さでタイピングを行っていく。

『もう駄目ね。たった三個のロストログアではアルハザードに辿り着けるかどうかは解らないけど……』

プレシアがアリシアと呼んだフェイトにそっくりな少女が入ったカプセルにしがみつकिながら、ゆっくりと顔を後ろに向ける。フェイト達がそこから見ているのを知っているように目的を告げた。

『でももういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間もこの子の身代わりの“人形”を娘扱いするのも。聞いていて？あなたの事よフェイト。折角アリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない私のお人形』

『最初の事故のときにね、プレシアは実の娘、アリシアを亡くしているの。彼女が研究していたのは使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成。そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時彼女の研究に付けられた開発コードなの』

『よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど駄目ね、ちつとも上手くいかなかった。造りモノの命は所詮造りモノ。失ったものの代わりにはならないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々ワガママも言ったけど私の言う事をとてよく聞いてくれた。』

「やめて……」

『アリシアは、いつでも私に優しくかった』

言いながらカプセル——アリシアの左頬の位置——を撫でるプレシア。狂気に染まっている彼女の手の動きはその狂気とは真逆な母親の撫で方だった。

『フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった』

「やめて、やめてよ」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形。だ

からあなたはもういらないわ。どこへなりと消えなさい！」

「おねがい、もう止めて！」

あまりにも辛い言葉と事実。それにフェイトはショックを受け、目尻には涙が溜まっていく。

『フッフ、いい事を教えてあげるわフェイトオ……あなたを作り出してから私はずうつとねえ、私はあなたが……大嫌いだったのよ！』

親から無遠慮に告げられた拒絶の言葉。握られていたバルディッシュが手から落ち、コアが粉々になった。それはフェイトの心を表しているかのような碎け方だった。顔色からは生気が抜け、目も虚ろでその場に膝を着くフェイト。それをなのはと純一は支える。

『た、大変大変！ ちょっと見てください！ 屋敷内に魔力反応多数！』

『なんだ、あれは。なにが起こってる！？』

時の庭園の各所では床を砕くことなく、中世の騎士を模したロボットが現れる。武器もポールアックスや三つ又の矛を装備している。

そのロボットの登場に合わせて時の庭園は震動を始めて内部が徐々に崩壊していく。プレシアはアリシアが入っているカプセルを繋いでいた鳶や固定台を外していく。

『私達の旅を、邪魔されたくないのよ』

プレシアはカプセルと共に玉座の間に戻り、三個のジュエルシー

ドを

『私達は旅立つの。忘れられた都、アルハザードへ!』

『まさか!』

『この力を使って、取り戻すのよ。全てを!』

「違う……」

不意になのは何かを呟いた純一の方を見る。しかしプレシアを
厳しく睨むその目になのは恐怖を感じて目を逸らしてしまう。

モニターの向こうではプレシアが狂気に染まった顔と声で笑って
いた。

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO　〈中編〉―（後書き）

心碎けた雷光

主がいる庭園へ飛び込む星光と黒き法

待ち構えるは傀儡の騎士

剣士は雷光に告白する

「俺は罪人だ」

雷光は弱々しくも立ち上がり、剣士と共に妄信する母の元に向かう

うーん、予定通りとはいえ書いてて思った。ヒロイン枠に入って無いのに何このフェイトフラグ！？

そして原作見て思ったよ。一般局員（モブ・s）・・・不憫すぎる。唯一の射撃はなのはと比べたら細いし映ったやつの半分くらい目の下のクマがすごかった！

きつと彼らは管理局に不眠不休でこき使われる可哀想な人たちなんだね！

でも同情はしないよ！

第17話―星光と雷光と剣士のTRIOへ後編―（前書き）

無印編が終了したら期間不明の修正に入ります。

12月頭から末まで仕事が忙しくなるので頂いた感想に即日返信ができない可能性があります。どうかご容赦のほどを。

「許せない！」という方はそこに【魔砲の杖】か【ぎゅちゃんザンバー】があるのでどうか私を消し炭にするかたたっ斬ってください（ヘッドスライディング土下座）

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO〈後編〉―

「次元震発生！ 震度……徐々に増加しています！」

「この震度で進行していくと、次元断層の予測値まであと九十分足らずです！」

「あの駆動炉も、ジュエルシードと同級のロストログニアですそれを暴走覚悟で発動させて足りない出力を補っているんです！」

「初めから、片道の予定なのね」

エイミィを初め、ブリッジスタッフから報告される内容にリンデイはプレシアの強行する意思……いや、狂気に愕然としていた。

なのは、ユーノ、純一はプレシアの言葉にトランス状態に陥ったフェイトを抱えたアルフと一緒に医務室に向かって赤色灯で染まった廊下を走っていた。途中反対側から向かってきたクロノと会い、五人は足を止める。

「クロノくん、どこへ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと」

「私も行く！」

「僕も！」

クロノの行き先が時の庭園、プレシアの元とわかったのはとユニノは自分達も行くと強く告げる。クロノは一瞬考えたが肯定する。

「アルフはフェイトについてあけて。純一は——「俺は残る」——わかった」

四人にとって純一の言葉は意外だった。以前にも六個のジュエルシードが発動した時、彼はその封印を優先するためにクロノに食ってかかった。今回は三個とはいえ、一個で次元世界一つを滅ぼせるジュエルシードが三つ。更に同級のロストロギアの駆動炉が暴走しているというのに彼は前と違う事を言っている。

——もしかして、あの時のはフェイトちゃんを助けるための口実なのかな？

少し前に純一は海の中に落ちていくフェイトを救おうと飛び込もうとした自分を制してまで救助に向かった。スターライトブレイカーを撃つ事で膨大な魔力を使用したとはいえあれは周囲の魔力も使って撃つのでフェイトを助けにいく余裕はあった。純一なりに心配して代わりに行ってくれたのかもしれないがもし、もし彼が「自分がフェイトを救いたい」と思っていてあの行動なら前回のことも今回の事も解る。解るのだが……

——なんか、イヤだな……

なのはクロノ、ユーノ共に時の庭園に向かう。

時の庭園に入る堅牢な扉の前。そこにはプレシアが召喚したアクラス魔導師と同等の力を持つ傀儡兵が待ち構えていた。外見で分けるなら中世の騎士・体の後ろ半分が魚になった足のないシーワイバーン・他より一回り大きい、扉の前に立ちふさがる重戦士の門番。

騎士達は剣と盾を持つ者と自身の倍の長さの槍を持つ二種類。様々な状況に対応できそうだ。

シーワイバーンは斧の先端に刺すためのスピアーが付いたポールアックス。背中に生えた翼で唯一飛んでおり、一撃離脱の高速戦闘を仕掛けてくるのだろう。

重戦士は木を伐るために使われる両方に刃が付いた両刃斧を持っており、他には無いパワーの高さが想像できる。

「いっぱいいるね」

「まだ入り口だ。中にはもつというよ」

「クロノくん、この子達って」

「近くにいる相手を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

なのはが恐れていた事「彼らがフェイトと同じ子」である可能性をクロノは否定し、なのははレイジングハートを構える。しかしクロノはそれを制止する。

「この程度の相手に無駄弾は必要無いよ」

「え？」

「はああっ!!」

「Stinger Sniper」

クロノの愛機、S2Uから女性の音声が発せられるのと同時に三体の騎士が迫ってくるが高速の光弾に貫かれて爆散。光弾は速度を落とす事なく上で螺旋を描いた。

「は、速い!？」

「スナイプショットオ!!」

なのはが驚いている間にも光弾は騎士とシーワイバーンを貫いていき、クロノのキーワードで更に加速。重戦士の装甲を貫こうとするがその堅牢な装甲には傷一つ付かなかった。だがクロノもそれに驚くことはなく、むしろ重戦士の対処法は別にあるため、平らな頭に飛び乗り重戦士の頭に接触したS2Uが別の魔法を告げた。

「Break Impulse」

一瞬の閃光。その後に重戦士は欠片一つ残らず消え去る。

「ボーっとしてないで! 行くよ!」

「あ、うん!!」

彼が使った魔法はたったの二回。戦闘時間はたったの四十五秒。なのはとユーノなら更に増えるであろうこの数字。しかもクロノはそれを難なく成した。その事に二人は感心させられた。

扉を抜け、庭園内部の回廊に入ると四つのロストログアの影響で所々壊れており、その下では濃さの違う数種類の白がマーブルになっており、黒い斑点が発生しては収束していた。

「うわ……」

「その黒い所は気をつけて。虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる。飛行魔法もデリートする。もしも落ちたら、重力の底まで落下する！二度と上がってこれないよ！」

「き、気をつける」

回廊の先、巨大な扉を蹴破ると玉座の間……ではなく別の広間でそこには門に居たのと同型の傀儡兵が何体もいた。

「ここから二手に別れる。キミ達は最上階にある駆動炉の封印を！」

「クロノ君は？」

「プレシアの元に行く。それが僕の仕事だからね。今道を作るから、そしたら！」

「うん！」

クロノがS2Uを前に構え、魔力を集中させる。その間になのは

はユーノを掴む。

「Blaze Cannon」

一炎（Blaze）の名の通り、熱量を持った砲撃が傀儡兵を破壊していき、なのは上に通じる階段をユーノと一緒に飛んで行く。

「クロノくん！ 気をつけてね！」

―アースラ・医務室―

プレシアの拒絶の言葉により心を砕かれたフェイト。ベッドで横になるフェイトの目は変わらず虚ろだった。それを気持ちが悪く感じ取れないほど無表情な純一はモニターの反対側からずっと見つめていた。

「あの子達が心配だから、アタシも……ちょっと手伝ってくるね」

庭園内を映し出していたモニターから目を離し、フェイトの頬に優しく手を添えるアルフ。

「全部終わって戻ってくるよ。そしたらアタシの大好きな、ホントのフェイトに戻ってねこれからはフェイトの時間は全部、フェイトの自由に使っていいんだから」

添えていた手を離し、歩み始めるアルフ。足を止めてフェイトの方を見るが変化はなく、そのまま出て行く。

アルフが出た直後、フェイトの目は輝きを取り戻してモニターを見る。

「母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった」

「そうか」

「私が生きていたと思ったのは、母さんに認めてほしかったから」

「そうか」

「どんなに足りないと言われても、どんなにひどい事をされても……
……だけど、笑ってほしかった」

「そうか」

「あんなにはつきりと捨てられた今でも、私……まだ母さんに縋り
ついている」

モニターにはなのはと合流したアルフが映っていた。

「アルフ。ずっとそばに居てくれたアルフ。言う事を聞かない私に
きつと随分と悲しんで」

アルフはなのはと何か話していて、なのはは——理由はわからない
いが——嬉しそうだ。

「何度もぶつかつた、真つ白な服の女の子。初めて私と対等に、まっすぐ向き合ってくれたあの子。何度も出会って戦って、何度も……私の名前を呼んでくれた。何度も、何度も……」

「アルフの言葉は飾り気も何も無い本心の言葉なんだろう。なのほも、お前と話したかっただけだ」

「生きていたいのほ、母さんに認めてもらいたいからだ！ それ以外に、生きる意味なんてないと思っていた。それが出来なきゃ、生きていけないんだと思っていた」

記憶に浮かぶのは一つの言葉。

「捨てればいいってわけじゃない。逃げればいいってわけじゃない……もつとない」

「俺は……罪人だ」
つみびと

その言葉に初めてフェイトは純一を見る。

「俺の犯した罪は、一生をかけても償えないかもしれない。赦してもらえないかもしれない。償い方もわからない。赦してもらう方法も思いつかない。自分にどれほどの人たちが救えるのかわからないでも今、目の前にある。手を伸ばせる所にある人を守ることはできる。お前が望むなら俺はお前の手を引っぱってどこにでも連れてってやる。立ち塞がる敵がいるなら、壁があるなら、この剣と御神の剣技で薙ぎ払って、切り崩す」

握られた右の拳はフェイトに向けられ、右から左に伸びた魔力刃。

騎士が主に剣を捧げるように思える光景。

ベッドから起き上がり、純一と向かい合うフェイト。差し出された左手にはヒビが入った待機状態のバルディッシュがあり、壊れものを扱うような丁寧に、両手で受け取る。

「私の……私達の全ては、まだ始まってもない」

バルディッシュを起動し、基本形態の斧にしようとするがヘッドはやや起きた状態で黒光りする斧だけでなく、中央のコアまでヒビというより亀裂が走っており、今にも粉々になりそうだ。フェイトはそんな状態の自分の寡黙な愛機を見て痛みが伝わってきたのか、目尻に涙が溜まる。

「そうなのかな、バルディッシュ？ 私、まだ始まってもいなかったのかな？」

「Get set」

「ギィ」と、ヒンジが軋む音を上げながらヘッドの位置を修正する。

「そうだよね……バルディッシュも、ずっと私の傍にいてくれたんだよね……」

カタカタと震え、金色のコアを輝かせながら寡黙な彼らしい返事を聞いたフェイトは愛機を抱きしめ、溜めていたものを流していく。

「お前も、このまま終わるなんてイヤだよな」

「Yes sir」

「上手くできるかわからないけど、一緒にやってみよう」

バルディツシュを正面に構え、魔力を集中させていくフェイト。
元いた場所から動いて横から見ている純一は穏やかな表情でそれを見守っている。

手元からバルディツシュを金色の魔力光が包み、ヒビが入り、砕けた。ボロボロだったバルディツシュの亀裂やヒビはどこにも見当たらず、新品……いや、今までの自分達を終わらせ、新しく始まるうとしている一人と一機がいた。

「Recovery」

——私達の全ては、まだ始まってもない

頭上に広がる黒いマント。それが肩にかかると同時にフェイトが着ていた検査服は黒いバリアジャケットに変わった。

「だから、本当の自分を始めるために」

足元に広がる金色の魔法陣

「今までの自分を、終わらせよう」

純一も自分の足元に青色の魔法陣を展開する。

「行くぞ、母親の所に」

「うん。君の名前は？」

「御神純一だ」

「私は、フェイト・テストロッサ」

二人は友達のいる所に行った。

――時の庭園――

吹き抜けの螺旋回廊。そこで迫り来るシーワイバーン達になのはシューティングモードのレイジングハートで正確な狙撃で撃ち落とし、アルフは孤立したものを噛み砕いていた。

「クソ！ 数が多い！」

「だけならいいんだけど！ この！」

重戦士もいて、ユーノがチェーンバインドで拘束していたが遂にそれを引き千切った。重戦士は背中を向けていたなのはに斧を振り下ろしていく。ユーノが呼びかけるがなのはが気づいた時には――

「Thunder Rage」

螺旋回廊の上、そこには槍のようになったバルディッシュを下に構えたフェイトだけがいた。

「純一！」

「ああ。見様見真似 射抜！」

雷撃の影響で拘束された重戦士を貫く青い光り。そのままなのは隣で止まり、続いてフェイトも降りてくる。

「フェイトちゃん！ 純一くん！」

見つめ合う三人。嬉しそうなのはと、照れているの顔を横——しかし視線はなのは——に向けるフェイト。解り合えたことに微笑む純一。しかし重戦士より遥に巨大な、両肩に砲を備えた砲撃型が壁を砕いて現れた。

「大型だ。バリアが強い」

「うん。それにあの背中の」

「来るぞ！」

チャージ完了が近いのか、肩の砲には光りが集束していく。

「だけど、三人でなら」

「え？ …………… うん！ うん！ うん！」

フェイトの言葉になのは嬉しそうに何度も頷く。

「いくよ！ バルディッシュ」

「Get set」

「こつちもだよ！ レイジングハート！」

「Stand by ready」

「もういつちよ行くぞ！」

「Off course」

砲型がその光りを放とうと輝かせるが――

「サンダーアー！ スマッシュアー……！！」

フェイトの砲撃に砲撃を中断。ガードを優先し、バリアを展開――

「デイベーーン！ バスターアー……！！」

受け止めきれず、爆発。余波は時の庭園全体を襲った。

「嘘！？ まだ動いてる！」

砲型は肩の砲を片方失い、片手片足を失いながらもチャージさせた魔力を三人に撃とうとするが……

「なら撃つ前にたたつ斬る！」

青い魔力光だけが流星のように軌道を描き、もう一つの砲を斬り離され、残っていた片手、片足、最後に胴を横一文字に斬り、爆発。

「見様見真似 花菱」

二人の元に帰ってきた純一が静かに技名を告げた。

「すごい……」

高速機動と斬撃に自身のあるフェイトですら目を大きく開き、声を漏らす。

「感心するのもいいが先を急ぐぞ！」

アルフとフェイト、なのはが話し合ってる事に気づかず、先行した純一は多くの傀儡兵を一人で相手にする事になってしまった。

アースラからデバイスに送信された時の庭園の見取り図によるとこの先のエレベーターが駆動炉への最短ルートであることが解った。純一は単身とは知らず、途中の回廊で傀儡兵の集団に見つかった。狭い空間ということもあり、ここにいるのは騎士タイプだけのようだ。

「なのは、援護を頼む！」

「なのは！？」

呼びかけに応えが無い事に不安になり、純一は後ろを振り向いたが誰もおらず、目の前には敵。敵は赤い目を怪しく光らせ、ターゲットを定める。純一は魔法で左手に投擲用の短刀^{ダガー}を四本構築、指の間に挟んで投げた。

あるものは関節部分に刺さり、動きを弱めた。あるものは片手に持つ盾で弾く。

後ろに逃げればなのは達と合流できるがそれはフェイトに言った自分の誓いの言葉。それから逃げるのと同じだ。例えフェイトが許してくれても自分が許さない。結論だけ言えば純一が一人でこの傀儡兵を相手にし、なのは達が来るのを待つしか無かった。

「すごく……多いです」

この困難な状況に泣きなくなった純一だった。

「純一！」

「よゝフェイト……大丈夫だったか。なのはは？」

「向こうのエレベーターで駆動炉の方に行った」

「オーライ。俺達は」

「うん。母さんの居る最深部に」

十数体は居た騎士タイプの傀儡兵を一人で全滅させた純一だが疲労で体が重く感じ、騎士タイプの残骸の上で大の字に寝ており、首だけ動かして飛んできたフェイトを見た。

——しかし改めて見ると、凄いデザインのバリアジャケットだよな……

「なに、純一？」

「い、いや、なんでもない！」

飛び起きて足早に進む純一。それをフェイトは追いかけていった。

「どうしたの？ 顔が赤いよ？」「う、うるさい、うるさい、うるさい！」

——へえ。そういう事かい

二人のやり取りを後ろで口の端を吊り上げながら見ているアルフであった。

第17話―星光と雷光と剣士のTRIO（後編）―（後書き）

こば「さて、前編から後編まで使用された御神の奥義の説明と見様見真似と書いてる事を説明していこうと思います」

純「わからない人もいるだろうから当然だな」

こば「では奥義の歩法、神速から」

・御神流 奥義之歩法 神速

通常とは桁違いの速度で動くことが出来る。

この時は周囲の動きが止まっているように見え、色彩がモノクロになる。また、自分の動きもスローモーションのように感じられる。人間は五感で周囲の状況を判断する。だが、視覚が凄まじい集中力を発揮している場合には、脳が他の感覚を遮断し、視覚にのみ全ての能力を注ぎ込む状態が起こる。その時、通常では考えられないような視覚の能力が発揮され、本来見えるはずのないスピードでも認識できるようになるらしい。（いわゆる、野球のバッターが「ボールが止まって見える」と言うのがコレ）

また、人間は死という緊急事態を察知すると、全ての感覚が視覚に集中され、見たものを通常の数十倍の速度で処理するようになる。そのため、スローモーションを見たような錯覚を抱くらしい。

色彩がモノクロになるのは、本来脳で行われるべき色の分析が、死への危機という緊急事態に直面したために、他の感覚と同じように、今必要のない情報であると脳が判断し、分析をカットしてしまうことが原因らしい。

本来、そういった通常では発揮されない感覚を、極度の集中状態にすることで強制的に発揮させるものだと思う。当然、普通はそのような感覚に身体が追いつくことはないわけだが、人間の潜在能力――いわゆる「火事場の馬鹿力」のようなもの――を発揮することで、辛うじてそれを可能にするのだろう。

身体に負担が掛かることは間違いなく、余り多用の利く技ではな

い。

この神速があるために、御神の剣士は最強と言われている。完成された御神の剣士相手では、銃火器を装備したものが100人程ど居ないと、倒せないと言われている。

純一「頭が！ A T A M A G A ! !」

こば「砕いて言うത്『単純なスピードアップによる高速移動』ではなく『極限の集中力で発揮される判断速度』とでも言うのかな」

純一「お前の偏見が満載な説明だな」

こば「続いて射抜！」

・小太刀二刀御神流 裏 奥技之参 射抜

変幻自在の高速の突きの連撃。

御神流二刀奥義の中では最長の射程で最速を誇る奥義。新撰組の沖田総司が使う三段突きと斉藤一の牙突を組み合わせたものだと思ったほうが分かりやすい。牙突並のスピードで突きを繰り出し、突いた勢いからもう一方の小太刀で相手を完全に貫く。その際に一撃目を引き戻す事でさらに突きを放つ事もでき、最大威力で放てば重い鉄板さえも貫ける。『神速』を使用すると更に早くなり、狙い撃ちまで可能。受け流すか横に避けるかしか回避方法が無いが、熟練した使い手のそれは恐ろしいほど早く、受け流しや回避より先に貫かれてしまうので回避はほぼ不可能と言っても良い。唯一、恭也の使う『極限の神速』でしか見切れない必殺の奥義。

純一「なにこれ怖い」

こば「これでも最強の奥義でないのが凄いよ」

純一「“変幻自在の高速の突き”ってどういうことだ？」

こば「突きならどういうやり方でも良いって意味だな。戦闘民族・高町の長女はアニメでは相手の腹に向かって下から上に向かって刺したあと、もう一刀で肩膝を刺して骨を砕くしその母親は右の突き

を引くと同時に左の突きを出して、左を引いて右、右を引いて左・

・このエンドレスで突いてくる」

純「刀なのに狙い撃ちができるのも恐ろしいよな」

こば「さあ、次は花菱だ」

・御神流 裏 花菱

二刀の小太刀で斬激を浴びせる技

純「オイ・・・」

こば「ん？」

純「なんでこんなに短いんだ!!」

こば「仕方ねえだろ!! 技の紹介はこの通りだし原作での表現も曖昧で!! 情報量が足りないどころか無いんだよ」

純「ふざけるな!!」

こば「やるかこのヤロウ!!」

ドカスカボコスカポンポコリン!!

杉並「ちなみに見様見真似とはMY同土朝倉・・・いや、今は御神だな。が、魔法なしの生身ではできず、魔法を補助的に使ってようやくできることからこのように表現しているそうだ。それではアデュー!!」

余談・投稿前の誤字チェック結果

・Aジユラス魔導師↓Aクラス魔導師

第18話―宿命が閉じるとき―

「……………」

三個のジュエルシードと暴走状態の駆動炉により次元震が起き、時の庭園全体が揺れていた。それはプレシアとカプセルに入ったアリシアが居る最深部も例外ではなく、辺りの床は瓦礫と虚数空間しか無かった。

しかしその揺れが突然収まった。プレシアもアルハザードに向かうために必要なジュエルシードは十四個だったが約四分の一の三個と自壊寸前で暴走させている駆動炉に一縷の望みを託し、決行したのに。なぜか沈静化していった。

《（プレシア・テストロッサ。終わりですよ、次元震は私が抑えています）》

クロノ達が入るためにくぐった門。庭園が崩壊していった影響でここにも瓦礫があったがリンディはそこで巨大な魔法陣と向こう側が見えるほど薄く透けた蝶のような羽を四枚、背中に展開している。

《（駆動炉はじき封印。貴女の元には執務官が向かっています。忘れられし都アルハザード。そこ眠る秘術は存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です！）》

《（違うわ！ アルハザードへの道は次元の狭間にある！ 時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き。道は、確かにそこにある！）》

《（随分と分の悪い賭けだわ。貴女はそこに行つて、一体何をするの？）》

駆動炉を守っていた傀儡兵は破壊し、駆動炉も封印。今の戦いで負った怪我で痛む左腕を右手で抑えながらなのはとユーノは次の目的地、最深部を目指す。なのは達にも二人の念話は届いている。

《（失つた時間と犯した過ちを取り戻すの！？）》

《（そうよ。私とアリシアの、過去と未来を！！）》

純一、フェイト、アルフの三人は別ルートを走つて最深部へ向かっている。途中、傀儡兵が何度も立ち塞がつてきたがそのほとんどは純一が破壊し、フェイトもアルフもほとんど魔力を消費していないので顔色には疲れが見えない。逆に純一は同年代と比べたら体力はあるが、未成熟な身体につく体力は成人と比べたら少ないもので更に慣れない魔法戦で消耗し、汗に髪と身体を濡らしながらもすっかりフェイト達について行く。

——純一、大丈夫かな……

時折気持ちを表情に出しながら後ろにいる純一を見るが彼は「大丈夫、気にするな」と声には出さず、表情だけで返事をする。

「取り戻すの……こんな筈じゃなかった、世界の全てを！！」

取り戻したい者が入った物を抱きしめ、悲しげに叫ぶプレシア。
もしかしたらあの事件の被害者は彼女なのかもしれない。

瓦礫の一部が爆発と共に吹き飛び、プレシアも反射的にそちらに目を向ける。

「世界はいつだって！ 『こんな筈じゃない』 事ばかりだよ！
ずっと昔っから、何時だって誰だってそうなんだ！！」

切った所から流れた血が左目に入らないよう瞑った痛々しい姿のクロノ。彼の言葉からは自分もその事を体感した、当事者の言葉に聞こえる。

別の入り口から純一、フェイト、アルフの三人も到着した。

「『こんな筈じゃない』 現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ！ だけど、自分に関係の無い人間まで巻き込んでいい権利はどこの誰にもありはしない！！」

——俺は……

自分に向けられたわけではないがクロノの言葉に純一は胸が痛くなる。

片手で口元を押さえ、咳き込むプレシア。ただの咳に聞こえなかったフェイトは母の身を案じ、近寄る。

「母さん！」

「何しに来たの？」

向けられるのは変わらない拒絶の言葉と視線。それに気圧されてフェイトは足を止めた。

「消えなさい、もうアナタに用は無いの」

容赦の無い言葉に純一は目を鋭くし、プレシアを睨みつけるが――

「貴女に言いたい事があつて来ました」

その声には怒りも恐れもなく――

「私は……私は、アリシア・テストロッサじゃありません貴女が作ったただの人形なのかもしれません」

目を瞑り、右手を握りしめ、胸に添え、左手は右手首をしっかりと握り――

「だけど私は、フェイト・テストロッサは、貴女に生み出してもらって育ててもらった貴女の娘です！」

言葉に感謝の思いを乗せて力強く、はっきりと告げるフェイト。

「フ、フフ、フフフフフ！ アハハハハハハ！ だから何？
今さらアナタを娘と思えと言っの！？」

「貴女が……それを望むなら………それを望むなら、世界中の誰からもどんな出来事からも、貴女を守る」

捉えようによっては再び敵になるという意味の言葉に傷ついた身体をおしてクロノは身構えるが純一はクロノの方を見て首を横に振る。

「私は、貴女の娘だからじゃない。貴女が、私の母さんだから！」

僅かに歩みだし、プレシアに向かって手を差し伸べるフェイト。足元には虚数空間が広がり、プレシアへの距離はまだあるが彼女がフェイトに歩み寄れば悲しい親子は本当に解り合えるだろう。

「くだらないわ」

「え！？」

返ってきたのは拒絶の言葉。予想だにしない答えにフェイトは一瞬よろけてしまい、他の三人も動きが固まったしまう。プレシアはその一瞬の隙に杖で床を一突きし、魔法陣を展開。三個のジュエルシードを再び暴走させる。次元震を抑えていたリンディでも制御ができなくなるほどの暴走。

『艦長！ 駄目です！ 庭園が崩れます。戻ってください！！ この規模の崩壊なら次元断層は起こりませんから！！ クロノ君達も脱出して。崩壊までもう時間が無いの！！』

『了解した！ フェイト・テストロッサ。御神純一！』

足元の透明な床が碎けるガラスのようにヒビが入り崩壊。虚数空間の侵食が広がるが二人は真っ直ぐプレシアを見ている。クロノが純一に何度も呼びかけるが聞いていないのか、反応はない。

「私は向かう。アルハザードへ。そして全てを取り戻す。過去も、未来も、たった一つの幸福も！」

「なぜ……なぜ一つの未来しか見ないんだアンタは！！」

今まで親子の対話を静観していた純一は感情を声に、表情に出し、プレシアにぶつけた。フェイトはその事に驚きながらも、後ろにいる純一を見る。

「アンタが取り戻そうとしている未来は『アンタの願望』だ！ なぜ『子供が望む未来』を考えない！」

フェイト、ではなく『子供』。そこにはフェイトだけでなく、亡きアリシアも含まれているのだろう。

純一はアリシア・テストロッサの事はよく解らない。知っているのはプレシアの娘である事とフェイトのクローン元……姉妹のような存在である事だけだ。だがアリシアは今はいないが、そこにいた人間。自分の夢や望んだ未来があつたはず。それを誰よりも知るのはアリシアの記憶を持つフェイトではなく母であるプレシアだ。純一にはプレシアがアリシアの望みを忘れてるようにしか思えない。

記憶を書き換えられる前の純一にも夢や望みがあつたはずだ。しかし記憶が戻つてない自分にはそれが思い出せない。その事に今気がついた純一はその事を感情と一緒にそのまま声に出す。

「以前の俺にも夢や望みがあつたはずだ。今は思い出せない……けど、今俺が望んでいるのはアンタとフェイトが解り合う事だ。アンタはフェイトを人形と呼んでいたがフェイトに少しでも、僅かでも感情が、好意があるはずだ。好意の反対は嫌悪ではなく無関心だ。でもアンタはフェイトに対して嫌いだと言った。その言葉にフェイトは傷ついた。だけどフェイトはそれをきっかけにアンタへの恐怖を乗り切つて今日『母のアンタ』に！『自分』として思いを！『望み』を伝えたんだぞ！！」

純一本人にも何を言っているのかよく解ってはいない。だがその想いは伝わった。そう信じる。

「……貴方、名前は？」

「御神、純一」

プレシアは「そう……」と返し、俯いてしまう。純一は温もりを感じて視線を落とすとフェイトが両の手で自分の右手を握っていた。「純一、それだけじゃないよ。アルフも、白い子も……純一が私に手を差し伸べて、引っ張ってくれたから今、私はここに來れたんだ」

「お笑いぐさね」

狂気を孕んだ声を発したプレシアの方を見るとプレシアは純一とフェイトを見下す。

「二つの人形が手を取り合って私に意見なんて。あの子を失ってからこんなに笑わせてくれたのはあなた達が初めてよ！！」

笑い声を発さず二人を笑うプレシア。純一が言葉を伝えている間にも崩壊は進んで行き、遂にプレシアとアリシアの下プレシアの床も崩れ、虚数空間に呑み込まれていってしまう。フェイトは母アリシアの名を叫びつつ、手を伸ばそうとするが母プレシアの目には自分の娘しか映っていないかった。

「一緒に行きましょうアリシア……今度はもう……離れないように……」

「……………」

「フェイト……」

どんな言葉をかければいいのか？ その答えが出ない純一は肩を落としているフェイトに手を差し伸べたくてもできない。

「なっ!？」

突然床が崩れ、一瞬の浮遊感を感じた純一とフェイト。落ちる。そう考えるより早く純一は御神流の装備において小太刀、短刀に続く三つ目の道具を使用する。

「うわ！ 純一、なんだこれは!？」

「いいから離すな!」

愛機S2Uに巻きついた細く、反射する糸のような物にクロノは驚くがその間に純一はフェイトを脇に抱えて右腕をクロノの方に向けたまま崩れていく床を駆けて行く。時折張られた糸から伝わる二人の重さに顔をしかめながらもクロノはS2Uを握り締める。

純一たちより先にクロノの元に着いたアルフはグローブをした右手に糸を無理矢理巻きつけてクロノの代わりに二人を牽引する。

——こんな痛み、フェイトが受けた痛みに比べたら!!

肉を削ぎ落としそうな痛みを奥歯が砕けんばかりに噛みしめて耐え、さながら一本釣りのように引き上げると純一とフェイトは放物

線を描きながらクロノとアルフの元に導かれていく。

純一は咄嗟にフェイトを抱きかかえて背中を下に向ける。受身が取れない身体に痛みに耐える覚悟を決めて目を瞑るが感じたのは衝撃を吸収するマットのような感触。目を開けた純一が見たのは落下時の救助用に使われる魔法、ホールディングネットだった。魔力光は金色。

「バルディッシュ？」

「お前か、ありがとよ……」

「Thank you」

答えたのはフェイトではなくバルディッシュ。フェイトの寡黙にして忠実な相棒だがこの時、彼は初めて自分の意思で、自分の判断で動いたのかもしれない。

崩壊していく時の庭園。アースラに戻った純一、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノの六人は思い——悲しさ、別れ、決意——を胸に友達や仲間と共にそれを見届けた。

第18話―宿命が閉じるとき―（後書き）

平穏な日々に戻る星光と剣士。

平穏な日々に入る雷光。

最後に交わすのは言葉と想い。

第19話―なまえをよんで―（前書き）

それは、平凡な小学三年生だった筈の私、高町なのはに訪れた小さな事件。

信じたのは勇気の心。手にしたのは魔法の力。

願ったのは……小さな想いが届く事。

旅立ちの始まりは、きつといつも悲しくて……だけど、想いはきつと通じ合えたから。

だから「さよなら」はきつと、「はじまり」の言葉。

第19話―なまえをよんで―

そして、色んな事がありました。私とユーノくん、純一くんとの出会いから始まって……終わってしまったえばあつと言つ間の日々……

次元震の余波が収まるまでの間、私たちは数日、アースラの中で過ごして……

あ、純一くんはコンピュータを使って熱心に何か調べてました。何を調べてるのかは聞けるような雰囲気じゃなかったけど、記憶喪失の治療法でも探してたのかな？

それから……

「今回の事件解決について大きな功績があつたものとしてここに略式ではありますがその功績を称え表彰いたします。高町なのはさん、朝倉純一くん、ユーノ・スクライアくん。ありがとう」

満場の拍手の中、代表としてなのはが表彰状をリンディから受け取る。その表情は緊張と恥ずかしさが同居しており、年相応な印象を与える。

逆に純一とユーノはまるでこういう場の経験があるかのように、お互いに無表情だった。

表彰式が終わって食堂に向かう途中、なのはがフェイトのこれらをクロノに聞いた所、「数百年の幽閉」と言われたがプレシアに騙され続けた事、俺が最初に出会った時のフェイトの言動を中心に“上”に説明すれば状況はかなり良くなるらしい。最も、俺もその証人としてクロノに少し付き合わなければならぬようだが……

そこからクロノはなのはにからかわれたり実はクロノが俺達より五歳年上だったり……他にもリンディさんを介して本局の技術畑からの頼みで接近戦のデータを求められたり。クロノに聞いた話だが時空管理局の武装局員はほとんどが射撃オンリーでフェイトのように接近戦を使う魔導師は数えるほどしか局員にいないらしい。確かにクロノも接近戦の魔法は持ってたけどアレは使い道が限られてくるだろう。俺としてはよくそんな状態で生き残ってこれたなあ……というのが正直な感想だ。

そして今は食堂でユーノがまたしばらく高町家に居候する事、リンディさんやエイミイさんも加わってプレシアが目指したアルハザードの話しに入っている。

「あの人が目指していたアルハザードって場所。ユーノ君は知ってるわよね」

「はい、聞いた事があります。旧暦以前……前世紀に存在していた空間で今はもう失われた秘術がいくつも眠る土地だって」

「だけど、とつくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われてる」

「あらゆる魔法がその“究極の姿”にたどり着き、その“力”を持つてさえすれば叶わぬ望みさえ無いと言われた『アルハザードの秘術』。“時間と空間を遡り、過去さえ書き換える事が出来る魔法”。“失われた命をもう一度蘇らせる魔法”。彼女はそれを求めたのね」

「はい……」

「でも、魔法を学ぶ者なら誰もが知っている『過去を遡る事も、死者を蘇らせる事も決してできない』って……」

「だから、その両方を望んだ彼女はお伽話に等しいような伝承にか頼れなかった……頼らざるをえなかったんだ」

「でも、あれだけの大魔導師が自分の命さえかけて探していたのだから、彼女はもしかして、本当に見つけたのかもしれないわ。“アルハザードの道”を。今となってはもう解らないけど………思っただけより長話しになってしまったわね、食事が冷めない内に食べましょう」

張り詰めた空気を解くかのように、リンディは声色を変えて手を動かす。クロノが「なのはには最後の食事になるかもな」と言う今まで黙っていたエイミイが「お別れが寂しいなら素直に言えばいいのになあ。クロノくんってば照れ屋さん」とツツコムと顔を赤くしてうつろたえるクロノ。更にはリンディにまで一本取られるクロノ

に純一とユーノは「ああ、コイツは表向きはしっかりしてるようでその実尻に敷かれるタイプだ……」と、九歳の思考とは思えない事を考えていた。

だが純一はその後、アルハザードの『死者を蘇らせる』という事で考えていた。フランケンシュタイン、ゾンビ、最後に海鳴に来る少し前に出会った死体加工により人間そっくりの人形を作る錬金術を学びし芸術家^{アルティスト}。地球には実在の有無はともかく、似たものないし近しいものがある。

地球がアルハザード。などとバカげた事を言う気はない。しかし不思議と近いものは古今東西揃っている。これが偶然なのかどうなのか……判断はつかない。

——たとえ土地……アルハザードという“国”が滅んでもその歴史や知識は他の国に残る。もしアルハザードの“知識”がどこかに蓄えられているなら……

くだらない妄想だ。純一はそう考えて思案を止めて食事に集中する。

純一となのははデバイス所持の関係で必要な講習と書類を記入したあと、アースラの転送ポートに来ていた。行き先は海鳴市の公園。クロノとエイミィ、リンディに別れを告げた二人は次元空間を体感

時間、一秒もかからずに通り、故郷の空気を肺に満たそうと大きく息を吸い込む。

「帰ろっか、純一くん、ユーノくん」

「ああ」

「うん」

公園を駆けていく二人と一匹。その二人の帰りを祝すようにどこから来たのか桜の花びらが風に舞う。

高町家の正門前で足を止めたなのは。その行動を不思議に思った純一も足を止めてしまう。

「なのは？」

「……………」

声をかけても返事が無い。純一には不安も出てくる。自分と違うのはは普通の子供だ。あんな命のやり取りを経験する歳じゃないし恐怖もあったはずだ。純一の思考が悪い方向に傾く。

なのははそのまま回れ右をして純一の方に向く。そして、自分が

一度も言った事が無い言葉を純一に言う。

「おかえり、純一くん」

『おかえり』家に帰ってきた『家族』に向ける言葉。そしてこの言葉に返す『家族』の言葉はただ一つ……

「ただいま、なのは」

この時、記憶を失った純一は初めて『他所の家』ではなく『我が家』に足を踏み入れた。

——数日後——

純一は疲れて寝ているのはをそのままにしてアースラに居る頃も、帰ってきた次の日から、変わらず走り続けている。いつも通り駅前まで行ってUターン。だが、以前と変わった事もある。それは街の風景を見ることが。例えば店の前で停まっているバンや軽トラからは市場で積んできた荷物を降ろす大人。診察開始前の病院前では何人もの老人が集まって世間話をしているようだ。どれも、以前の自分ならただの風景として目にも止めなかった事。

——俺は変わったのか……

自分を客観的に見た場合に出た疑問。日課を終えた純一は我が家に「ただいま」と言って真っ直ぐ風呂に向かう。十二月も終わりに近づいたのだ、掻いた汗は早めに流さないと風邪を引いてしまう。家族にそんな心配はかけたくない純一は脱衣カゴにウェアを放り込んだあと、熱いシャワーを頭から浴びる。動く事で火照った身体にシャワーの熱を加え、冷えない内にタオルで拭こうと風呂と脱衣所を繋ぐ引き戸を開けた。

「あ……」

「……おはよう……」

洗面台の前で歯磨きをするなのは首だけ純一に向かったまま固まった。純一もなのはが居た事に気づかなかったので挨拶しか出なかった。

なのはは一糸纏わぬ純一を見る。身体を動かす男子らしくやや筋肉のついた身体、事故で記憶を失った時についたのだろうか？ 身体中の傷。そして視線は下へ……

「ほ、ほへんなふぁいの……」

「い、いえこちらこそ……」

顔を真っ赤にした両者の反応は典型的だった。純一は戸を閉めて再び風呂場に。なのはは向きを百八十度変えた。

「ななななな、なのっは！ タ、タオルを取ってくれるか!？」

「うっ、うん!! お安い御用なの!!」

冷たい水で齒磨き粉を流したなのはタオルを取って戸をやや開けて風呂場に腕だけ入れる。純一は裏返った声で「ありがとう」と言って受け取る。

「あ、そ、そうだ純一くん!!」

「な、なんだ!?!」

「クロノくんから連絡があってフェイトちゃんが短い間だけどこっちに来てるの。それで会いたいって」

「わかった。先に行ってくれ。すぐ追いつく」

——海鳴市・海沿い——

レンガを積んで出来たアーチ状の橋。フェイトとの面会場所のそこには付き添いのアルフと監視役としてクロノも来ていた。フェイトはこの海の上でなのはと戦った事を思い出していると人の気配を感じた。

「フェイトちゃ〜ん!!」

走ってきているのはなのはと純一。フェイトの元まで着たあと、

クロノとアルフはユーノを連れて離れていく。純一は薄着なフェイトに自分の上着を貸して三人は海面を見ながら話しをする。

「にははは、一杯話したい事あったのに会ったら忘れちゃった」

「私もだ……だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて」

「友達になれたらいいなって思ったの。でも、今日はもうこれから出かけちゃうんだよね……」

「そうだね少し長い旅になる……」

「また会えるんだよね!!」

二人は互いに見詰め合う。なのはの隣にいた純一もフェイトの方を見る。

「……うん。少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから来てもらったのは、返事をするため」

微笑みながら自分の言葉で言うフェイト。

「え？」

「キミが言ってくれた言葉。『友達になりたい』って」

「うん、うん！」

「私にできるなら、私で良いならって……だけど私、どうして良いか解らない。だから教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか」

三人を静寂が包む。なのはと純一はフェイトが今までどういった人生を送ったか知っている。その中に、家族はいても友達はいなかった。そんなフェイトの当たり前前の言葉に悲しさを感じながら……

「簡単だよ」

「え？」

「友達になるのすごく簡単。名前を呼んではじめはそれだけでいいの『キミ』とか『あなた』とか、そういうのじゃなくてちゃんと相手の目を見てはつきり相手の名前を呼ぶの。私、高町なのは。なのはだよ！」

「なのは……」

「うん！ そう！」

「なのは……」

「うん」

「なのは」

涙をためながら手を取り合う二人。

「ありがとう、なのは」

「うん！」

言わなくてもなのはには伝わる。感謝の言葉が。

「なのはの手は暖かいね、なのは」

堪えきれず泣いてしまうのは。フェイトはなのはの涙を拭いながら、続けていく。

「一つ解ったことがある。友達が泣いてしまつと同じように自分も悲しいんだ」

「フェイトちゃん……！」

「ありがとう、なのは……」

友達として、抱き合う二人。

「今は離れてしまふけど、きつとまた会える。そうしたら、またなのはの名前を呼んでもいい？」

「うん！ うん！」

「会いたくなつたら、きつと名前を呼ぶ。だから、なのはも私を呼んで。なのはに困った事があつたら今度はきつと、私がなのはを助けるから」

別れの悲しさと、友達としての嬉しさが混じった涙を流す二人。
純一も微笑みながら、涙を流しながら見る。

「時間だ。そろそろいいか？」

クロノとしてももつと伸ばしてあげたいが今回ここに来る事もかなり無理を通してやっている。勝利を確定させる裁判だからといって不安材料は無い方がこの二人にとってもいいはずだ。だからこそ、守る。

「フェイトちゃん!!」

なのはは自分の桃色のリボンを解いてフェイトに向ける。

「思い出にできるもの、こんなしかないんだけど……」

「じゃあ、私も」

フェイトも自分の黒いリボンを解いてなのはに向ける。二人は相手のリボン手を添える。

「ありがとう、なのは」

「うん、フェイトちゃん」

「きつとまた」

「きつとまた」

互いのリボンを『友達』と交換した二人。後ろからユーノを肩に

乗せるアルフに気がついたなのははお礼と別れの言葉を告げる。

「純……………」

「ん、なんだフェイト？」

「純一も変わったよね。最初に会った時はトゲトゲしてたのかな？
怖い感じだったけど今は全然」

「『友達』の前で殺気出すヤツはいねえよ」

「うん、そうだね。それで、なのはにリボンを渡したから今渡せるものはないんだけど……………」

「それなら俺も同じだ。何にも持ってない」

「でもね、アルフが教えてくれたんだ。どうすればいいか」

——アルフが？

「それでね、ちょっとした間目を瞑ってほしいんだけど……………いい？」

「ああ」

純一は目を瞑る。渡すものは無いと言っていたが何かサプライズなものが実はあるのでは？ そう考えているからか、それとも彼が変わり始めたからか、フェイトが実行に移す気配を感じる事もしなかった。

「んっ！」

「え？」

「わお！」

「なっ！」

フェイトは両手で純一の顔を掴み、純一の唇に自分の唇を押し付ける。驚きのあまり目を開いてしまう純一だが目を瞑っているフェイトと潮風に揺れる綺麗な髪しか見えない。

「……純一に初めて、あげちゃった……」

思考がストップした純一の顔を見ずに耳まで真っ赤にしながらアルフとクロノがいる転送ポイントに向かうフェイト。恥ずかしさから純一やなのはの方を見ずにそのまま定刻通りに転送ポートが起動。三人はアースラに戻っていく。

「……純一くん……」

それは、地の底。地獄の使者からの声。

「なんなんなんなん、ナンデゴザイマシヨウ？」

「ちょっと、O H A N A S I I しようか……？」

レイジングハートを起動して周囲に結界を張り、バリアジャケットを身に纏うのは。シューティングモードのレイジングハートには既にAAクラスの砲撃が撃てる状態になっている。白いバリアジャケットが目錯覚か、真っ黒に見える純一は生物の本能が回避で

きない『死』を告げる。

「イエス、ママ……」

D・C・リリカルなのは――神の名を持つ剣士―― 《無印編・完》

第19話―なまえをよんで―（後書き）

では、予定通り無印編が完了したので修正期間に入ります。その間にも「ん？」と思うところがあれば遠慮なく言ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344t/>

D.C.・リリカルなのは—神の名を持つ剣士—

2011年12月12日07時46分発行